
星屑たちの祈り

はりがねん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑たちの祈り

【Nコード】

N4773W

【作者名】

はりがねん

【あらすじ】

スノウが目覚ますと、そこは見慣れない世界だった。違和感を覚えるも、それが何かを認識することができない。なぜなら、スノウには名前以外の記憶がなかったから――。白い虎と緑の龍に拾われ、スノウは徐々に世界を知っていく。しかし募っていく焦燥感に駆られ、スノウは見知らぬ世界を歩き始める事にした。それが一体、何を意味しているのかも知らずに。

物語の都合上、残酷な表現・不明瞭な部分が見られます。不明瞭な部分は進んでいくと分かります。気長にお待ちください。

世界観紹介（前書き）

世界の部分のみでも支障はありません。

種族（型）や属性は出るたびに物語の中で軽く紹介するつもりで
はいます。

世界観紹介

このお話はハイファンタジーに近いです。なのでいわゆる常識が通用しません。なので、世界観紹介を付ける事にしました。この要点が分かっていないと、非常に読みにくかったりします。すみません。

思いつく限りでしか上げられないので、良く分からない、ここはどうなってるの？ などと気になった所があれば指摘してください。内容によっては物語上、回答できない事もあります。ご了承ください。

・世界

この世界は常に夜の状態です。星も多いです。いわゆる「時間」の概念が存在しません。それぞれ好きな時に、好きなように過ごします。

住人達は、基本的に睡眠や食事を必要としていません。ですが、気絶する事があります。意識して眠る事も可能です。食事も摂れない訳ではないので、嗜好品として人によっては摂取しています。

果物などは町の外の木になっていたりします。植物の生態系は変わりません。ただし、日光を必要としてなかったりと、様々な不明点は見られます。

・種族（「型」^{かた}）とも。この世界では同義語として扱われます）

この世界には大きく五つの種族が存在します。なお、それぞれの種族に身体能力の差は全くありません。ただし、獣型は例外扱いとしています。

人型：限りなく純粋な人に近い姿をした種族。色など人と異なる部分が必ず存在します。獣型と同じくらい、珍しいです。そのため他の種族からは羨望と強い嫉妬を受けます。この世界では一番危険の多い種族です。

獣人型：人と獣の姿が混在した種族です。個体差が強く出るため、獣に近い獣人型（顔が獣など）や人に近い（耳や尻尾があるだけなど）獣人型がいます。もつとも多い種族と言えます。

竜人型：人と竜の姿が混在した種族です。こちらでも獣人型と同じく個体差があります。作中では「竜」と「龍」の字が混在しますが、これは西洋に近い型を「竜」、東洋に近い（蛇っぽいの）を「龍」としています。

機械型：人と機械の姿が混在した種族です。こちらでもやはり個体差が出ます。ちなみに動きは機械っぽくありません。言葉も普通に発します。機械型というだけあって面白い姿をした者もいますが、話の都合上、出ない可能性があります。「機械だからすごいんじゃないの？」と先入観にとらわれるかも知れませんが、運動能力は他の種族と変わりません。

獣型：文字通り、獣の姿をした種族です。この世界で唯一、獣の姿をしています。そのため、出来そこないとして扱われる事が多く、嫌われ者です。人型と同じくらいか、それ以上に少ないです。この種族は例外として、運動能力が他の種族と比べて抜きんでる事が多いです。運動能力は獣の種類に依存します。

・属性

種族以上に重要な要素です。基本的にこれによって得意なもの、

苦手なものが分かります。種類が豊富で、住人ですら知らない属性も存在する時があります。物語の中で出た場合のみ、随時付け足していきます。

ワタ属：この世界では特に多い属性。弱点も一番多く、とても弱い属性です。他の種族より遥かに部位の切断が容易で、その上燃えやすい性質を持っています。ただし、打撃と水には強いです。切り傷の修復も一番容易で、異物を身体の中に入れる事も、取りだす事も容易に行えます。もっとも、その分身体が大きくなったり太くなったりします。他の属性に比べると、非常に柔軟な身体です。

弱点も多いですが、利点もかなり多いです。ちなみに汚れや塵など埃は落ちにくいので、そういった環境をかなり嫌っています。

鉄属くろがね：この世界ではそこそ多い属性です。打撃、斬撃に強いですが、ただし、強い衝撃を受けると身体が凹む事もあります。ですが、凹むことは滅多にありません。

火に強いですが、熱はかなり持ちます。水に非常に弱く、長時間使っていると身体に不具合が生じます。おまけに、生じた不具合はなかなか治りません。とても打たれ強いですが、弱点にはとことん弱いのが難点です。ちなみに汚れは非常に落ちやすいので、一部のワタ属からは羨望を受けていたりします。

・その他
『パーツについて』

この世界に存在する人々は、同じ属性であれば身体のパーツ交換が可能です。ただし属性が違う場合は交換できません。

なので、身体のパーツを取り扱う仕事もあります。ただし、それは他人のパーツを交換、というより奪う行為となります。警察は存在しませんが、非合法の組織としての位置付けで問題ありません。

ちなみにパーツの一番人気は人型です。

『砂時計について』

この世界に存在する人は必ず持っています。この砂時計が何を計っているのかは、物語上、明かせません。

世界観紹介（後書き）

ここまで読んでくださった方はお疲れ様でした。ちなみに随時追加されます。

それでは、本編へどうぞ。

プロローグ（前書き）

少し悲しい話になります。シリアスです。

プロローグ

サラサラと、何かが流れていく音がする。

その音を聞くと、言い知れない不安を覚える。

急がなくてはならない。立ち止まってはならない。

理由は分からなかった。

けれど、ひとつだけ言える事がある。

私は、急がなくてはならない。

すべてが手遅れになる前に。

古びた本に囲まれて、その人物は椅子に深く腰をおろしていた。

どことなく優雅さを感じられる物腰。ただ、奇妙な事に、その人物は羊の姿をしていた。ローブに包まれているため、服の下はどのようになっているかは不明だが、顔はまぎれもなく羊。

ふわふわの毛に埋もれずに頼りなく垂れる耳。くるん、と可愛らしく巻いている角。不思議な事にその羊は眼鏡をかけている。そのせいか、どこか知的な印象を醸し出していた。

何かに気付いたかのように、羊はふむ、と読んでいた本から顔を上げる。

「また誰かが来たようですね」

羊はこの町の主だ。この町の事ならば自分の体の事のように分かる。実際、町で何が起こったのか手に取るように理解していた。

羊は目を閉じ、その人物がどこに落ちたのか探る。

——古びた路地。ゴミ置き場。羊と同じように二足で立っている、白い虎と緑の龍の姿が見えた。二人はそれぞれの腰に大きく反りの

ある剣を帯びている。湾曲刀だ。それ自体は珍しい事ではない。問題は持つている人物たちにこそある。

「おやおや、これは……。運がよいですね」

羊はかすかに笑みを浮かべる。

二人は羊の顔見知りだ。それどころか、この町にいる人で知らない人はいないほどの有名人だ。

彼女にとっては、運が良いだろう。しかし、彼にとっては悪かったと言うべきか。彼の残り時間は、もうない。しかしお人好しな彼は、そんなことなど気にせず彼女を救うだろう。その様は見なくても想像する事ができた。

羊は椅子から立ち上がり、持っていた本を書棚にしまう。

「さて、彼女は願いを叶えることができるのでしょうか」

近い内にやって来るだろう来訪者のために、羊は準備をする事にした。

1 - 1 白い虎と緑の龍（前書き）

読みにくい言葉の振り仮名を追加しました。内容は変わっていません。

1 - 1 白い虎と緑の龍

真っ暗だった。頭がぐらぐらする。まだ馴染んでいないんだ、とぼんやり思う。何が馴染んでいないのかは全く分からないが、不思議と不安はない。

「おい、起きろ。こんな所で寝てると色々持ってかれるぞー」

張りの良い声が耳に入る。それに呆れるように几帳面そうな声が続いた。

「クラウド。そんなやる気のない方法で起きると思ってるのか。それに色々では、はっきりとしない。もっと具体的な言葉で説明した方がいいだろう」

豪快な笑い声が響く。

「アクセル、お前は細かすぎる。俺ぐらいドーンと威張ってバーンと適当で良いんだ!」

「意味が分からん。分かる言葉で説明してくれ」

再び呆れたような言葉が耳に入っていた時に、視界が暗い理由をようやく理解する。

—— そうだ。目を開けないと、なにも見えない。

ゆっくりと、目を開く。建物で切り取られた空が見える。建物の隙間から見える空には、多くの星が瞬いていた。続いて身体が動かさうか、確認しながら上半身を起こす。手をついた場所が不安定だ。手元を見ると、何かがたくさん詰められている黒いビニール袋が目につく。横になっている身体も不安定なのに気付き、周囲を見回すと同じようなビニール袋が大量にあった。ビニール袋の上に落ちたらしい、と働かない頭で理解する。

「おい、アクセル。お前がうるさくしている所為で起きちまったじゃないか!」

「どう考えたら、そういう結論になる。オレよりもお前の方がずっと、うるさい」

そこには白い虎と緑の龍が服を着て二足で立っていた。その事に違和感を覚えるが、すぐに霧散する。逆に、なぜ違和感を覚えたのかが分からなかった。

「それにしても、珍しいな。ここまで人型に近い奴は久しぶりに見る。俺はクラウド。お前さん、名前は？」

クラウドと名乗った白い虎は、にやりと鋭い歯を見せて笑う。恐怖よりも愛嬌を覚えるのが不思議だった。姿に反して、警戒心を抱かせない雰囲気を持っているからだろうか。

「……………」

「喋れないのか？ その口は飾りなのか」

答えないでいると、緑の龍は睨みつけるように目を細めた。するとクラウドは緑の龍の頭を思い切り叩く。

「ばっかやる！ お前が睨むから怯えちまってるんだろ。少しは自分の顔を自覚したらどうだ。あと、手前も名乗れ」

「アクセルだ」

クラウドに言われ、渋々といった具合にアクセルは名乗った。

「……………」

「おい、クラウド。こいつの口は飾りのようだ。もしかしたら、本当に別の場所から発声するのかもしれない」

「落ち着け、馬鹿モン。どう考えても、この子の口は俺たちと同じ位置だろう。もしかしたら、生まれたばかりなのかもしれない」

クラウドの言葉にアクセルは沈黙する。アクセルは目を細めてクラウドを見た。

「捨てよう。厄介事はお免だ」

クラウドは声を上げて笑う。アクセルは何が面白いのか分からない、と目を細めている。クラウドは視線を気にせず、アクセルの背を思い切り叩きながら目尻の涙を拭いた。そして歯を出してにやりと笑う。

「いいや、こんな面白いモンを拾わずにいられるか！ せっかくだ。拾ってここに慣れるまで面倒を見れば良い」

「本気で言っているのか」

ぼんやりと二人のやり取りを眺めていると、白い虎に腰を掴まれ、軽々と持ち上げられた。正面から見ている時は気が付かなかったが、クラウドは背に大きな両刃の剣を背負っている。アクセルの方を見ると、腰に大きく反りの入った湾曲刀を差していた。

「とりあえず、場所を移動しようや。ここじゃあ、妙なのに目を付けられんとも限らんからな」

アクセルは顔を逸らす、反対はしなかった。

三人は噴水のある開けた広場にやってきた。クラウドはゆっくりと腕から噴水の縁に下ろし、腰かけさせてくれる。

「さて、お前さんはここがどこか分かるか」

首を傾げると、アクセルが目を細める。

「口で答える。それとも、まだ使い方が分からないのか」

「そう焦らせんな。言葉を出そうと意識してみろ」

——意識。あの人は、どうやってたつけ？

「……こと、ば」

口から掠れたような声が出た。しかし発声方法が分かれば、後は簡単だった。淀みなく言葉が出てくる。

「ここは、どこ？」

アクセルは鼻を鳴らして顔を背ける。それに対し、クラウドは大口を開けて笑った。

「ほらな、喋れただろう。——ようこそ、俺たちの世界へ」
意味が分からず首を傾げる。

「……？」

「理解できていない様だぞ。それに何だ、俺たちの世界とは。傍から見て痛々しい言動はやめろ」

アクセルは呆れたような溜息を吐いた。

「かっかっかつ、そう言うな。これが俺の最大の利点だ」

「汚点の間違いだ。話が逸れている。——ここは始まりの町だ。お

前、名前は何だ」

問われて首を傾げる。

——名前。

唐突なイメージが脳裏をかすめる。

白い何か。空から落ちてくる。寒い。冷たい。触りたくても触れない。消える。儚い。

「スノウ」

気が付いたら無意識の内に答えていた。クラウドはにやり、と笑う。

「そうか、スノウか。似合いの名だ。生憎あいにくと雪なんぞ、お目にかかった事がないがな」

「……雪？ 雪とはなんだ」

クラウドは目を丸める。

「お前、知らないのか。雪と言えばほら……なんだ？ まあ、とりあえず、こいつにぴったりって事だ」

「……聞いたオレが馬鹿だった」

アクセルは諦めたように息を吐く。

「しろいもの」

二人はスノウに視線を向けた。アクセルは怪訝けげんそうな視線を向けているが、クラウドは面白そうに笑っていた。

「こいつは知ってるみたいだぞ。なるほど、白いものか。そう言われればそうだった気がする」

「気がするって……。確かに、こいつの髪は真っ白だな。目は蒼い」

スノウは肩に落ちている自らの長い髪を掴つかんで、目の前に引き寄せた。確かに白い。真っ白だ。その際見えた手に違和感を覚える。

スノウは自らの手と、クラウドの手を見比べた。

「……ちがう」

「おう？ そりゃあな。種族が違えば違うだろ」

「しゅぞく？」

「おうよ。俺は獣人型だ。アクセルは竜人型だな。んで、お前は純粹な人型に近いな。見てみれば分かる」

クラウドに促され、スノウは噴水の水を覗きこむ。

そこには人がいた。長い白い髪を無造作に流し、今も一部が水面に落ちて濡れている。目は蒼く、青空を彷彿ほうふつさせた。細い身体をしている。女、と呼ばれる身体だ。その女は水面に手を伸ばし、自分に触れた。水面に映る姿が歪む。

「この辺りでは珍しいからな。気を付けた方が良い。パーツの素材も良く出来ているから盗られる可能性も捨てきれん。しばらくは俺たちと一緒にいた方がいいだろう」

「？」

言葉が難し過ぎて理解できなかった。

「とりあえず、ここにも仕方ない。まず、リブランの所に行くのが先決ではないか？ 奴なら必要な知識を詰め込んでくれるだろうから」

アクセルの言葉にクラウドは頷く。

「それもそうだな。よし、だったら羊さんの所に行くとするか」

1 - 2 勤勉な羊

スノウはクラウドの言葉に首を傾げながらも、二人の後ろをついて歩く。スノウの様子に気付いてか、アクセルが説明し始める。

「この町の町長をしている奴だ。羊の姿をしている。名前はリブラン。世話好きなんだが、お節介が過ぎる所もある」

「ひつじ……」

スノウは羊を想像してみる。羊はふわふわの毛並みをしていて、丸い角を生やしている印象だ。実物は一度も見た事はないが、概ねおおむそんな所だろう。

そこまで思い至り、不思議に思う。

（見た事がない？ なら、どうして私は知っているのだろう……）
そもそもスノウは生まれたばかりだ。なのに、なぜ自身ですら知らないはずの事を知っているのか。

「あと、あの羊さんはこの世界で一番物知りだ。知りたい事があるなら聞くといい。ある程度の事なら答えてくれるさ」

「時々、妙な言葉で返されるがな」

クラウドは苦笑いを浮かべる。

「まだ早い、いずれ分かるってやつか？」

「ああ。俺は何回かそれで追い返された事がある」

アクセルの淡々とした物言いに對し、クラウドはばつが悪そうに顔を背けた。

「そりゃあ、そのまんまだからな……」

アクセルは眉根を寄せる。

「クラウドに言われると、馬鹿にされた気がする。むしろ馬鹿にしている。オレはお前よりも頭が良いつもりだ」

クラウドはその言葉に大笑いした。

「かっかっか。それは俺を馬鹿にしているのか？ 一応、俺はお前よりも長くこの世界にいるんだが」

「それは関係ないだろう。普通、この世界に生まれたのなら最低限の知識はある。知識と経験と頭の出来は全くの別物だ。オレはお前の様な、行き当たりばったりな思考はしていない」

「お前が俺をそういう日が来るとはな、アクセル」

クラウドはにやり、と笑う。分が悪いのを悟り、アクセルは鼻を鳴らした。

「……………」

スノウは二人のやり取りを無言で眺めている。話についていく事が出来ないため、理解するために二人の会話に耳を澄ませていた。

「おお、そうだ。スノウ、お前は外を出歩く時は気を付けた方が良いぞ」

クラウドの唐突な言葉にスノウは首を傾げる。

「注目されている事に気付いていないのか」

アクセルに促され、スノウは周囲を見回す。

いくつかの視線と目があった。その視線はあまり歓迎できるものではない、と雰囲気理解する。中には、あからさまにスノウを値踏みしている様なものであった。

「さっき言ったように、純粋な人型は珍しい。スノウは純粋な人型に近いからな。それだけでも狙われる。近寄ってくる奴は無暗に信用しない方が良い」

「わかった」

スノウは頷く。

「オレ達が一緒にいるって事も関係しているがな」

アクセルの呟きにスノウは首を傾げたが、答えるつもりは無いようだった。

煉瓦で造られた建物の中に入ると、古い本の臭いが鼻をついた。

スノウは中に入り、目を丸める。

「……………ほん？」

天井近くまである本棚にスノウは驚く。その本棚には隙間なく、

本の背が並んでいた。クラウドはスノウの様子に驚いた様に振り返る。

「よく分かったな、これが本だって。俺は羊さんに聞いて初めて知ったぞ」

アクセルは近くに置かれていた本を持ち上げ、本の中を眺めた。
「……本？　なんだ？　このミミズがのたくった様な黒いモノは、生き物か？」

本のページを捲り目を細めている。クラウドもアクセルの手元を覗き込み、首を傾げた。

「さあ？」

「もじ」

スノウは呟くように答える。二人が反応するよりも早く、近くから靴音が響いた。

「よくご存じですね」

そこには羊がいた。ふわふわの毛に埋もれずに頼りなく垂れる耳くるん、と巻かれている角。それに加え、その羊は眼鏡をかけていた。

「……………」

紛れもなく羊だ。それが二本足で立ち、本を抱えて立っている。

「見ない顔ですね。生まれたばかりでしょうか」

尋ねているというよりは、確認している様だった。

「そうだ」

クラウドは肯定してにやり、と笑う。

「ここまで純粋な人に近いのは珍しいだろ。お前さんでも、やっぱり羨ましいと思うのか？」

羊——リブランは眼鏡の奥で目を細めた。

「いいえ、羨ましいとは思いません。……むしろ、憐れです」

リブランは抱えていた本を棚に仕舞う。

「さて、どういったご用件でしょうか」

「こいつの面倒をしばらく見てほしい。必要な知識が抜けている様

だから、それも教えてやってほしいんだ」

リブランはほう、とスノウを観察した。全身を隈なく観察したか
と思えば息を吐き、首を振る。

「無理ですね」

「なぜだ」

アクセルは短く問いかける。リブランは微笑を浮かべた。

「彼女は少々特殊な存在でしてね。私も、本来でしたら喜んでお引き受けいたしますが、彼女は無理です。なにより、彼女は一つの所に留まる事は不可能でしょうね」

「……………」

スノウは首を傾げる。クラウドは腕を組みながらリブランを睨みつけた。

「どういう事だ」

「彼女に残された時間は少ない。クラウド、あなたにはその言葉の意味が分かるはずですよ」

先程までの快活さは鳴りをひそめ、クラウドは目を細める。

「彼女はおそらく、あなたの方の半分の時間しかない。そして、それを補うために通常とは異なる知識を持って生まれた。その代償がその姿なんです」

「さっきから何の話をしている。オレにも分かるように説明しろ」
アクセルは眉を顰め、二人を見た。しかし二人はアクセルを無視する。

「さて、お嬢さん。こちらに来てください。あなたに見せなければならぬ物があります」

スノウはアクセルを見て、クラウドを見つめた。クラウドは行って来い、とスノウの背を押す。スノウは頷き、リブランの後をついていった。

1 - 3 砂時計（前書き）

残酷な描写あり。設定上、血は出ません。

1 - 3 砂時計

本棚に埋もれるように隠れていた扉を開き、二人は中に入っている。こちらは先程の部屋と違い、壁側に一つだけしか本棚がなかった。その本棚にしても本が所狭しと並んでいる。正面には立派な木の机。その背には窓があり、星が瞬^{またた}いているのがよく見えた。

リブランは応接用と思われるソファにスノウを座らせる。リブランは棚から食器を出し、紅茶を淹れた。机の上に出された紅茶をスノウは凝視する。

「これは完全に私の趣味です。知つての通り、我々は食事や睡眠は必要としませんか」

「……そうなの？」

スノウは反射的に聞いてしまったが、よく考えてみると常識だった。なぜ聞いてしまったのだろう。

リブランはカップを手に取り、香りを楽しんだ。

「そうです。本当にあなたはこちらの知識が欠けているようですね。それではこれから苦労するでしょう。最低限の知識は教えます。けれど、それ以上は自身でなんとかしてください」

スノウは頷く。リブランは目を細めた。

「まず、この世界は三つに分かれています。ここ、煉瓦の町。水の溢れる水の都。森に囲まれた緑の村。そしてそれらに囲まれるようにして中央に存在している砂漠地帯。ここまではよろしいですか？」

リブランはスノウの様子をうかがう。理解できていると判断し、説明を続ける。

「もう一つは型^{かた}の事。クラウドのように獣を姿を模した、獣人型。アクセルのような竜を模している者が、竜人型。そして機械に包まれている、機械型。あなたのような、限りなく人に近い姿をした存在を人型と総称して言います。——そこで大きく問題になるのが、人型の存在です」

リブランは紅茶を一口飲む。

「人型は珍しい。それ故に狙われます。知らないかもしれませんが、多くの人は人型に対して強いコンプレックスを持ちます。それも無意識の内に。それこそ自らのパーツをあなたの物に置き換えようとするほどなのです。あなたは何属性ですか？」

「……ワタ」

「一番多い属性ですね。それこそ注意しないと本当に盗られますよ。しかも、ワタ属性は部位の切断も容易に行えます。捕まったら最後、全部持つてかれますよ」

スノウは首を傾げる。

「クラウドも アクセルも ヒツジさんも、なんで とらないの？」
「我々は興味がありませんから。私はこの身体で満足していますし、クラウドとアクセルはそもそも属性が違います。仮にそうだとしても、あなたから盗る事は不可能です」

自分の身体は珍しいから危険が多い、とスノウは理解することにした。危ない、と教えられても実感が沸かないというのが本音である。

「まあ、これが最低限ですかね。これ以上は教えても仕方ありませんし——ああ、そうだ。見せたい物があつたのでした」

リブランはソファから立ち上がり、机の引き出しを探り出す。目的の物はすぐに見つかったらしく、スノウの手を持ち上げ、その上に置いた。

小さな砂時計だった。しかし砂の流れは異様に遅く、なかなか下に落ちない。それどころか逆向きにしてみても、砂の流れる方向は変わらない。常に一定方向に流れ続けている。砂時計としては欠陥品だ。一体、なにを測っているのだろうか。

「差し上げましょう」

「すなだけい？」

意図が分からず、スノウはリブランを見上げた。

「ええ、砂時計です。なにを測っているのかは、その内に分かります」

すよ。特に大切に扱う必要はありません。壊そうと思って壊せる物ではありませんから。床に落としても、叩きつけても、割れないくらい頑丈です」

「……………」

スノウは砂時計を凝視する。砂時計はそんなに頑丈だったのだろうか。

「見たくなければ身体の中に入れる事をお勧めします。動く事に支障は出ませんから。なんでしたら、お入れしましょうか？」

スノウは何かを収納するための道具を持っていない。砂時計は手の平で包み込める大きさではあるものの、常に手で持ち運ぶとなると不便だった。

スノウは左腕を差し出す。リブランは微笑んだ。

「決断が早くて何よりです」

リブランはスノウから砂時計を受け取る。引き出しからナイフを取り出し、スノウの左腕を軽く切り裂く。その中に包み込むように砂時計を埋め、懷から裁縫道具を出して裂いた部分を手際よく縫い合わせていく。リブランは糸の処理を済ませ、スノウは確認のために腕を動かしてみた。違和感を感じられない。

「すごい」

「右と比べると若干、腕が太く見えるでしょうが、それだけです」

「ありがとう」

「いえいえ。私の用事はこれだけです。さて、戻りましょうか」

スノウは立ち上がり、アクセルたちの元へと歩き出した。

*

スノウがリブランと話している頃、アクセルは落ち着きなく部屋を歩き回っていた。その様子を見て、クラウドは呆れたように声を出す。

「おいおい、もう少し落ち着いたらどうなんだ？」

「……オレはいつでも落ち着いている」

「どうだか」

クラウドは苦笑いを浮かべ、懐からある物を取り出した。それは受け取ったその時から、止まる事なく常に一定方向へと流れ続けている。アクセルには一度も見せた事がない。見せたとしても、意味を理解できない事をクラウドは知っていた。

スノウよりも倍近くある大きな砂時計は、あと少しで全てが流れ落ちる。

その意味する所は――

クラウドはそこまで考えて頭を掻く。

「らしくねえな」

泥沼に嵌^はまるであろう思考を振り払うために、クラウドは目を閉じ、背負っている剣を意識した。その剣の形を、別の形にイメージしていく。ここしばらく、暇を見つけては何度もしている行動だった。しばらくして、剣から微^{かす}かに手応えを覚える。

クラウドは笑った。

1 - 4 流れ者

スノウがクラウドたちの元に戻った時、アクセルはいなかった。

「おや、アクセルはどうしましたか？」

「あいつなら鬱陶^{うつとう}しいから外に出してきた。龍のくせに熊みたいにくろくろして、こっちがイライラしてくるってもんだ」

近くで見ている身にもなれよ、とクラウドは肩をすくめる。

「彼の落着かなさは相変わらずのようですね」

「おう。あれでもマシになったんだがな」

クラウドはもたれていた壁から離れ、スノウの元に近付いた。

「スノウ、悪いがアクセルを呼んできてくれ。俺は羊さんにちよいと用があるから」

スノウは頷くと、外へと駆け出す。クラウドはそれを見送った。リブランは目を細める。

「あなたが私に用事とは……一体、どんな厄介事なのですか？」
クラウドはにやり、と笑う。

「別に厄介事じゃねえよ。ちょっと確認するだけだ」

スノウが外に出ると、空には変わらず星が瞬いていた。

「……きれい……」

スノウは空を見上げて目を細める。

——星なんて、久しぶりに見る……？

再び違和感。胸に小さな棘が刺さっているような感じた。

（気持ち悪い）

なぜ、こんな気持ちになるのだろうか。それさえ分かれば少しはこの気持ちは和^{やわ}らぐのだろうか。

スノウは考える。だが、いくら考えても答えなど見えはしない。

当然だ。スノウは生まれたばかりなのだから、知らないのが当然の事だった。

（なんで？）

知らないはずなのに知っている。だからこそ違和感が増し、頻繁に出る既視感きしかんを煩わづらわしく思う。しかし、それと同時に安堵もしていた。スノウ自身、そうした矛盾した思いに振り回されている。

（わたしは……一体、なに？）

不意に首元に強い衝撃が襲い、スノウは気を失った。

アクセルが扉を開くと、そこにはクラウドとリブランしかいなかった。

「おい、スノウはどうした」

アクセルは二人に近寄りながら尋ねる。

「会わなかったのか？ スノウはお前を探しに行ったはずだが」

「いや、会っていない。行き違ったか？」

クラウドは眉を顰ひそめる。リブランは変わらず微笑を浮かべていた。「さて、そういうえば最近、妙なのが町に出入りしていましたね。なんでも様々なパーツを取り扱っている流れ者だとか」

「なんだと！？」

その事が何を差しているかに思い当たり、アクセルはリブランを問い詰めようとする。しかしすぐに思い留まり、踵かかを返して走って行った。クラウドは呆れたようにそれを見ている。リブランはそれを意外そうに見た。

「おや、あなたは行かないのですか？」

「お前さんは見た目に反して相当そうとう、性質たちが悪い」

クラウドは目を眇すがめる。

「分かっていて、伏せていたんだらう？ ついでに、スノウの居場所も知っているはずだ。俺は、あいつからそう聞いている」

「あいつ？ 一体、誰の事ですか。そのような人はもう、この世界には痕跡こんせきすら残っていないはずです」

クラウドは剣をリブランの喉元に突きつけた。しかし剣を突き付

けられているにも関わらず、リブランは気にしていないかのように笑った。

「あなたは昔から短気でしたね。いつ頃からでしょう、あなたが笑う事で誤魔化すようになったのは」

「話を逸らすな。腹立たしいが、この町でスノウの場所が分かるのはお前しかいない。違うか」

アクセルはその事を知らなかった。だから時間を惜しみ、手掛かりなしで探しに出たのだ。

「その通りです。よくご存じですね。誰から教わったのです」

「居眠りな獏ほくだよ」

リブランは呆れたように溜息を吐く。

「あの人にも困った事です。機密事項にも関わらず不用意に漏らすとは」

「お前らの事情なんか知ったこっちゃないし、知りたくもない」

クラウドは目を細めた。

「さっさとスノウの居所を吐け」

走り去るクラウドを見送り、リブランは先程の部屋へ戻る。

「……これは、職務違反でしょうか？ 規定に抵触していないと良いのですが」

「問題ないですよ」

いつの間にか部屋には男がいた。男は純粋な人型の姿をしている。人と全く同じと表現しても、間違いではない。黒い紳士服に身を包み、顎には髭をたくわえ、頭にはシルクハットを被っている。気取った姿が妙に様になっていた。

「ジルでしたか。驚かさないでください」

ジルは優雅に腰を折る。

「これはこれは、失礼いたしました」

リブランはこの男が苦手だった。初めて会った時から受け付けないのだ。

表には心情を欠片も出さず、リブランは微笑む。

「それで、どんな用事でしようか。あなたが使い走りをされるとは、余程の事なのでしょう」

「そう大した事でもありませんよ。先程までここにいた、白い娘の事です」

＊

アクセルはあてもなく町を走り続ける。

——外道^{げどう}が。

アクセルは舌打ちを禁じ得ない。

——なぜ人の身体をそこまでして欲しがる。

アクセルには他人のパーツを欲しがる人の気が知れなかった。アクセルのような龍の姿も人気はある。しかしアクセルは属性から、狙われる頻度は異様に低かったのだ。

「アクセル」

「クラウドか。どこで油を売っていた」

横に並んだクラウドは苦笑いを浮かべる。

「スノウの居場所を突き止めてたんだよ。……しかし、お前の勘は相変わらず鋭いな」

「こっちの方角なんだな」

「おうよ。さっさとスノウを救い出しちまおうぜ」

「当たり前だ」

二人は目的地に向け、走った。

1 - 5 獣型

目を開けると、スノウは薄暗い部屋の中で蹲^{つすくま}っていた。身体を起こして周囲を見回すが、見覚えがない。部屋全体が埃^{ほこり}っぽく、壁に触れれば砂のような塵^{ちり}が手に付いた。

（まだ、よく見えない）

スノウは膝を抱いて身を縮める。しばらくして、ようやく目が闇に慣れた。光りがあるのと同程度に見える様になり、スノウは歩き始める。

スノウのいる場所は、先程の町では見慣れない造りをいていた。部屋と部屋の境目に扉はなく、吹き抜けになっている。なおかつ床も壁も、天井までもが同じ素材——泥で固めてブロック状にした物で造られていた。手間がかかる上、スノウのようなワタ属性には最悪の環境だ。そうでなくとも長期間いれば、身体に不調をきたすだろう。ここを造った人物は、余程の変わり者だ。

スノウは立ち上がり、部屋を出る。今度は先程よりも大きな広間のような部屋に出た。高い位置で壁が何カ所か割り抜かれているため、星の明かりでぼんやりと部屋の中が照らされる。高すぎるため、そこからは脱出は出来ないようだ。横を見れば外に向けて、先程よりも大きく壁が割り抜かれている。そこから外に出る事は出来そう
だ。

それにしても、ここは何の用途で造られた建物なのだろう。

「あれ、起きちゃったよ」

割り抜かれて星明かりで影になっている部分に何かがいた。それは伏せていた身体を起こし、スノウを見つめている。

「……オオカミ？」

黒い狼だった。何かで身体を覆っているのか、毛は撫でつけられている。ゆつくりとした足取りで、狼はスノウの元へ向かった。

「大人しくあの部屋で寝ててくれないかな？　ボクは君みたいな人

型が、大嫌いなんだ。ボクの自慢の牙と爪でぐちゃぐちゃにされたくなかったら、早く戻ってよ」

「あなたは？」

狼はスノウを睨みつけ、鼻を鳴らす。

「見て分かる通り、獣型の人間。笑う？　好きなだけ笑えばいいさ。そうしたら君をやつ裂きにしても、ドーリルは怒らない。大丈夫だよ。商品としては駄目にならないようにちゃんと加減はするし、捌く手間も省けて一石二鳥」

「……けものがた？」

スノウは意味を理解できず、首をかしげる。狼は牙を見せて唸った。

「さっさと戻れ。ボクを怒らせたいのか」

「……ここは、どこ？」

「質問できる立場だと思ってる？」

スノウは威嚇する狼に構わず、続ける。

「ここは、わたしにもよくないけど、あなたにもよくないでしょう。いどうしたほうが、いい」

狼は鼻で笑った。

「そんなのは分かってるよ。だからここにしたんだ。ここなら誰も寄って来ないからね。ドーリルも冴えてる」

「……からだを、わるくするかも　しれないのに？」

「大丈夫だよ。ボクたちはビニールで身体を覆っているから、そんなの関係ないもんね。——普段は抜けてるけど、今回はすごい冴えてると思わない？　これ考えたのボクの相棒なんだよ。すごいよね」

「……………」
狼の毛が不自然なのは、ビニールで身体を覆っている所為のようだ。狼は自身の身体を示し、誇らしげに笑う。

「それでね、ドーリルはすごい良い奴なんだよ。機械型で人の形をしているけど、人の形をしていないボクの事を変な目で見ないんだ。そんな人、ボク、初めて見たんだよ。それでね、こういう商売して

るんだけどね、他の奴等みたいに乱暴したりしないんだよ？“危なくなったら速攻、逃げる！これ常識！”って、すごい堂々としてるんだ。憧れちゃうよね」

「……………」

「なんだよ、さっきから黙って。……そうか、ボクのドーリルに恐れをなしたんだな！それは仕方ないよ。ドーリルはすごいからね」再び狼の自慢が始まる。

「でね、ドーリルはね——」

「……………」

「——それでね、その時のドーリルは本当に痺れた^{しび}ね。こう、顔をキリツと決めてさ“命あつての商売なんだ。いざという時には切り捨てるのも大切なんだ”って。カー！痺れるー！」

そこで狼は不意に言葉を止める。

「なんで笑ってるのさ」

「？」

スノウは口元を手で触ると、わずかに口の端が上がっていた。

「……そうか、分かったぞ！ドーリルのカツコよさに、お前も憧れたんだな！？」

「ちがう」

スノウは即座に否定すると、狼は硬直した。

「あなたもドーリルも、おたがい大切なんだね」

スノウは笑みを浮かべる。狼は誇らしげに胸を張った。

「そうだよ！獣型は成りそこないだって言われるけど、ドーリルは全く気にしないんだ。だからボクもドーリルのために頑張ってるんだよ」

「それで、なんでわたしはここにいるの？」

スノウはようやく本題を切り出す事が出来て安堵する。狼はにやり、と笑う。

「当然、売るためなんだよ！ちなみに、ばら売りだから覚悟して

ね。痛くはないけど、気分的に嫌なものだから」

「……………」

スノウが沈黙していると、どこからか間の抜けた声が外から聞こえた。

「おい、カルー。売り手がついたぞー。しばらくしたら、すぐ来るだろうから今の内に退却するぞー」

「はい」

狼は無邪気に返事をする、スノウに背を向けて歩き出す。

「ボクたちの商売はここまで。買い取り手がすぐ来るだろうから、逃げるよりも隠れた方が懸命だよ。——それじゃ、命がけの鬼ごっこ、頑張ってねー」

狼は楽しそうに尻尾を振って、スノウを置いていった。

1 - 6 水晶

スノウはしばらく呆然と狼を見送っていたが、聞こえてくる足音に状況を思い出す。

（とりあえず、逃げないと）

スノウは周囲を見回すが、今いる広間のような空間に隠れ場所となるような所はない。そもそも聞こえてくる足音は複数だ。ここを風潰^{ふうみつぶ}しに探されてしまえば逃げ場はない。

そんな時、地下へと続く階段を発見した。スノウは駆け出し、急いで階段を下っていく。再び視界が暗闇に染められるが、視界が馴染むのを待たずにそのまま進む。

初めはまっすぐに進んでいた。しかし、それではすぐに見つかる可能性がある。スノウは適当に割り抜かれた壁を曲がり、走っていく。足音が地下に反響するが、そんな事に構っていらなかった。どれだけ曲がっても、似たような造りが延々と続いている。その事がスノウに更なる焦燥感を募らせた。

走っても走っても変わらない風景。その内、スノウはどこに向かって走っているのか、全く分からなくなってしまった。

（まるで迷路みたい。迷路は苦手なのにな……）

スノウは適当に走りながら、そんな暢気な事を考える。

「いたぞ！ こっちだ！」

その怒声に、スノウは現実に戻った。

振り返ると、見た事のない人がスノウを追いかけている。相手の顔は確認しなかった。そんな事をしているはずを追いつかれてしまふ。人型は他の種族よりも走るのが遅い訳ではないが、スノウの足はあまり早くない。

スノウは思考を振り払う。そこからは何も考えずに無我夢中で走った。適当に曲がり、相手の視界から逃れる。しかし、すぐに見つかってしまう。それでもスノウは諦めずに走る。運の良い事に、こ

の身体は疲れ知らずだ。相手もそうだが、それだけは救いと思えるしかない。

スノウが曲がると、そこは行き止まりだった。運が悪いと思いつつも、これまで行き止まりに行き着かなかっただけでも十分運が良いと考える事にする。そう思った所で状況は変わらないが、そう思った方が精神的に楽だった。

「……………」

スノウは壁に違和感を覚えた。違和感のする壁に近付き、壁が平らではない事に気付く。この建物は泥を固めたブロック状の物を組み合わせて作られているが、それらは規則的に並べられ、材質こそは変わっているが普通の建物なのだ。それなのに、この壁だけ不格好になっている。衝撃を与えれば崩せそうだった。

「見つけたぞ！」

スノウは覚悟を決め、その壁に体当たりをする。壁を成していたブロックがずれ、壁が崩落した。突如溢れた光りに反射的に目を瞑る。

「うわ、なんだ!？」

「なんだ、ここは！ 目が潰れる！」

追いかけていた者たちが、反射的に来た道を引き返していく。スノウは体当たりをしたまま倒れ込んでしまったので、同じように逃げる事は出来なかった。

しばらく目を閉じていたが、なにも起こらない事を知り、スノウは恐る恐る目を開ける。

その空間は緑に溢れていた。木々は光りを燦々と受け、緑の葉が生き生きと萌えている。中央には平たい台があり、そこから絶え間なく水が溢れ、スノウの所まで流れていた。台の上には大きな水晶一言で表すならば、そこは異様な光景だった。

この世界は常に闇に包まれている。そこに星が常に輝き、地上を照らしているのだ。それ以外の光りとなれば、火か電灯かに限られている。火はそれこそ大災害になる可能性があるので禁止されている。

た。そのため、室内を照らすための手段は電灯に限られる。しかし、この空間の光りは電灯では決して有り得ない輝きをしていた。

「ここは……」

スノウは上に乗っていたブロックを落としながら立ち上がり、周囲を見回す。壁には蔦が這っているためか、スノウが破壊した壁の部分が異彩を放っている。スノウが破壊した壁を見ると、これは現実なのだ、と実感できた。

「……たすかった……のかな？」

しかし来た道に戻る気はしない。まだ戻るには危険な気がした。スノウは中央にある水晶に近寄る。周囲を確認しながらも、スノウの意識は先程からこの水晶に注がれていた。

（綺麗。だけど、なんだか怖い……でも、触りたい）

スノウは恐る恐る手を伸ばす。手は震えていた。震える理由は、心当たりが多すぎて分らない。

スノウの手が水晶に触れようとしていた。

「駄目だ！ スノウ、そいつに触るな！」

突然呼ばれ、スノウは身体を震わせる。その拍子にスノウの手は水晶に触れてしまった。

仕上げが終わった時、クラウドの声が響いた。

「おい、一体どうしたってんだ？」

アクセルは湾曲刀の背で肩を叩きつつ、クラウドの元へと歩く。スノウの身体を狙っていた連中は、クラウドとアクセルがほとんど壊していた。誰かが来ない限り、彼らは動く事もままならないだろう。

クラウドの元へ来たアクセルは、その光景に目を奪われた。

「こ……ここは、一体……」

しかしクラウドは逆に顔を顰めている。

「最悪だ」

クラウドの言葉に、アクセルは我に返った。クラウドの視線の先

を追う。

「スノウ！」

アクセルは駆け出す。

水晶の置かれていた台の傍で、スノウは倒れていた。身体は水に濡れ、濡れていない部分にしても埃まみれだった。

「そんな切羽詰まったような声なんか出さなくても平気だったの。ちよいと気絶してるだけだから」

「どういう事だ」

アクセルはクラウドを睨みつける。クラウドはスノウの傍に身を屈め、スノウを肩に担ぐ。

「とりあえず、ここを出るのが先だ。違うか？」

アクセルは自身の属性を思い出し、舌打ちをする。クラウドは嘆息した。

「そんなに焦らなくても、大丈夫だ。……本当に大変なのは、これからだしな」

アクセルがその言葉を実感するのは、ずっと先の事だった。

1 - 7 始まりの夢

急げ、急げ！

なにかに急ぎ立てられるかのように、その小さな生き物は走る。

（……なんで、こんなに急いでるんだっけ？）

そんな事はどうでもいい！

私は、あの人を救わないと。助けないと！

（あの人って……誰？）

急ぎ立てるような焦燥感とは逆に、妙に冷えた部分を持つ自分に驚いた。

急がないと！ 早く早く！

手遅れにならない内に！

（だから、なにをそんなに急いでいるの？）

*

「おかあさん、アレかってよ」

四歳ほどの小さな子どもが母の手を引きながら指で示す。

「だめよ。私たちのマンションはペット禁止なの。諦めなさい」

母親は子どもと目線を合わせ、優しく諭す。しかし子どもはそれを拒絶するように首を振った。

「いやいやいや。ほしいよ、おかあさん かってよ」

子どもは全身を使って駄々をこね始める。周囲にいた買い物客たちが何事か、とその親子に視線を向けた。母親は衆目の目を気にせ

ず、落ち着いて続ける。

「だめよ、——ちゃん。こればかりは、どうしようもないのよ。我慢しなさい、ね？——ちゃんが、もっと大きくなったら飼おうね。……そうだ」

母親は何かを思いついたかのように子どもの手を引いて歩く。子どもは名残惜しそうに後ろを見ながらも、母親の後についていった。母親は一つの箱を持ち上げ、子どもに見せる。

「これなんか、どう？あの子とそっくりでしょ。これなら買ってあげれるわ」

子どもは箱の中を凝視し、母親を見上げた。

「ぜんぜんちがうよ！あの子の方がずっと、ずっとかわいいよ！それにこれは、うごかないよ」

「そうかしら。確かに動かないけど、とってもとっても可愛いわよ？」

「かわいいけど、ちがうの！」

子どもは背を向け、先程の動物がいた場所へと走っていく。ガラスのケースにへばり付き、中にいる動物をキラキラした目で見つめていた。

「……あれくらいの子なら、これでも大丈夫だと思ったんだけど」

母親は軽く溜息をついて箱を元の場所へと戻す。子どもの背から、ガラスケースの中を覗き込んだ。

「おかあさん！やっぱりこの子の方が、ずっとかわいいよ」

「はいはい。そんなに大きな声を出すと、その子が驚いちゃうわよ。しー、ね」

母親は口元に指をあて、子どもを見た。すると、子どもの方も母親の真似をする。

「しー。うん、驚いちゃうもんね。驚かせてごめんね」

すると中の動物が何かしたのか、子どもが小さな声で歓声を上げていた。はしゃぐ子どもを母親は苦笑いを浮かべて見ている。

今日は寒い日らしい。通る人々は皆、服を着込んでいつもよりも一回りほど大きく見えた。

「これ、ください」

先日の子どもの母親だった。店員は愛想のよい笑みを浮かべ、差し出された物を包装していく。今日は特別な日らしく、包装の紙が洒落^{しゃれ}た物だった。

「ありがとうございます」

母親は受け取り、家へと向かう。

「喜んでくれるといいけど……」

母親の呟きを聞く者はいない。母親は家の扉を開け、中へと入って行った。おかえり、と子どもが走って母親を迎える。弾んだ声。子どもは何かを母親に期待している様だった。

「ケーキ、かってきた？」

「ええ、買ってきたわよ。ほら」

母親は袋を示す。子どもはケーキの袋を受け取ろうとするが、母親が不安そうに聞く。

「大丈夫？ 落したり、ぶついたりしたら大変な事になるからね。気を付けるのよ」

「だいじょうぶー」

子どもは走って冷蔵庫へと向かっていった。途中の角で袋を軽くぶつけていたが、子どもは喜びのあまり気付いていない。母親はそれを落ち着かない様子で見守っていた。

子どもは両親といつもより豪華な夕食を食べ、はしゃいでいた。

時折聞こえてくる言葉から推測するに、今日はクリスマスという日らしい。クリスマスにはサンタサンが来て、子どもが寝ている間にプレゼントを枕元に置くそうだ。会話の様子から、両親はサンタサンを知っている様だった。会話の端々からそんな印象を受ける。

「良い子にしてないとサンタさんが来ないよ」や「サンタさんは――」

―の欲しい物をくれるんだろうけど、サンタさんはちょっと歳だからお家を間違えちゃうかもね」がその筆頭だった。その度に子どもは反論するが、良いようにあしらわれている。

「さあ、そろそろ寝なさい」

母親が眠そうに眼を擦る^{こす}子どもをベッドへと誘導していく。子どもは横になるとすぐに寝入った。母親は微笑みを浮かべ、子どもの頭を撫で、布団を被^{かぶ}せて部屋を出ていく。

しばらくして、母親は先程の箱を持って現れた。それをそっと、子どもの枕元に置く。

こうして夜は何事もなく過ぎて行つた。

朝になり、子どもは枕元に置かれている、包装された箱に気が付いた。子どもは包装紙を適当に剥がしていく。そうして現れた物に、子どもは目に見えて落胆した。

「……だから、ちがうのに」

1 - 8 流れ星

スノウが目を覚ますと高い天井が見えた。起き上がり、周囲を見回すとスノウは本棚に囲まれている事に気が付く。見覚えのある場所だった。

「目が覚めたか」

アクセルは寄りかかっていた壁から離れ、スノウに近付く。

「リブランに仮眠室を借りた。宿を借りても良かったんだが、目立ち過ぎるからな」

「クラウドは？」

スノウはクラウドがいない事に首をかしげる。

「さあな。散歩でもしてるんじゃないか？ そんなことより、身体は大丈夫か？ 外傷がないことは一応確認したが、気分が悪かったり、何かに気付いたら言うといい」

スノウは立ち上がって身体を動かし、確認した。

「……ふぐあいは ないよ」

「なら、いい」

「どこに行くの？」

背を向けて歩き出そうとするアクセルに、スノウは尋ねる。

「散歩だ。ついでにクラウドを探してスノウが起きた事を知らせてくる」

「わたしも行く」

「まだ安静にしていた方が良くと思うが……」

スノウは気にせず、アクセルの後ろをついて行く。アクセルはしばらくスノウを見ていたが、何かを諦めたように溜息をついた。

外に出ると変わらず空は暗く、星が瞬いている。時折、星が流れるのをスノウは不思議そうに眺めた。

「ながれぼし」

スノウは空を指差す。

「珍しくもなんともないだろう。ここでなくとも、常にどこかで星は流れている」

「そうなの？」

「ああ。常識だ」

スノウは再び空を見上げた。スノウはふと、奇妙な話を思い出す。ながればしが 流れているあいだに、三回おねがいをとなえるとそれが叶うんだって」

「そんな話は初めて聞く。だが、だとしたら随分な大盤振る舞いだな」

「なんで？」

「どこかで必ず星は流れている。だとしたら、願い事は叶え放題だ」スノウは微笑んだ。

「なら、みんな幸せになれるね」

「……さあな」

クラウドは広場にいた。噴水の縁^{へり}に座り、星空を見上げている。

「こんな所にいたのか」

アクセルが声をかけると、クラウドはアクセルに向かってにやり、と笑う。

「ちょうど良い所に来たな」

「なんだ？ 厄介事はご免だぞ」

「つれないねえ、とクラウドは立ち上がる。

「ほらよ」

クラウドは手に持っていた物をアクセルに投げ渡した。アクセルは受け取ったものを訝しげに見る。スノウもアクセルの手元を覗き込み、アクセルの腰に差してある湾曲刀と見比べた。

「アクセルのと おなじだね」

アクセルはクラウドを睨みつける。

「なぜお前が湾曲刀を持っている。それに、お前の得物はどうした」
「そいつだよ」

クラウドの背に背負っているはずの剣はない。しかし同じ剣として渡されたのは全く種類の違う物だ。一体、どのように変形させたというのか。

「時間ギリギリだったからな。お前に届けられないんじゃないかと冷や冷やしてたぜ。大切に扱えよ。俺の愛剣だったんだからよ」

「話が見えない」

アクセルは目を細める。クラウドは細かい事は気にするな、と笑った。

「なあ、アクセル」

「なんだ」

クラウドは空を見上げる。アクセルもつられて空を見上げた。

「この星が何なのか、気になった事ないか？」

「気になるも何も、気が付いたらそこにあった。それ以上でもそれ以下でもない」

「分かりにくい奴だ」

アクセルは星の事なんてどうでも良かった。深く考えたことなどない。クラウドはぼつり、と呟いた。

「この星はな、願いの数だ」

「願い？」

先程のスノウのような話だろうか、とアクセルは考える。

「星が流れている間に三回、願い事を唱えると叶うというものか？それなら先程スノウから聞いたが」

クラウドは目を丸め、次いで大きな声を上げて笑った。スノウは首をかしげる。

「なんだそれは。随分と簡単な叶え方だな。——ほんと、そんな簡単に叶えられたら良かったのにな」

「どうしたんだ、クラウド。なんか常にも増して、変だ。変な物でも拾い食いたか？」

「お前は俺をなんだと思ってるんだ」

クラウドはアクセルに呆れたような視線を投げた。アクセルは心

外だ、という風に目を細める。

「まあ、いい。俺はここで終わりだからな」

「話が見えない」

「じゃあ、最後のヒントだ」

クラウドはにやり、と笑う。その笑みはどこか悲しげだった。

「この星たちは、願いの数であり——命の数だ」

スノウはクラウドの言葉に首をかしげている。アクセルは眉を顰めた。

「意味がわからない」

「今に分かる」

クラウドは苦笑いをする。クラウドはスノウに近寄り、頭を撫でた。

「お前さんにはもつと色々教えてやりたかったな。まあ、俺の事なんて忘れちまうだろうけどな」

「？ わすれないよ。わたしは、わすれない」

「そうか。だが、期待はしてない。アクセル、スノウが俺の事を覚えていなくても責めるなよ」

クラウドはスノウの頭から手を離れた。

「スノウは忘れない、と言っているだろう。なぜ、そんな事を言う」

「それが、この世界のルールだからさ」

不意に、クラウドの身体から小さな光りが舞い上がる。粒子のような小さな光りは、クラウドの身体中から溢れていた。

スノウはきれい、と呟くが、クラウドは肩をすくめている。

「きれい、か。皮肉だな。まあ、良いけどよ」

「どうしたんだ？ 新手の芸か？」

アクセルは困惑して、訳の分からない事を口走っていた。

「そんな良いモンでもないさ。まあ、俺も初めて見た時は驚いたしその間にも光りはクラウドの身体から、止まる事なく溢れ出る。

次第にクラウドの身体の輪郭が曖昧になってきた。

「“スターダスト現象”。そう呼ばれてるらしいな。まあ、俺らに

したら上等な最期だ」

「何を言っている」

クラウドの身体から溢れる光りはとどまる事を知らない。スノウはそれと同時に、自分の中から何かが消えていくのを感じていた。

「……クラウド」

スノウはクラウドに触ろうとしたが、その手はクラウドの身体をすり抜ける。スノウは不思議そうに自身の手を見つめた。

クラウドは苦笑する。

「こうなったら、誰にも止める事はできないのさ。……しかし、最期を看取ってもらえるのは、なかなか気分がいいな。おまけに、一人は俺の事を忘れない。アクセルにしてみたら大迷惑だろうがな」
クラウドの身体はもはや存在しない。光りの塊がそこにあるだけ。
「クラウド、いい加減にしろ！ 話が見えない！」
アクセルがクラウドを掴もうとするが、やはりその手もすり抜ける。

お前と一緒にいるのは、案外楽しかったぜ。

クラウドは光りに溶けた。その光りも、すぐに消えていく。まるで何もなかったかのように。

アクセルは呆然と手を伸ばしたまま固まっていた。スノウはそんなアクセルは不思議そうに見つめてる。

——空の星が、ひとつ流れた。

1 - 8 流れ星（後書き）

ここでもうやく第一章は終わりです。次は幕間が入ります。
そしてこの話からもうやくスノウの言葉に漢字が混ざるようにな
ります。……長かった。

スノウの第一章での精神年齢は小学生低学年くらいです。漢字の
チョイスは適当です。低学年で習う漢字とか関係ありません。

幕間（前書き）

ようやくマーティ登場。 獏はわりと好きなキャラです。

幕間

その空間は暗闇の中に存在していた。

その空間には不自然にドーナツ状の円卓が存在している。その円卓は座席が四つしかなく、なおかつ、その一つは埋まっていた。

「すーすー……」

その座席の主は心地よさそうに、机に突っ伏して惰眠を貪^{むさぼ}っている。空間に穴を開けてやって来たリブランは、その様子を見て呆れた。

「……いつものように、ほとんど集まっていないのはいいとして。なぜあなたはこんな所で眠っているのですか、猯^{ばく}」

リブランは猯に近寄り、身体を揺する。猯は後もう少し、と寝言を唱えた。

「………まともな人が欲しいですよ、本当に」

「おやおや、リブランさん。猯さん。お集まりですか？」

紳士服に身を包んだ男——ジルがどこからともなく現れる。リブランは嫌な奴が来た、と内心眉を顰めつつ、にこやかに答えた。

「ええ。あちらは時間という概念がありませんから、遅刻しないように来たんですよ」

ジルは納得したようだ。足りない人員を探して首を巡らす。

「まだマーティは来ていないようですね」

「あの人に時間を守れ、というのが難しい事です。違いますか」

ジルは苦笑いを浮かべた。

「そうかもしれませんね」

リブランは自身の座席へと着く。猯を横目で見るが、まだ眠っていた。

「猯さん。そろそろ時間になります。お目覚めください」

ジルの言葉に猯は、目を閉じたまま起き上がる。

「むー……もう、そんな時間なんだな」

やたらと間延びした声。かとすれば、未だに夢の中にいるのではないかと邪推してしまうようだ。しかし、獏は普段からこの状態である。これが起きている状態なのだ。

「ええ、時間です。マーティは遅刻ですね」

「はいはいはい。遅刻じゃないよー！ギリギリセーフ！」

空席近くの空間が歪み、元気よく小柄な人物が現れる。

「ういーっす」

片手を上げて笑顔を振りまく人物こそ、マーティである。

マーティは勢いよく座席に座った。そしてジルを睨みつける。

「セーフ、でしょ？」

ジルは苦笑いする。

「そうしておきますか。次からは許しませんよ」

「はい」

このやりとりも何度目になるか分からない。それほど頻繁にマーティは遅刻するのだ。

「では、会議を始めます」

「で、なにすんの？」

ジルの言葉を遮るようにマーティが声を上げる。リブランは相変わらずの破天荒な様子に呆れた。

「マーティ、少しは人の話を聞いた方が良いですよ」

「人じゃないけどね」

ジルは軽く咳払いをする。二人は口を嚙み、獏は漕いでいた船を止めた。

「さて、今回皆さんをお呼びしたのは他でもなく、あの娘に関してでございます」

「あの娘……スノウの事ですね」

ジルは頷く。

「誰、それ」

マーティは目を細める。

「彼女の存在は、少タイレギュラーでしてね。難易度を上げる必要

があるのですよ」

その言葉にマーティは目を丸めた。

「珍しい。ちゃんと参加してるんだ。最近ではそういう奴等、ぐつと減っちゃったからね。久しぶりにはっちゃけたいし、いいんじゃないの？」

「……………」

リブランはマーティを無言で眺める。ジルは知ってか知らずか――いや、知っているだろう。ジルはマーティに爆弾を落とす。

「彼女、限りなく人に近い姿をしているのですよ」

マーティの肩がびく、と震えた。へえ、とマーティは顔を歪める。

「限りなく人に近い、ね。愛されてたんだ？」

「そのようですね。愛情の深さに比例しますから」

「嫌い」

マーティは呟く。

「そんな奴、大嫌い。大嫌い大嫌い大嫌い。ねえ、そいつ。ぐちゃぐちゃにしてもいいよね？ いいんでしょ？」

マーティは子供が面白い悪戯を思いついたかのような、笑みを浮かべていた。だが、そこにあるのは深い憎悪。

「あなたが直接、手を下す事は禁止されています。ご存知ですよね」
「知ってるよー。だから、そうするように、周りを誘導するだけ。」

難易度も自然に上がるし、良い事づくしじゃん？」

「……………」

リブランは無言を貫く。獏は眠そうに眉を擦こすっていた。

「好きにしても良いとお達しです。マーティ、あなたの権限を超えない範囲で好きになさい」

マーティはにやり、と笑う。

「りょーかい。じゃあ、早速仕込みをしなきゃね。それじゃねー、ばいばい」

マーティは暗闇に溶けて消えた。

リブランはしばらくその闇を凝視し、大きな溜息をつく。

「なぜ彼女を走らせるのです。あれではスノウが壊れてしましますよ」

「構いません。彼女は通過地点を通り過ぎれば、確実に叶える事が出来るのですから」

スノウにとって、最期の問題は簡単すぎるのだ。

「記憶、ですね。それは分かりますが、マーティが異様に張り切っています。越権行為に及ぶやもしれません」

「構いませんよ。そうなれば処分するだけですから」

リブランはジルの言葉に眉を顰める。

彼にとってはリブランも、マーティも、獏もただの駒。箱庭を運営するために必要なただの駒なのだ。

「マーティ自身も忘れているでしょうが、マーティも十分この世界にとつては異分子なのです。排除できる理由が出来ればそれもよしと考えています」

「それは、上からのお達しですか？」

「いいえ、ワタシの独断ですよ。我を忘れて暴走するような駒はいりません。マーティも十分知っているはずですから、問題はありませんよ」

リブランは居心地の悪さを覚え、闇に溶けてその場を去った。

2 - 1 忘却（前書き）

第二章スタート

2 - 1 忘却

アクセルは呆然と、正面を見つめていた。アクセルの背はスノウよりも頭ひとつ分ほど大きい。なので、スノウは自然とアクセルを見上げる形となる。

スノウはアクセルが動かないのを不思議そうに見つめていた。

「どうしたの」

スノウはアクセルの視線の先に目を向ける。しかしアクセルの視線の先に何も無い。スノウには、なぜアクセルが呆然としているのか分からなかった。

「……なぜ、クラウドは消えたんだ」

独白のような言葉にスノウは首をかしげる。

「クラウド？」

「ああ。光りになって、消えちゃった……」

「？」

不思議そうに首をかしげるスノウの様子を見て、アクセルはクラウドの言葉を思い出した。

『スノウが俺の事を覚えていなくても責めるなよ』

アクセルはまさか、と思う。そんなはずがない、と即座に否定する。しかし疑念は消えない。アクセルはスノウを見た。

「なあ、スノウ。クラウドって覚えているか？」

「だあれ」

スノウは首をかしげる。

「大柄な、白い虎だ。やたらと声がかくて、勝手に人の頭を叩いて、よく笑ってた。……本当に覚えていないのか？」

「わかんない」

スノウは首を横に振った。

「お前を見つけたのも、クラウドだ。オレは最初、放っておこうと思っていたんだ。けれど、クラウドがスノウを拾った。オレは厄介

事はご免だと言ったのに」

スノウの反応は変わらない。

「なあ、本当に覚えていないのか、スノウ」

アクセルはスノウと視線を合わせる。しかし、スノウは首を振った。

「知らない。わたしは、アクセルに拾われた。その時、ほかにはダメもいなかった」

アクセルは信じられなかった。いや、信じたくなかった。

スノウをリブランに預け、アクセルは町の人々に訪ねまわる。しかし、結果は全員同じ。クラウドの事を誰も覚えていなかった。かつて、クラウドと共に呼ばれ続けた異名も、今やアクセル一人だけの物になっている。

（どういう事だ）

アクセルの心に焦りが積もっていく。

（なぜ、誰もクラウドの事を覚えていない！）

『それが、この世界のルールだからさ』

クラウドの言葉が頭の中をぐるぐると回っていた。

リブランの元へ戻った時、クラウドの存在が見えない何かによって痕跡すら消された事を、アクセルは納得せざる負えなかった。

「ようやくお帰りですか」

「ああ……なあ、お前も本当にクラウドの事を覚えていないのか？」
アクセルは駄目元でリブランに尋ねる。希望は持っていなかった。ただの確認作業だ。

「さて、それは一体どなたの事でしょうか？」

「……いや、いい」

少なくとも、この町でクラウドの事を覚えているのは、アクセルしかいなかった。

アクセルは本の敷き詰められた棚の奥へと進み、スノウを見つめる。スノウは机に本を広げ、椅子に座った状態で眠っていた。

「彼女はお休み中そうですね。あなたも疲れが溜まっているのでありませんか？」

「冗談はいらん。オレたちは疲れない。スノウは規格外だ」

リブランは微笑みを浮かべる。

「……あなたは時折、本当の姿を見破る。本当に恐ろしい方です」

アクセルは怪訝そうにリブランを見た。

「何を言っている。分かりやすい言葉で話せ」

「それは出来ませんね」

リブランは微笑みを浮かべる。アクセルはその笑みを信用できなかった。

「アクセル、帰ってきたの？」

スノウは目を擦りながら、アクセルを見上げる。アクセルはリブランを睨んだ後、溜息をついた。

「ああ。——スノウ、お前はリブランの世話になるといい」

リブランは目を丸める。アクセルはリブランが何かを言う前に押し留めた。

「スノウが自立できるまでで良い。そんなに時間は掛からないはずだ」

「なんで？」

スノウは首をかしげる。

「オレは、この町を出るからだ」

町の外ならば、クラウドの事を覚えている人がいるかもしれない。だが同時に、それが有り得ない事だと理解していた。アクセルは悪足掻きだと自覚している。そんな不毛な旅の為に、スノウを連れ歩くわけにはいかなかった。

「それなら大丈夫」

スノウは椅子から立ち上がり、アクセルの目の前まで歩く。

「わたしも、行かないといけない」

「……なにを言っている」

「行かないといけないの。行かないと、わたしはきっと、後悔する。」

だから、行く」

アクセルはこの時になって、ようやくスノウの様子が変わった事に気付いた。今まではどこか稚拙な所があったが、今は明確な目的を持って進もうとしている。

「行ってくて、どこにいくつもりだ？」

スノウは肩を落とす。

「わからない」

「わからないって……」

アクセルは脱力した。スノウが成長したように思えたが、やはり変わっていないようだ。

「でも、行かないといけない。行かないと」

スノウは熱に浮かされたように呟き続ける。

「まだ、まだ大丈夫……でも、行かないと。急がないと………わたし、なにをこんなに焦っているの………？」

アクセルはスノウに声をかけようとしたが、それはリブランの言葉に遮られた。

「まあまあ、このままスノウを私の元に置いておいても遅からず、飛び出してしまうでしょう。そうになると、外は彼女にとって危険がいっぱいです。ただでさえ珍しい人型をしているのに、常識も知らないと知られば、恰好の獲物になってしまいますよ。」

それくらいでしたら、アクセル。あなたが連れていくと良い。あなたも安心、スノウも安全。完璧です」

「お前も厄介者を受け入れなくて済む」

「分かっていただければ、結構です」

アクセルはスノウを見つめた。スノウもアクセルを真っ直ぐ見返す。しばらくして、アクセルは肩を落とした。

「好きにしろ」

スノウは無邪気な笑みを浮かべる。

「ありがとう」

2 - 2 砂漠越え（前書き）

本当は一時間前には書き終えたはずなのに、なぜか半分しか保存されていなかったため、書き直しました。思い出しながら書こうとしましたが、後半は少し内容が変わってしまいました。なるべく最初に近づけようとしたのですが、無理でした。すみません。

2 - 2 砂漠越え

二人はすぐに煉瓦の町を出た。

この世界では街道というものが存在しない。その代わりに列車が通っている。時間の概念のないため、この世界には時刻表などは存在しない。そのため、歩いて移動するのが普通である。気まぐれに現れる列車を利用する人は少ないのだ。

スノウは町の外に広がる一面の砂漠を見て、若干身を引いた。ワタ属であるスノウは、埃と砂を本能的に嫌う。一度、身体に砂が付くと、なかなか落ちないのである。

歩き出そうとしないスノウをアクセルは怪訝そうに見た。

「どうした。町に帰るのか」

「……列車、待たないの？」

「^{すが}……列車、待たないの？」
縋るようなスノウの視線を受け、アクセルは事情を察する。だがアクセルは、いつ来るかも分からない列車を待つつもりはなかった。「列車はいつ来るかは分らん。そんな物を待っているだけ無駄だ。それくらいだったら、自分で歩いた方がマシだ」

「アクセルは、何属？」

アクセルは眉を顰める。

「それを聞くのはマナー違反だ。隠すのが普通だ」

属性によって特性が変わる為^{ため}である。強みになる場合もあるが、弱点として突かれる事が多い。無暗に教えるのは危険な行為なのだ。

「……そうなの？」

「常識だ」

スノウは沈黙した。

「お前の場合は特に気を付けた方がいい。人型の上にワタ属だったりしたら、目も当てられない」

「……………」

「さっさと行くぞ」

アクセルは線路沿いに歩き始める。スノウも恐る恐るながらも砂の上を歩き始めた。

スノウには、どれくらい進んだのか全く分からなかった。後ろを振り返っても、見えるのは一面の砂漠。そしてどこまでも続く線路だけである。空には変わらず満天の星が瞬いていた。

（星座があればいいのに）

そうしたら方角が分かる。

そこまで思っ、スノウは首を傾げた。

（星座って、なんだろう？）

「考え事をしながら歩いていると、転ぶぞ」

不意に声をかけられたスノウは、砂に足を取られて盛大に転んだ。アクセルはそれを呆れたように見ている。

「上ばかり見ながら歩いているからだ」

スノウは素早く立ち上がり、砂を急いで叩き落とす。しかし、何かが身体に纏わりついているような異物感は消えなかった。

スノウは顔を悲しげに歪める。

「……砂、きらい」

「好きな奴の方が珍しいだろ」

アクセルはスノウの様子に呆れながらも、スノウが変わった事を感じていた。

（成長、しているのか？）

スノウの使う語彙ごいが増えている。今まではあまり喋らなかった所でもあるが、感情を表す事も少なかった。だが、今でははっきりと感情を表している。

思い返してみれば、クラウドを探しに行く時も、置いて行こうとしたにも関わらずついて来た。町を出る時にいたっては、強引にアクセルについて来たのだ。スノウは自己を主張するようになっていく。だが、それは必ずしも良い事ばかりではない。

「そんなに歩くのが嫌なら、ここで列車が来るまで待っていると良

い」

「いや」

「列車に乗るのはそれほど難しくない。もっとも、止まってくれないからコツが必要だが」

「いや」

スノウは首を振って、拒絶する。アクセルはスノウを見て、大きく息を吐いた。

「スノウ。別に無理をしてまで、オレについて来る必要はない。嫌ならついて来なくても良いんだ。むしろ、なんでオレについて来る」
スノウは目を丸め、顔を逸らす。

「なんで……」

「？」

アクセルは首を傾げる。

しばらく俯うつむいていたかと思えば、スノウは唐突にアクセルに背を向けて走り出した。アクセルは啞然とスノウの背中を見ていたが、スノウが線路から逸れているのに気付く。

「待て！ スノウ、線路から離れるな！ スノウ！」

アクセルは線路とスノウを見比べていたが、覚悟を決めて走り出した。

スノウは無我夢中で走った。

（なんで？　なんで、あんな事を言うの？）

スノウはアクセルの悲しげな表情を見てから、アクセルにずっとついて行くと決めたのだ。

しかし、スノウが「クラウド」を知らないと知った時から、アクセルの様子はおかしかった。アクセルはずっと悲しそうな顔をしているのに、アクセルはその事に気付いていない。

（私が「クラウド」の事を覚えていないから？）

スノウは「クラウド」という人物に会った事がない。そもそも、アクセルに拾われてから、ずっとアクセルと一緒にいるのだ。アク

セルもスノウが「クラウド」に会った事がないのは知っているはずである。

（クラウドって……だれ？）

スノウは走り出した時と同じように、唐突に立ち止まった。周囲を見回したが、砂しか見えない。スノウはその事に恐怖を覚えた。足元にある自身の足跡を辿り、線路まで戻ろうとするが、足跡は途中で消えている。顔を上げて周囲を見回すが、やはり砂しか見えない。

「どうしよう」

スノウの声を聞く者は、いなかった。

2 - 3 感傷

スノウは途方に暮れていた。とりあえず、足跡の先に真っ直ぐ進んでみようと思い立つ。しかし、どれだけ歩いても見えるのは砂ばかり。スノウは自身が本当に前に進んでいるのか不安に駆られた。自分は本当に真っ直ぐに歩いているのだろうか。本当は逆方向に向かっている、とどんどん道から離れて行っているのではないか。

そう考えて、スノウは泣きなくなった。けれど、涙なんて出るはずがない。仕方なく、スノウは空を見上げた。

多くの星が不規則に並んでいる空。理由は分からないが、スノウはそれが不自然に思える。何も考えずに空を見上げていると、星が一つ、流れた。そこでスノウは既視感きしかんを覚える。

（私は、星が流れるのを、前に見ている？）

スノウは初めて流れ星を見たと思ったのだが、そうではないようだ。だが、記憶にない。勘違いだろうと、自分を納得させた。

スノウは再び砂漠を当てもなく漂う事にする。適当に歩いていれば、その内線路が見つかるかも知れない、という楽観的な考えに基づいての行動だった。しかし、心の中ではその場に留まり続けているのが怖かったのだと、理解している。

しばらく歩いた頃だった。スノウは砂を踏む感触が変わった事に気付く。首をかしげて足元の砂を避けると、煉瓦のような石で道が舗装ほそうされている事に気付いた。このまま歩いて行けば、どこかに辿りつく事が出来るだろう、とスノウは考える。

その時だった。背後から砂を踏む音が聞こえ、スノウはそちらに視線を向ける。

そこには甲冑に身を包んだ騎士がいた。

その騎士は異様な姿だった。甲冑に身を包んでいるため、種族が分からない。

「汝なんじ、そこで何をしている」

鎧の中で反響した、くぐもった声が聞こえた。敵意は感じられない。スノウは正直に答える事にした。

「道に迷いました」

鎧騎士はそうか、と周囲を見回す。スノウもつられて周囲を見回すが、やはり砂しか見えない。

「汝は運が良い。よければ線路まで案内する。いかがなさるか」

不思議な言い回しをする人だな、と思いながらもスノウは頷く。

騎士はスノウに頷き返し、背を向けて歩き出した。スノウもその背に無言でついて行く。不思議と、鎧騎士に対して警戒心は持たなかった。

アクセルはスノウが走った方角に向けて進む。スノウの足はそれ程早くはないにも関わらず、アクセルにはスノウの姿すら見つける事が出来なかった。

「くそっ」

アクセルは諦めて、元来た道へと戻る。

この砂漠で迷った者は、二度と帰っては来られない。アクセルは自分が迷う前に引き返す事にした。走った所為で、身体の関節部分に砂が入ったようだ。身体を動かすたびに、身体が軋きしむような音が聞こえる。

アクセルは鉄族だ。例え、砂が身体の中に入ったとしても、すぐに洗い落とせる。その後乾かさなければ、身体が錆さびびてしまうのが難点だが、他の種族に比べれば些細さいさいな問題である。

アクセルは再び線路沿いに歩き始めた。スノウの事を考えないように、前を見て歩く。

アクセルには、スノウの行動の意味が分からなかった。そもそもアクセル自体が人の感情の機微きびに疎うとい。はっきりと口に出してくれなければ、アクセルには理解のしようがないのである。要するに、思っている事をなかなか口に出そうとしないスノウとは相性が悪かった。もっとも、アクセル自身はその事に気付いておらず、手のか

かる妹分のように思っている。

アクセルは立ち止まり、周囲を見回す。何もいない事に気付くと、息を吐いて再び歩き始める。しばらく歩いては立ち止まり、またその繰り返し。アクセルはスノウの事を見捨てたが、やはり気にはなっているのである。しかし、探しに行っても見つかる事は不可能であり、逆にアクセルも砂漠の中で迷ってしまう可能性があった。

（なにを気にしている）

アクセルは歩き続ける。

（あれは好きで走って行った。わざわざこちらも、それに付き合う必要はない）

だが、とアクセルは考えてしまう。

スノウはまだ、この世界の事を知らない。そんな人物を、放り出したままで良いのだろうか。アクセルはクラウドに、スノウの事を頼まれたような気がしている。だがクラウド自身、そんな事は口になかった。アクセルの勝手な思い込みである。

（オレは、どうすればいいんだ）

アクセルはクラウドから貰った湾曲刀の柄えを握った。反対側の腰には自身が初めから身に着けていた湾曲刀がある。

「クラウド。お前はオレに何を求めていたんだ」

空を見上げるが、そこにはただ無数の星があるだけだった。似合わない感傷に浸っていた事に気付き、その感傷を振り払うように歩き出す。

しばらくして、アクセルは目を疑った。

そこには甲冑に身を包んだ鎧の騎士と、それに並ぶように立っているスノウがいたのである。

2 - 4 下準備

スノウはアクセルの姿を見つけると、アクセルの元へと駆け出した。

「アクセル」

「スノウ、一体なにをしていた」

アクセルの言葉に、スノウは足を止める。スノウの目はどこか不安そうに揺れていた。

「わ、わたしは……」

「この砂漠は、危険だと言ったはずだ。それとも、分かっているやつたのか？」

「そんなこと、言っていない」

スノウは小さな声で反論する。アクセルはそれを耳聴く、聞いていた。

「だとしても、こんな目印の全くない場所で道を失う事が、どういう事を理解出来なかったとは言わせない」

スノウは口を嚙む。

「それに、別にオレと一緒にに行く必要はどこにもない。そいつと一緒に行けばいいんじゃないか」

スノウは俯いて、首を何度も横に振った。

「いや」

「なぜだ」

アクセルはスノウを睨みつける。スノウは身体を竦めた。

「話は読めないが、我はどちらにしろ、この土地を離れる事は出来ぬ」

鎧の中でくぐもった声が二人に届く。

「我は道に迷っていた者を、気まぐれにここまで帰したまで。普段はそんな事はせぬ。よって、用が終わった我は、ここで失礼させていただきます」

騎士は二人に背を向け、鎧を鳴らしながら去って行った。アクセルはその背に、納得していないような目を向ける。だが、鎧騎士を引き留めはしなかった。

「アクセル……」

スノウは上目でアクセルの様子を窺^{うかが}う。アクセルは大きく息を吐いた。

「わかった。今回は連れて行く事にする。だが、もし次も同じような事があつたら、そのまま置いて行くからな」

「わかった」

スノウは神妙に頷く。アクセルは鼻を鳴らして先へと進んだ。スノウも置いて行かれないよう、横に並んで歩き出した。

＊

鎧騎士は気配を感じて背後を振り返る。だが、そこには誰もいない。果てしなく続く砂と星空があるだけだった。

「……何者」

鎧騎士は低い声で相手を窺うように声を上げる。視線の先にある空間が割れ、勢いよく何かが飛び出した。

「ぱんぱかぱーん！ マーティさん、とうじょーうつ！」

「……………」

無言を貫く鎧騎士に、マーティは不服そうに声を上げる。

「なに睨^みんでんの。あたしの方があんたよりも位が上なんだから、もつと敬^{やうやう}いなさいよ！」

「……位など、関係無かるう。我とて、重要な役目を担^かつておる。そこに貴賤の差は存在せぬ」

マーティは大袈裟に溜息を吐いた。

「あー、もうっ！ 固すぎるよ、あんた！ そんなんだから、こんな辺境に押しやられんのよっ！」

興奮しているマーティに比べ、鎧騎士は冷めている。

「我は構わぬ」

何を言っても大した反応を得られないためか、マーティは疲れたように肩を落とした。

「……あんたと話していると、疲れるわ」

「軟弱な」

「だーっ！ もう、うるさい！ 喋るな、馬鹿騎士！」

マーティに言われ、鎧騎士は沈黙する。

マーティは荒れた息を整えた。

「そんなあんたに朗報だよ。——新しい任務を与えてあげる」

碌ろくな事ではないだろうな、と騎士は内心で思う。しかし、位の高いマーティに逆らう事は出来ない。

マーティは騎士の様子に気付いているのかは不明だが、上機嫌に宣告した。

「鎧騎士。あんたに神殿警護の任を一時解き、白い人型を追ってもらう」

「……………」

鎧騎士は口を挟まず、続きを聞く。

「そいつの名はスノウ。本来であれば、獣人型であつたはずの者でも、人型になったせいで、本来備えていたはずの能力は失つてる。それで、任務はそのスノウって奴を壊しちやえばいいの。どう？ とーっても簡単な任務でしょ」

マーティはにつこり、と微笑んだ。

「でも、それだとならないから、あたしなりに趣向を凝らしてみました！ 領主権限？ みたいな物のお陰で、とーっても楽しくなるよー！」

マーティは悪戯を仕掛けた子供のようにな无邪気な笑みを浮かべる。だが、そこにあるのは深い憎悪。鎧騎士は寒気を感じた。

「簡単に言つなら、賞金首ってやつ？ 都中に指名手配をしちやいました！」

「……………」

「大丈夫、大丈夫。職務に抵触してはいないって。でもね、ギリギリのラインまで頑張ったんだよ。凄くない？」

鎧騎士はマーティたち三領主と深い面識はなかった。だが、マーティの様子は異常であると判断する。

「……それであるなら、我は必要ないはずだ」

鎧騎士の言葉に、マーティは「ブッブー！」と否定する。

「あつまーい！ そんなんじゃ、楽しくないでしょ。主にあたしが。それに、この任務の反論は受け付けませーん」

マーティは鎧騎士に背を向けた。にやり、と口元に笑みを浮かべる。

「それじゃ、頼んだよ。名無しの騎士さん」

マーティは現れた時と同様、空間を裂いてどこかへ去って行った。鎧騎士はそれを見送る。背後——神殿の方角を見つめ、振り切るように歩き出す。

「すべては、我が主のため^{あるじ}に」

空っぽの鎧の中に響く声には、どこか強い決意が滲んでいた。

2 - 5 水の都

スノウとアクセルは砂漠を抜け、水に覆われた都市へとやって来た。

水の都。

ここではそう呼ばれる場所だった。そして都の姿を見ると、みんなその名前に納得する。

水の都はガラス張りの地面である。ガラスの下には水が常に流れており、下に敷き詰められた苔によって、水は淡く発光しているのだ。建物の壁はガラス張りではないものの、水が止まる事なく流れている。その流れている水も地面と同様に発光していた。初めてその都を見る者は感嘆の溜息を吐く。それほどまでに、この都は幻想的で美しい。

だが、それと同時に恐怖を覚える者がいるのも、また事実。

その筆頭が鉄属である。

彼らは水に対して苦手意識を持つ。その事もあり、水気の多い所も同様に嫌うのだ。よって、水の都は鉄族に対しては鬼門である。

アクセルは都に着くと、いつもよりも若干早目に歩いていた。出来る事ならば、この街に留まる事などせずに、さっさと出て行きたいのである。スノウは早足で歩くアクセルの後を必死でついて行く。しかし、アクセルはスノウの事など気にも留めない。

「ま、待つて」

スノウは堪えかねてアクセルに声をかけた。

アクセルもスノウに呼ばれた事に気付き、足の速度を緩める。

「どうした」

振り返るアクセルは、足を止めようとはしない。しかし、先程よりもずっとよかった。

「なんで、そんなに急ぐの？」

「オレは水が嫌いだ」

再び正面に向き直り、歩き始めるアクセルに縋りつく様にスノウは走る。

「な、なんで？」

アクセルの正面に立ち塞がり、スノウはアクセルの足を止めた。

アクセルは怪訝そうに眉を寄せる。

「お前が砂を嫌うのと同じ理由だ」

「……アクセルは、くろがね属？」

「ああ」

アクセルは苦々しく頷いた。

「いやなら、なんでここに来たの？」

「通らなければ、目的の場所に行けんだ」

この世界には三つの都市しかない。しかし、都市と都市の間は砂漠がある。そして、煉瓦の街から一番近いのは水の都であった。強引にもう一つの都市に行く事も、出来なくはないが、距離が倍ほど長い。おまけに砂漠から途中で沼地に変わる。ようは、悪路なのだ。それくらいなら、嫌でも水の都を経由した方がずっと安全である。

「そ、そうなの？」

「そうだ。この都に大して用事はない。だから、さつさと行くぞ」

アクセルはスノウの横を通り過ぎ、都の奥へと進んでいく。スノウは急いでアクセルの後へとついて行った。

アクセルは早く都から出る事を優先して注意を怠り、スノウは先へと進んでいくアクセルについて行くので必死だった。

だから、都の人々が二人を注目していた事に気がつかなかった。

人々のスノウを見る目が異常だった事に気がつかなかった。

「はい」

二人の前に小柄な人物が現れる。

スノウの胸ほどまでしかない身長。動きやすそうな服に身を包み、その身のこなしは隙がない。どこか猫を彷彿とさせるような少女だ。頭の部分はバンダナで覆っており、その隙間から出ている髪は砂漠

のような砂色をしている。そして、スノウと同じ——人型であった。
「誰だ」

アクセルはあからさまに不機嫌な声を出し、腰に差している湾曲
刀に手をかける。スノウはそれを慌てて止めた。

「ア、アクセル」

「物騒だなあ。でも、あたしの方が早いよ?」

鉄属は動きが鈍いからね、と少女は笑う。

アクセルは咄嗟にスノウの顔の前に腕を伸ばした。その腕に何か
がぶつかり、金属音が鳴る。アクセルの腕で防がれたのは小さなナ
イフだった。

「え、え?」

スノウには何が起こったのか、わからない。

「ふざけているのか」

「まあ、今のは挨拶」

少女はアクセルの言葉に、にっこりと微笑んだ。

「ルールを説明するね」

少女は腰のポーチから水晶を取り出す。それは煉瓦の町で見た水
晶と全く同じものだった。

アクセルは不機嫌そうに睨みつけるだけだが、スノウは違った。

(……なに?)

手に入れなくてはならない。いや、違う。取り返さないと。違う、
私のじゃない。

スノウは自分でもよく分からない感情が渦巻くのを感じた。

「うん。やっぱり」

少女は水晶を再び戻し、スノウに向かって歯を向けて笑う。

「あたしを捕まえない限り、ずっとこのままだよ?」

言葉の意味は分からなかった。だがスノウはそれではいけない、
と思う。理由は分からないが、突き動かす様な感情がスノウを動か
す。

「スノウ?」

アクセルはスノウの様子を訝しむ。

「……あれ、戻さないと」

どこか虚ろなスノウの目を見て、アクセルは目を細めた。

「ふうん。だったら、頑張らないとね」

「なにをだ」

話の见えないアクセルは少女を睨みつける。

「簡単だよ。鬼ごっこをしよう！」

「鬼ごっこ、だと？」

スノウは言葉の意味をなんとなく理解しているが、少女の真意は見えないらしく、怪訝そうな表情をしてる。

「あたしにとつては、あんたたちが鬼。けれど、あんたたちにとつては、この都の人全部が鬼」

少女は暗い笑みを浮かべた。アクセルはその笑みに寒気を感じる。

「……？」

「鈍いなあ。わざわざ噛み砕いて言っただけなのに。」

要は、あたしを捕まえれば水晶に触れるよ。けれど、あんたが他の人に捕まれば——どうなると思う？」

アクセルは少女の言いたい事を理解した。

「なぜ、こんな事をする」

アクセルは湾曲刀に手をかける。

少女は声を上げて笑った。

「そんなの決まってるじゃん。——嫌いだからだよ、人型が」

「オマエも人型だろう」

「そんな出来そこないと、一緒にするな！」

少女はスノウを睨みつける。

「あんたなんかと、あたしは違う。あたしはあの方に選ばれたんだ！ あの方に拾っていただけたんだ！ あんたと違って、あたしは捨て駒なんかじゃない！」

「何の話だ。やっぱり人違いじゃないか？」

少女はクスクス、と笑う。

「人違いじゃないよ。人形如きが、あたしに意見するなよ」

「……とりあえず、オマエのその言い方はム力つくな」

「当然。怒らせたいんだもん。その方が張り合いが出るでしょ？」

スノウはとりあえず、水晶を奪えばいいんだと漠然と理解する。

実際は話の半分以上も理解しきれていない。

「さて、と。そっちのやる気が出た所で、始めるとしますか」

少女は後ろに跳躍する。軽く地面を蹴っただけであるにも関わらず、一気に近くの建物の屋根の上へと登っていた。

少女はにやり、と笑う。

「さあ、命がけの鬼ごっここの始まりだよ」

2 - 6 鬼ごっこ(前書き)

戦闘描写あり。設定上、ただ一人を除き流血はしません。

2 - 6 鬼^{ひるがえ}っつこ

少女は身を翻し、どこかへと逃げて行く。その背は屋根に隠され、どこへ逃げたか分からない。アクセルはすぐに追いかけようとして、周囲を囲まれている事に気がついた。手に武器を持っている者もいれば、何も持っていない者もある。しかし、隙間なく囲まれているため、持っていないようが持っていないなかるうが、厄介である事に変わりはない。

「……厄介な」

アクセルは腰にある二振りの湾曲刀を抜く。背後にスノウを庇おうにも、円形に囲まれているため逃げ場はない。

アクセルは覚悟を決めた。

「スノウ、走れ」

「？ わかった」

状況の理解は出来ていないようだが、スノウはアクセルの指示通りに走る。アクセルは呼気と共に、スノウを一息で追い抜き、正面の人を切りつけた。相手はワタ属だったらしく、片手でいとも簡単に身体を切断する事が出来た。反対に持つ湾曲刀を横に薙ぎつけるが、強い反動と共に不快な金属音が鳴る。切りつけた相手はアクセルと同じ鉄属だったようだ。しかし水気の多い場所にいた所為か、相手の湾曲刀を防いだ腕は嫌な音を立ててずれる。関節の接続が上手くいかないらしく、腕が力なく垂れ下がった。

アクセルの背後から切りつけようとしていた相手の剣を身体をずらす事で避け、腹部に思いつき蹴りを入れる。相手の身体が軽く凹んだ手応えと共に、面白いほど飛んでいく。

「な、なんだ、こいつは！」

一瞬でアクセルとスノウの周囲から人が離れて行く。

「なるほど。オレが誰か分からずに挑んできたのか」

アクセルは二本の湾曲刀を構える。アクセルの持つ二本の武器を

見て、誰かが声を上げた。

「双刀……まさか、？双刀のアクセル？か！？」

その叫びを皮切りに、周囲の人々が更に離れて行く。

「？双刀のアクセル？だと……」

「なぜあいつがここにいる！ あいつは煉瓦の町にいるはずだ！」

クラウドがいなくなつてから、強く違和感を覚えるようになった呼び名。しかし、今回はその呼び名に助けられる事となった。

「いたら、悪いのか？」

アクセルはにやり、と笑う。

その笑みを見て、怖気づいて逃げ出す人も現れた。

「か、勝てる訳がない。たった一人で百人近い集団を、一気に壊滅させた奴だぞ！」

「そんなヤバイ奴なのか？」

「に、逃げろ！」

散り散りに逃げだす人々を見て、アクセルはスノウを呼んだ。スノウは驚いた様子でアクセルを見る。

「今がチャンスだ。逃げるぞ」

スノウは頷いた。二人で少女の消えた方角へと走る。途中で進路の邪魔になる人々を切りつけ、アクセルが道を開く。二人は走った途中で屋根の上に登れそうな踏み台を発見する。アクセルはスノウを先に登らせ、自身は追手を適当にさばく。スノウが登りきつたのを確認すると、アクセルもあつという間に上がった。

「走れ」

追いつがる人の腕を適当に切り捨て、スノウの背をアクセルは追いかける。

スノウはアクセルに言われるまま無我夢中で走った。頭の中では違和感が渦巻いている。

（なんだろう……なにかが、変）

そんな事を考えている場合ではないと理解しているのだが、どう

しても考えてしまう。

（でも……なにが変なの？）

アクセルが相手を切りつける度、その違和感はずす。

そんな事を考えながら走っていると、アクセルに踏み台を示さた。その踏み台に乗り、水で滑る手元に苦労しながら屋根の上に登る。

この都の建物の屋根は、緩やかな傾斜がついていた。どういう原理か、屋根にも水が絶え間なく流れている。壁に流れている水はここからきているらしい。アクセルは平気なのだろうか、と思い背後を振り返ると、アクセルは手を使う事なく跳躍だけで登りきっていた。しかし、水が付いてしまうのを防ぐ事は出来ていない。

鉄属であるアクセルには水は天敵といっても良いものだ。少しならば平気だが、長時間放置すると錆が出てくる。一度錆が出来てしまえば、錆を取り除く事は出来ない。徐々に腐食していき、最終的に腕や足を失う鉄属は多いのだ。

「走れ」

アクセルに促され、スノウは走り出す。アクセルも登ろうとする相手の腕を切りつけてから走った。

「ど、どっちに行けばいい？」

「知るか」

スノウはアクセルに聞きつつも、足が目的を持って勝手に走り出している事に気付いている。アクセルは何も言わずにスノウの後について来ているだけだ。

屋根と屋根の間を跳んで渡っていくと、一際高い建物の屋根の上に少女がいるのを発見した。

「ありやりや、もう見つかったやつだ」

その屋根は他の建物とは違い、屋根の斜面が急になっている。少女は真ん中の境目の部分にしゃがみ、肘をついてこちらを見ていた。「いや、やっぱり引き寄せられるんだねえ。可哀そうに」

「水晶。返してください」

少女のいる建物の前には広場の様な広い空間が広がっている。跳

んで建物に移るのは無理だった。

「嫌だね」

少女は立ち上がり、水晶を取り出す。

「これが返してほしかったら、ついて来てみなよ。鬼ごっこだって言っただしょ？」

アクセルは湾曲刀を少女に投げつけた。湾曲刀が少女に当たる寸前、少女はナイフでそれを防ぐ。しかし、完全に防ぐ事は出来なかったのか、腕に赤い筋が走っている。

（……あれ？）

そこでスノウは違和感が何であつたかを、ようやく掴んだ。

「……血？」

アクセルに切られた人々は血を一切流していない。スノウはその事に対して強い違和感を覚えたのだ。

（そうだ。みんな、血が流れていないんだ……）

スノウの思考を破るように、少女が癩癩かんしゃくを起こす。

「ちよつと、ちよつと！　なんて事してくれんのよ！　このマーティさんに傷を付けるなんて、さいつてーっ！　男の風上にも置けないねっ！」

少女の言葉にアクセルは眉を顰める。

「なにを言っている。そんなのは怪我の内に入らないだろ」

アクセルの感覚ではそうだろう。実際、アクセルに腕や上半身を切断されている者もかなりいるのだ。それと比べれば、少女の傷は気にする程度でもないのだ。

けれど、スノウは少女のように、血を流す存在を知っている。具体的はどういう存在かは覚えていなかった。しかし、その存在は自分たちとは違い、簡単に傷が治らないことは知っていた。

「確かに、掠り傷だけださ！　あんたたちと同じにすんなよ。あたしは、あんたたちとは違うんだから！」

「同じだろう」

アクセルの言葉に少女はバンダナで覆った髪をぐしゃぐしゃに搔

き混ぜる。その拍子にバンドナがとれるが、少女は気にしていない。

「だあーっ！ だからあたしは、あんたらが嫌いなんだよ。無頓着で、無神経！ マーティさんの繊細な心はズタズタだよ！」

顔を上げた少女の頭には猫のような耳が付いていた。

「もっとあたしを^{いたわ}りやがれ！」

「無理だろ」

アクセルは即答で少女の言葉を切り捨てた。

2 - 7 鬼ごっこ(2)

「だー！ もう、うるさいうるさいうるさーい！」

「オマエが一番うるさいだろう」

アクセルは呆れたように呟いた。少女の耳がぴくり、と動く。

「あー、もう本当にム力つくなあ。マスターはどうしてこんな奴らにチャンスなんか与えるんだろ。……まあ、そこがマスターの良いところもあるんだけどね」

少女は軽く息を吐いた。頭のバンダナが広場に落ちている事に気づき、予備のバンダナをポーチから取り出して頭に巻き付けた。その際、水晶をポーチに仕舞う。

「少し頭を冷やした方がいいかも……」

少女は赤い筋の入った腕を軽く撫でた。もともと、そうした所で傷が治るわけではない。自らの失態を忘れたために撫でたのだ。

「さて、と。気を取り直すとして。——早くしないと、追いつかれちゃうんじゃないかな？」

少女はスノウたちの背後を示す。スノウが振り返ると、そこには多くの人が集まっていた。

「そんな訳で、ばいばーい」

少女は背を向けて二人の視界から消えてしまう。しかしそれを追いかける事は出来ない。屋根を伝って逃げようにも、近くに屋根はない。かといって下に降りてしまえば、下にいる人々の餌食になるのと同義である。八方ふさがりであった。

「剣を投げたのは間違いだっただか」

さらに、アクセルの湾曲刀は片方しかない。もう一方は広場に落ちている。それを誰も拾おうとしないのは不思議だった。

「どちらにしても、突破するしかない」

アクセルはスノウを荷物の様に片手で抱え上げる。そのまま下へと飛び降りた。突然の事に、スノウはされるがままになっている。

「——え？」

後ろ向きで落下していくのは予想以上に恐怖を覚えるが、アクセルの腕の中にいると思うとなぜか安心出来た。

アクセルは足元にいた人を踏みつけ、そこから一直線に突破していく。しかし相手も武装しているため、そう簡単に進む事は出来ない。結果、その場に踏みとどまる様に闘うしかなかった。

アクセルが劣勢なのは、火を見るよりも明らかだ。片手でスノウを抱え、大勢に対し湾曲刀を振るう。どれだけアクセルが優れた使い手であっても、状況を奪回するには至らない。疲労はしないが、それは相手も同じ事である。切っても切っても、数は減らない。それどころか増えていく始末。

「アクセル」

「なんだ」

スノウは小さな声で呟いた。

「わたしをこのまま置いていつて」

スノウの考えている事を察したのだらう。アクセルの動きが一瞬止まる。それを好機と見た人々がアクセルに襲いかかるが、アクセルがその場を高く跳躍するとそれぞれが勝手に相撃ちとなった。アクセルは近くにいた人の頭を踏みつけて着地し、近くの人々を横薙ぎする。予想外の行動に怯んだ人々をアクセルは強引に突破した。

「アクセル……？」

反応を返さないアクセルにスノウは首をかしげる。アクセルはスノウを睨みつけた。

「今度そんなふざけた事をぬかしたら、首を切るからな。——下ろすぞ。走れ」

スノウはアクセルの腕から降り、アクセルの横に並んで走る。アクセルは走りながら落ちていた自らの湾曲刀を拾う。後ろは気にせず、前の敵に集中していた。

「方向は」

「たぶん、あつてるよ」

少女の持っている水晶に惹かれているのが分かる。理由は分からないが、スノウにとっては好都合だった。

しばらく走ると、急に追手がなくなった。

「急にいなくなったな。楽でいいが、ここまであからさまだと怪しいな」

アクセルは最後の一人を適当にあしらい、腕を切り離して戦闘不能にする。片方の湾曲刀を鞘に納めるが、もう片方は剥き出しのままだった。

「方向はこっちなのか？」

スノウは頷く。指で方角を示した。

「あっちだよ」

二人はどこか寂れた通りを進んでいく。

二人のいる場所は、先程の都とは全くかけ離れた場所だった。近くにある建物には水は流れず、苔はあるが光っていない。その苔にしても、ほとんど枯れ、はがれている。灰色の壁がやたらと目に着いた。光りが無い事もあり、重苦しい印象を受ける場所だった。

「この辺りは廃墟なのか」

「ハイキヨ？」

「こんな感じに荒れ果てた所の事だ。こういう場所には人も近寄らない。オレも普段なら頼まれたって来ないな」

「……………」

スノウは俯き、自分の服の裾を握った。アクセルはその事に気が付かない。

「だから、用事を終わらしてさっさと行くぞ」

「アクセル」

アクセルは動き出そうとしないスノウを怪訝そうに見る。

「なんだ」

「いやなら、このままわたしを置いて」

「そんなに首を胴体から離れたかったのか？」

アクセルはスノウの言葉を遮った。スノウは顔を上げてアクセルを見る。

「だ、だって、このままだと、アクセルも巻きこまれちゃう」

「そんなのは、とっくに承知だ。それにもう巻き込まれている」

スノウは口を噤む。

「それにオレの事をオマエが心配する必要はない」

「……………」

スノウは俯いて、アクセルの裾を掴んだ。アクセルは裾を掴む手を一瞥したが、何も言わなかった。

2 - 8 地下

目の前には暗い穴が口を開けていた。上に屋根があり、そこがどこかへの入り口である事を示している。入り口の先は緩やかな下り坂になっており、どれ程奥行きがあるのか見当もつかなかった。

「この先か」

スノウは頷く。幸い、スノウたちは暗闇に慣れている。闇に目が慣れさえすれば、例え明かりがなくなとも見通す事は出来るのだ。

「けっこう、遠いよ」

「問題ない」

二人は足場を確認しながら歩き出す。目が闇に慣れた所で、普段と同じように歩く。

中はトンネルというよりも、どこかの駅のような様相をしていた。通り道は整備されており、非常に通りやすい。しかし明かりがないためか、どこか不気味な印象を受けた。しばらく歩くと改札口が現れる。アクセルは眉を顰めてそれを見つめた。

「なんだ、これは」

「改札口だよ」

「なんだそれは」

「えっ……」

スノウは説明しようと思って、言葉が出てこないのに気付く。改札口という名称は分かるのだが、具体的にどのような物なのかは分からなかった。

「危険はないんだな」

アクセルの言葉にスノウは頷く。ならいい、とアクセルは改札を抜けて行く。スノウもアクセルに続いて改札を抜けた。

「……………」

違和感を覚えた。しかしそれは形として捉える事が出来ない。改札を一瞥し、考えても仕方ないと思い直す。スノウは先に行くアク

セルを追いかけた。

アクセルは変わらず進んでいく。しかし、すぐに行き止まりになった。アクセルは周囲を見回し、段差がある事に気付く。段差は深い、降りれない程ではない。下には線路があった。アクセルは下へと飛び降りる。スノウも飛び降りようとして、アクセルに抱えられた。そのまま下にゆっくりと着地する。

「あいつがどっちに行ったか、分かるか」

スノウは頷き、方角を指で示した。アクセルはスノウの示した方角へと歩き始める。スノウもその後を追う。

「……ねえ。どうして、アクセルは一緒にいてくれるの？」

「ここまで来たんだ。いつその事、最後まで見届けた方がすっきりする」

「そっか」

再び沈黙が流れる。響くのは二人が歩く足音だけだった。

「スノウは」

スノウはアクセルを見上げる。

「なぜ、あの水晶に引き寄せられるんだ？」

「……わかんない」

スノウにとっても疑問であつた。水晶を見ると、スノウは強い強迫観念に襲われる。だが、なぜそんな思いに囚われるのが全く分からない。スノウが聞きたいくらいだった。

「あの人に聞けばわかるかな？」

「あのうるさくて訳の分からんあいつにか？」

アクセルは目を細める。

「まともな答えが返ってくるとは思えない」

「……そうかな」

「そうだろう。妙な言い掛かりをつけてきて、都中の人に襲わせるような奴だ」

スノウも改めて考えてみて、そうかもしれない、と思い直す。

スノウは不意に、足を止めた。突然立ち止まったスノウを怪訝に

思い、アクセルも足を止める。

「どうした」

スノウは壁の一点を凝視している。スノウは壁に手を当てた。

「ここ、壊して」

アクセルはスノウを脇に追いやり、アクセルは湾曲刀を抜刀する。
「むっ」

硬い音と共に、湾曲刀は弾かれた。それから三回ほど刃を振り落とすが、いずれも弾かれるような硬い音が響くだけだった。

アクセルは湾曲刀を鞘に戻す。

「これ以上はこちらが駄目になるな。他の方法を探すしかない」

アクセルはスノウの方へ振り返り、勢いよく湾曲刀を抜刀する。

スノウは突然の事に反応しきれず、顔の横を湾曲刀が通過したのを風で感じた。鋭い金属音が響き渡る。アクセルは舌打ちをした。

「厄介な身体だな」

「例えそうであつたとしても、今は汝の刃を防いでいる」

聞き覚えのある、くぐもった声が近くで聞こえてきた。スノウが振り返ると、そこには甲冑に身を包んだ鎧騎士がいた。鎧騎士の腕には大きな大剣。その大剣はスノウの身長ほどの大きさがあり、幅はスノウよりも広かった。

鎧騎士は甲冑の胸の部分を撫でている。そこは強い衝撃を受けたかのように、凹んでいた。

「ふむ。それはずいぶんと強い思いが込められているように感じる」

「当然だ。形見だからな」

「なるほど」

アクセルはもう片方の湾曲刀を抜刀する。鎧騎士はそれを大剣で受け止めた。アクセルは目を細める。スノウの服を引っ張り、アクセルは大きく飛び退いた。先程までスノウがいた場所に大剣が落ちる。衝撃を受けた地面にはヒビが入っていた。

「あ、あの……」

「ふむ。なにか」

鎧騎士は何事もなかったかのように大剣を構える。アクセルは鎧騎士を油断なく見据えていた。

「なんで、おそつてくるんですか？」

鎧騎士はスノウを見つめる。鎧騎士は頭部も鎧で覆われているため、表情を読み取る事はできない。

「汝は、どこまで覚えている」

「？」

スノウは首をかしげる。鎧騎士はふむ、と呟いてスノウの横を通り過ぎた。先程アクセルが切りつけていた壁の前に立ち、大剣を大きく振りかぶる。

「ぬん」

壁は周囲一帯に砂埃を上げながら崩壊した。スノウは咄嗟に口を手で覆い、目を閉じる。砂埃が落ち着いた所で、スノウは恐る恐る目を開けた。鎧騎士はスノウのその動きを観察している。

「……我は脅威とは思えぬが、上の命だ。仕方あるまい」

鎧騎士は大剣をスノウ目掛けて振り落とす。スノウは動く事が出来なかった。

「馬鹿がつ」

鋭い金属音が響き渡る。スノウの目の前で二振りの湾曲刀が、鎧騎士の大剣を食い止めていた。

「なにをしている。さっさと行け」

アクセルに急かされ、スノウは鎧騎士が崩した壁の先へと足を踏み入れた。

2 - 8 地下（後書き）

ちなみに甲冑は頭部を含めた鎧の事です。鎧だけでは頭部がない
そうです。ここでは鎧は甲冑と同義だと思ってください。

2 - 9 鬼ごっこの終わりに

鎧騎士は走っていくスノウの背を見送っていた。アクセルはその事を怪訝に思う。元々、鎧騎士はスノウを狙っていたはずである。スノウを追わないのなら助かるが、鎧騎士が何をしたいのかが分からない。

「それで、何の用だったんだ」

鎧騎士は視線をアクセルの方へと向ける。

「主からの命令である」

「主つてのは、水晶を持っている奴の事か」

鎧騎士は首を振った。

「否。我の主は、この世におらぬ」

「なら、どうやって主とやらから命令を受けたんだ？」

「それを汝が知る必要はない」

鎧騎士は大剣を構える。アクセルも湾曲刀を構えた。今は考えても仕方がない、とアクセルは頭を切り替える。鎧騎士のくぐもった声が響いた。

「参る」

鎧騎士は一息でアクセルの懷に飛び込んだ。

（重そうな身体してるくせに）

アクセルは振り下ろされる大剣を、大きく横に飛び退いて回避する。着地した足で踏みこみ、鎧騎士に切りかかった。鎧騎士はそれを箆手で受け止める。鋭い金属音が響き渡った。アクセルは逆の手にある刃で鎧騎士の後頭部を狙う。大きな音を立てて、鎧騎士の兜は吹き飛んだ。

アクセルは目を細める。

「……なんだと？」

鎧の中は空っぽだった。別にその事に問題はない。問題は、頭を吹き飛ばされてなお、動き続ける鎧騎士にこそある。

アクセルは大きく後ろに飛び、鎧騎士から距離をとった。

「そういえば、汝は二刀流であつたな。油断しておつた」

鎧騎士は何事も無かつたかのように、吹き飛んだ兜を手に取り、頭につける。

「頭を吹き飛ばされて、なぜ動ける」

「ふむ？ そういえば、汝らは首が胴から離れると動けなくなるのであつたな」

鎧騎士は大剣を構えた。アクセルは下から振り上げられる大剣を避ける。鎧騎士の攻撃は大振りだが、足は速い。うっかりしていると切られる可能性があつた。

「まるで他人事のように言うな」

「それは当然である。我は、汝らとは違う」

似た様な言葉を聞いた覚えがある。

アクセルは鎧騎士に太刀を浴びせた。そのまま連続で切りつけていく。鎧騎士はアクセルの狙いに気付いたのか、むっ、と唸る。鎧騎士は大きく後ろに飛び退く。

「オマエたちは一体なんだ」

アクセルはそれに追従する。再び連続で切りつけていく。すると、鎧騎士の肩から先が抜け落ちた。鎧騎士は残っている片手で大剣を振り回す。アクセルはそれを湾曲刀でいなしながら、距離をとった。

「むっ。強いな。腕を落とされるなど、初めての事だ」

「それは良かったな」

「――所で、汝は我の足を止めていると考えているのか」

唐突な言葉に、アクセルは眉を顰める。

「どういう意味だ」

「言葉通りの事よ。我がなぜ、あの娘を逃がしたと思う。必要ないと感じ取ったからにすぎない」

アクセルは鎧騎士に切りかかった。鎧騎士は大剣を振り回す事で、アクセルの動きを牽制する。アクセルは鎧騎士を睨みつけた。

「足止めをしているつもりで、オレの方が足止めされていた訳か」

「いかにも」

「だったら、尚更オマエを壊す必要があるな」

鎧騎士は笑う。

「くつくつ、汝のような使い手に会えて、我は幸せ者だ」

「こつちはいいい迷惑だ」

「つれない事を言うな」

鎧騎士は地面を蹴った。上から大剣を振り下ろす。

「よく片手で振り回せるな」

「だからこそ、狙いやすい。」

アクセルは鎧騎士の無防備な懐へと踏み込み、大剣を持っている肩の関節部位を切りつける。一回では外れなかったため、二回切りつけた。大剣を持つ腕はあらぬ方向へと勢いよく飛んでいく。アクセルは湾曲刀の柄で、鎧騎士の兜を再び吹き飛ばした。

「勝負あつたな」

アクセルはついでに鎧騎士の鳩尾みぞおちに蹴りを入れる。鎧騎士はそのまま後ろへと倒れ込んだ。

「我の負けだ」

アクセルは鎧騎士を無視して、奥へと足を進める。どこからか、くぐもった声が響いた。

「一応、忠告してやる。あれにはもう関わるな」

あれ、とはおそらくスノウの事だろう。

「オマエには関係ない」

「その通りだ。……念のために教えてやろう。汝はあの水晶に触るでない」

「言われなくても、触る気はない」

鎧騎士は微かに笑った。

「ねえ。なんで水晶に触りたいわけ？」

少女は瓦礫の上で胡坐をかき、水晶を弄ぶ。スノウは弄ばれる水

晶を見つめていた。

「知らない」

スノウは水晶から目を離す事が出来ない。水晶がとても大切な物のように思えてならないのだ。水晶を粗末に扱う少女を、スノウはいつの間にか睨みつけていた。

「ふーん。そこは普通なんだ？ まあ、ペナルティは与えられているみたいだし？ あの竜人型の奴がいなければ、ロクに闘う事も出来ないんだよね」

「ペナルティ？」

少女はにやり、と笑う。

「あれ、気付いてないの？」

少女は瓦礫から飛び降り、スノウの眼前に迫った。

「その姿。普通の人型にしては、ヒトに近過ぎる。しかも能力は普通の人型よりも下。その上、この世界の知識も少ない。それに加えて中途半端に残る記憶が邪魔をする。——ある意味、幸せなんだろうけど」

スノウは首をかしげる。スノウの様子を見て、少女は大きな溜息を吐いた。

「あー、なんか調子狂うなあ。もっと厚かましい奴なら良かったんだけど、あんた健気すぎる。お陰であたしが悪者みたいに見えてきたじゃん」

「？」

「……まあ、いいや。鬼ごっこ、飽きたから。さつさと触れば」

少女はスノウに水晶を差し出す。少女の突然の変わり身にスノウは首をかしげた。

「どうしたの？」

「まるであたしが親切にしちゃいけないみたいと言っね。気まぐれな自覚はあるけど、その言い方はけっこう傷付くなあ。謝れ」

「ごめんなさい？」

スノウは頭を下げ、謝る。少女はそれを呆れた様な目で見ていた。

「……ほんと、調子狂うなあ」

スノウは頭を戻し、少女の持つ水晶を恐る恐る触わる。少女はそれを
見て、にやりと笑った。

「一名様、ごしようたーい……ってね」

2 - 10 子どもと私

子どもは家の中を当てもなく彷徨う。何かを探しているようにも思えるが、何を探しているのかは全く見当もつかない。

子どもは目的の物を見つけられなかったらしい。落胆したように肩を落とした。リビングのソファに深く腰掛け、足をぶらぶらと揺らす。

「早く帰ってこないかな……」

以前よりもすっかりとした口調だった。よく見ると、身体も以前よりも成長している。

子どもはソファの上でしばらく暇を持て余していた。急に視線が持ち上がる。子どもと正面から向き合う形になった。

「キミが本物だったら良かったのにね」

中空に身を投げ出されたのを感じる。そのまま綺麗な放物線を描き、フローリングの上へと落下した。天井ばかりが目に入る。

そのまま放置され、子どもは軽く息を吐いた。

「早く帰ってこないかな……」

バタバタとソファを足で叩く音が聞こえる。しばらくすると飽きたのか、音が唐突に止んだ。子どもが近寄ってくる気配がする。再び視線が持ち上がった。

「しょうがないよね。いそがしいんだもん」

子どもは自身に言い聞かせるように呟く。子どもの腕に抱かれ、ぎゅっと身体を圧迫された。しかし腕力がそれ程強くないため、全く苦しくない。むしろ、心地よかった。

視界が動く。奥の部屋へと進み、子どもの部屋へと入った。

まず目につくのは、椅子に掛けられた赤いランドセル。そして機能的な学習机。その上には教科書がいくつか並んでいる。開いたまま放置されているノートが目に入るが、子どもはそれをない物として扱う。子どもはどうやら机に向かう事が苦手らしく、何度も親に

「勉強なさい」と言われていた。言われて、しばらくは机に向かうものの、すぐに飽きてしまうようだ。

子どもは壁際のベッドに飛び乗った。視界が目まぐるしく動いている。どうやら、また投げ飛ばされたらしい。再び身体を掴まれ、何度も視界が上がったり下がったりする。いわゆる、高い高いの手を途中で放棄するバージョンだ。要するに、投げ飛ばしてキャッチするのを繰り返している。

「うーん……いつまでも、これで遊んでいると『子どもっぽい』って思われちゃうよね」

それはちよつと嫌だな、と子どもは呟く。その間も視界は何度も上下する。子どもは飽きもせず、それを繰り返す。しばらくして勢いよく壁に投げつけられた。痛くはないが、顔が少し壁と仲良しになる。すぐに力を失って落下した。

子どもは再び掴む。そして自身の胸へと抱きしめた。しばらくすると、健やかな寝息が聞こえてくる。

私はいつ頃からか、子どもと一緒にいた。子どもと一緒に過ごす時間は心地よく、穏やかだった。子どももそれを感じていたのか、家にいる間は常に一緒に移動している。ご飯の時は母親に気付かれないよう、膝の上に置いて懸命に隠していた。ご飯の時は持ち込んでいけません、と言われていたにもかかわらず。

子どもの私の扱いは、正直に表現すると乱暴の一言に尽きる。

だけど、それは嫌いではなかった。素直に感情を出す事が出来なからだと思っている。いわゆる、愛情の裏返し。本当に嫌いだったら、引き出しの奥に仕舞われるか、埃まみれにされたまま放置されるかのどちらかだった。

子どもは私を手放さない。その事がすごく嬉しかった。いずれ捨てられていく運命であったとしても、私はとても幸せだった。

マーティは足元に倒れているスノウを見下ろした。呆れたように大きな溜息を吐く。

「……ちよつとこの子、単純過ぎないかなあ。あの竜の人がいなかったら、あつという間に切り刻まれて原型なくなってそう。——ちがう？ ジル」

マーティが横を向くと、そこには紳士服に身を包んだ男がいた。男は一礼し、微笑みを浮かべる。

「どうでしょうね。ワタシには存じ上げない事にございます」

煮え切らない答えに、マーティは舌打ちをした。

「あたし、あんたのそういう所が大っ嫌いだよ」

「光栄にございます」

鴉の分際で、とマーティは吐き捨てるように呟く。ジルは微笑んだ。

「それでしたら、マーティは猫ですね」

「そんなにナイフ投げの的になりたかったの？」

ジルは滅相もない、と首を振る。マーティは大きな溜息を吐いた。

「あー、もうっ！ この世界にまともな奴はいないのかなー……」

あなたがそれを言うのですか、とジルは心の中で呟く。

「そんな事はさておき。マーティ、水晶を勝手に持ち出しましたね。しかも都の人々を利用するとは、領主としての権限を越えています」
マーティはジルに背を向ける。口笛を吹きながら、どうだったかな、と呟く。

「別にあたしは『人型が都にやってくるよ。早い者勝ちでパーツ取り放題かな？』って言ったただだよ。そしたらなんか知らないけど、異様に大盛り上がりしちゃったただだった」

「水晶を持ち出した件については？」

「地下に設置するなんて、大した嫌がらせだと思うよ。まあ、獺の

トコよりはずっとマシだと思っけどね。配置を見直した方が良いんじゃない？ あ、折角だから戻しといて」

マーティはジルに水晶を手渡す。ジルは水晶を受け取り、これ見よがしに大きな溜息を吐いた。マーティはそれを見なかった振りをする。

「あなたの人型嫌いは今に始まった事ではありませんし、あなたの言い分に一理あるのも確かです」

ジルの言葉にマーティは胸を張った。

「さっすが、あたし。ちゃんと分かってるう。つまり、お咎めなしって事でしょ」

「そうなりますね」

ジルは非常に残念そうだ。

マーティはしゃがみ、スノウの顔を覗く。マーティはどこか哀れむようにスノウを見ていた。ジルもマーティの考えている事が分かっているため、その事を茶化しはしない。

マーティはいつもと違い、落ち着いた口調で呟く。

「……あたし、マスターの事は好きだけど、この制度だけは嫌いだよ」

「そんなにその娘が気に入りましたか」

マーティは不服そうにジルを見上げた。先程までの落ち着いた雰囲気はすでに消えている。

「なんで、あたしが、こんなのを、気に入るわけ？」

「おや、違いましたか？」

「違うに決まってるじゃん」

マーティはスノウの額に触れ、スノウの記憶を読む。やっぱり、とマーティは思った。立ち上がり、近付いてくる足音に耳を澄ます。マーティはジルに向き直る。

「さっさとどっかに行けば？ あんたの用事はあたしだったんでしょ」

「それもそうですな。今、彼に面識を持つのは好ましくない」

「これからもずっと、でしょ？ 監察官は大変だね。あんたの方があたしより位が高いってのは気に食わないけど」

「では変わりますか？」

「ぜったい、ヤダ」

ジルは微笑み、霧のように音もなく姿を消した。マーティは足音が聞こえてくる方角を見て、にやりと笑う。

「さて、と。あいつをイジメるとしますか」

アクセルは瓦礫を避けて走りながら、目的の人物をようやく発見した。例の少女である。足元にはスノウが倒れていた。その事にアクセルは焦りを覚えるが、相手を刺激しないためにも一先ず抑える。

「キサマ、スノウになにをした」

少女は頭に腕を組み、楽しそうに微笑む。

「べつつにい。特になんにもしてないよ。こいつがこの水晶触つて、勝手に眠り込んだじゃっただけだし？」

どこか人を馬鹿にするような口調だった。アクセルはその事にも苛立ちを覚える。

「スノウから離れろ」

少女はあっさりスノウの傍から離れた。にやにや、とアクセルを面白そうに見ている。

アクセルはしゃがみ、スノウが怪我をしていないか確認する。怪我がないと知り、安堵の溜息を吐く。再び立ち上がり、少女に湾曲刀を突き付けた。

「キサマ、一体なにが目的なんだ」

「ただの暇潰し」

アクセルは眉を顰める。

「キサマの暇潰しのためだけに、オレたちは振り回されたと言っのか」

「そうなるね」

少女はくすくす、と笑う。

「でもさ、本望でしょ？　それが元々のアンタたちの役目だったんだし」

「なにを言っている」

「分からないなら、それでいいよ。それはそれでシアワセだろうからね。——でもさ、知りたくないんなら、この子から離れた方が良いいよ。これは警告。ありがたく受け取れいっ！」

少女はアクセルに指を突きつける。アクセルはそれを鬱陶しそうに見ていた。

「……オマエと話していると、疲れる」

「えーっ！　なに酷い事言っちゃってんのよ！　こーんな可愛らしい女の子引っ掛けておいて、それはないよ！　このマーティさまを一体なんだと心得る！」

アクセルは湾曲刀を鞘に仕舞い、鬱陶しそうに手を振った。

「もうオマエ、さっさとどこかに行け……」

少女は不服そうに頬を膨らます。その姿が霧のように次第に薄れていく。

「アンタ、ぜええったい、もてないね。せめて同情してあげるよ。ご愁傷さま」

少女が消えた後、アクセルは長く大きな溜息を吐いた。

2 - 1 1 警告（後書き）

ここで第二章は終了です。次は幕間に入ります。

幕間

アクセルは足元にいるスノウを抱き上げる。スノウはその間も目を覚まさない。以前も似た様な事があったな、とアクセルは思い出す。あの時はクラウドもいたが、彼はアクセルに押し付けたのだ。
(まあ、別に構わないんだが)

アクセルはスノウを抱えたまま、元来た道へと戻っていく。

「んっもう！ 信っじられない！」

マーティは憤然とした様子で円卓の席に座る。マーティが気まぐれな性格だと知っているため、誰も氣にとめない。氣にするだけ無駄なのだ。

ジルは席に着いた三人の顔を見回し、微笑む。

「……さて、全員揃いました所で始めましょう」

「ちょっと待ったー！ なんで、そいつがいるわけ？」

マーティは椅子を蹴倒し、ジルの隣にいる鎧騎士を指差した。鎧騎士はマーティを一瞥し、何事もなかったかのように視線を戻す。

「ご説明いたしましたよう、とジルは頷いた。

「カレを呼んだのは他でもありません。——マーティ。アナタ、鎧騎士の神殿警護の任を一時解きましたね」

「解いたよー。いけないの？」

マーティの言葉を受け、鎧騎士はくぐもった声を上げる。

「その事自体に問題はない。だが、神殿の中にいるアレが厄介な事になっている」

「へ？ 厄介な事って？」

リブランは大きく溜息を吐いた。獏は眠いのか、机に突っ伏して眠っている。

「マーティ、あなたは神殿がどのように出来ているかご存知ですか

？」

「そんなの決まってんじゃん。マスターが作ったんでしょ」

リブランは軽く頭を押さえている。鎧騎士は無言を貫き、ジルは微笑みを浮かべていた。

「マーティ、あなたという人は、本当に仕様がありませんね。さすがです」

ジルの言葉にマーティは眉を顰める。

「なーんか今、すごい馬鹿にされた気がする」

「それは気の所為ではありませんよ」

リブランは呆れたようにマーティを見た。マーティはリブランを睨みつける。

「……分らない方が幸せですね」

マーティは怪訝そうな顔をしながらも、ジルの方へと向き直る。

「それで、アレがどうなっているって？」

鎧騎士は顎をさすりながら答える。

「無差別に取り込もうとしておるのですよ」

「無差別って……つまり、どゆこと？」

リブランはなかなか進まない話を進めるためにも、説明をする事にした。

「簡単に説明するなら、近付いた人々に強制的に問題を出すという事です。スノウのように参加している人なら問題はありませんが、水晶に触って記憶を取り戻していない人に対しても問題を出すのは、非常にマズイ事です」

「そっか、願い事叶い放題になっちゃうね。すごい大盤振る舞い！」

そんな簡単な事ではありません、とリブランは呟く。

「ん……なら、僕がどうにかする？」

獏は机に突っ伏していた身体を起こし、間延びした声で四人に提案する。

「だあれも近寄れないようにしちゃえば、問題は起こらないんだよ

ね」

それはそれで大問題が起こるのだが、獏は気づいていない。

「だったら、僕的能力であの辺は沼地にしておくよ。そしたら、だあれも近付こうとしないよ」

気の抜けるような話し方をしているが、話している内容は無茶苦茶な事である。しかし、獏は一人で納得するように頷き、姿を消してしまふ。残された四人は呆氣にとられ、見送る事しか出来なかった。

「……………マズイのではないだろうか」

気まずい空気を破り、リブランはジルへと尋ねる。マーティもようやく我に返った。

「マズイってもんじゃないっしょ！ そんな事しちゃったら、本当に誰も近寄れないじゃん！ おーぼーだよ！ あたし、すぐに止めてくる！」

「あ、マーティ、待ちなさい」

「もし仮に獏の作業が終わってたら、リブランもそのデカブツも手が出せないじゃん。結局、あたしがやるっきゃないでしょ」

リブランの制止を聞き入れる事なく、マーティは姿を消した。リブランはジルの方へと目を向ける。ジルは特に焦っておらず、のんびりとしていた。

「問題はございませんよ。それに、イザという時はワタシが出ます」

ジルは鎧騎士に視線を投げる。鎧騎士は頷き、姿を消した。リブランに向かって、微笑みを浮かべる。

「そんなに焦らなくても、なにも問題はございません」

ジルも鎧騎士の後を追うように、姿を消した。リブランは一人、空間に残される。その表情には不満がありありと浮かんでいたが、結局口に出す事なく姿を消した。

幕間（後書き）

獺は寝ぼけていたため、思考が単純になっていたようです。

近付くと危険↓近寄らなければいい↓誰も近寄れない様にすればいい

最後の結論が大変な事に……マーティ、がんばれ。

3 - 1 変化

目を覚ますと、スノウは何かに背負われていた。急いで顔を上げると、アクセルがスノウを振り返る。至近距離で目が合い、スノウは慌てて俯いた。

「目が覚めたか。歩けるなら下ろすぞ」

スノウは頷き、アクセルに下ろしてもらう。

スノウは周囲を見回す。そこは見渡す限りの砂漠、足元にはどこかへと遠く続く線路があった。スノウは首をかしげる。

「水の都に戻らず、そのまま外に出たんだ。列車に乗れば一番良かったんだが、そんな運良く通るはずもないしな。一体今、どこを走っているんだか」

アクセルは軽く息を吐いた。

「ごめんなさい。ありがとう。重かったでしょ？ わたし」

唐突なスノウの言葉にアクセルは目を丸める。スノウはアクセルの視線を受け、焦ったように目を逸らす。アクセルは怪訝そうにしている。

「重いものにも……スノウはワタ属だろ。ワタ属は軽い種族だし、普通はそんな事気にしないと思うぞ」

「それは、つまり……どういう意味？」

「自分より重い種族を持てば、鉄属の身体は歪む。だがワタ属みたいな軽い奴らなら、心配するだけ無駄だ。オレたちの方が重いし、力もずっと強いからな」

話は終わりだ、とばかりにアクセルは歩き出す。スノウはその背中をぼんやりと眺めていた。

（わたし……なにかが変……）

変なのは今に始まった事ではない。しかし、アクセルに対して違和感を覚える。アクセルを見ていると、胸の奥が苦しくなるのだ。

（なんなんだろ。病気かな）

この世界には病気は存在しない事を、スノウは知らなかった。だから、スノウは自身が感じている違和感は風邪だと勝手に勘違いする。

（早く治ってくれないかな……）

スノウは先に進んでいるアクセルの元へと走った。

「そういえば、列車ってどんなものの？」

スノウはアクセルの隣に並び、アクセルを見上げる。アクセルは視線を前に向けたまま答えた。

「くすんだ赤色をしていて、中に椅子が並んでいる物だ」

「列車はどんな人？」

アクセルは首をかしげる。

「人、ではなかったと思う。確かに口うるさいが、あいつは線路上しか走れない。念のために言っておくが、列車が来た時は線路から離れるよ。あいつは線路上にいる奴らを容赦しないからな」

「線路の上になければ平気なの？」

「ああ。線路上しか走れないからな。あいつは割と楽しんでるみたいだけど、オレだったらそんな扱いはお免だ」

ふうん、とスノウは相槌を打った。

妙だな、とアクセルは思う。

（スノウがまた変わった）

何が変わったのか、と聞かれても断言する事は出来ないが、確実に何かが変わった事をアクセルは感じ取っていた。

（水晶を触って目が覚めると、スノウの何かが変わる）

前回は言葉の種類が一気に増えていた。舌足らずだった喋り方もすっかりし、意見を言う事も出来るようになったのだ。今回は何が変わったのだろう、とアクセルはスノウを見つめる。スノウは道を逸れない様に、足元の線路を見ながら歩いていた。

（さっきの反応……）

スノウが起きた時、スノウはアクセルの顔を見ると慌てたように

俯いた。至近距離に顔があつたから驚いただけだろうが、それだつたら水の都でも思いつき抱き上げている。その時も割と近くに顔があつたが、特にいつもと変わらなかつた。

もつとも、アクセルの中では非常事態と日常は分かれていないため、状況の違いを理解する事は出来ないのだ。もちろん、その事にアクセルは気付いていない。

（そういえば、重かつただの何だの言っていたな）

意味不明だ。理解出来ない。

無理に理解する必要もないだろうとアクセルは判断する。気にした所で何かが変わる訳でもあるまい。

「列車が来れば楽できるんだが……」

スノウはアクセルを見上げ、首をかしげる。

「列車はいつ来るか分からないんだよね。ここで待ってたら、いつかは来るって事？」

「そうだろうが、ここで暇を持て余すのも面倒だ」

「そうなの？」

「そういうものだからな」

スノウはふうん、と歩き続ける。アクセルも足を止める事なく歩いていく。

不意に、軽やかな鐘の音が響き渡る。スノウは思わず周囲を見回した。

「何の音？」

「噂をしたからかもな。これで緑の村まで一気に楽が出来る」

スノウは首をかしげる。

「緑の村？」

「ああ、次の目的地だ。……あそこなら、クラウドの事がなにか分かるかもしれん」

スノウはアクセルから顔を逸らす。アクセルはその事には気付かない。

「……緑の村って、どういう所？」

「ん？ ああ、まあ、森に囲まれている所だな。一番小さな土地だ。この世界で一番星が綺麗に見える所だと聞いている」

「アクセルも行くのは初めて？」

まあな、とアクセルは頷いた。

緑の村でクラウドの手掛かりが見つからなければ、もうあてがない。他にどうすればクラウドの存在した痕跡を示す事が出来るのだろう。アクセルには他の方法が全く思いつかなかった。

アクセルは空を見上げる。多くの星が瞬いていた。

（なあ、クラウド。お前は確かにこの世界にいたんだよな）

答える声はもちろん、ない。

近付いてくる軽やかな鐘の音で、状況を思い出す。

「とりあえず、列車に乗るか。——スノウ、線路の近くにいるのも危険だ。少し離れた位置から列車を待つんだ」

スノウは頷き、アクセルの元へと歩く。

（スノウ……せめて、お前が覚えていてくれたなら……）

スノウを見つめていると、視線に気付いたスノウはアクセルの方へ向いた。その状態で見つめていると、スノウは頬を染め、身体ごと後ろを向く。

（……………？）

スノウの変化は、誰もまだ気付いていない。

3 - 1 変化（後書き）

スノウの精神年齢が一気に上昇します。だいたい中学生くらいです。しれでも引つ込み思案な所は変わりません。

3 - 2 列車

列車がようやく視界に入り、スノウは列車がどういふものかを理解する。

（本当に人じゃないんだ）

そもそも、人の形をしていなかった。箱のような物を繋ぎ合わせて作られているようだ。箱には窓が等間隔に付けられており、中を覗く事が出来そうである。それ程早くもないので、覗こうとすれば覗く事が出来そう。スノウは背伸びして中を覗こうとするが、なかなか見えない。スノウの様子を見て、アクセルが呆れたように声をかけた。

「おい。そんな事をしていると乗り遅れるぞ」

アクセルは箱の扉の横に付けられている取っ手に手をかけ、そのまま列車の中へと入っていく。スノウはしばらく呆然と眺めていたが、スノウ自身も乗らなければならない事を思い出す。スノウは丁度視界に入った取っ手を掴み、列車の中へと入る。

列車の中では赤い座席が向かい合い、等間隔に並べられていた。通路を通りやすくするために、真ん中の部分に空間が開けられている。試しに座席に座ってみると、思っていたよりもずっと柔らかかった。

「ふかふか……」

あまりの気持ち良さにスノウが横になっていると、頭上から呆れた様な声が降ってくる。

「寝るなよ。乗り過ぎすから」

溜息交じりのアクセルの言葉に、スノウは微笑みを浮かべる。

「大丈夫だよ。そんなにうっかりしてないから」

「列車に見とれて、乗るのを忘れかけていたのは、どこの誰だったんだか……」

アクセルは溜息をつく。スノウは首をかしげた。

「誰か乗れなかったの？」

「……………いや、なんでもない」

アクセルはスノウの向かい側に座る。スノウは身体を起こし、窓の外を覗き込む。窓の外は一面、砂だった。

「……………砂ばっか」

「砂漠だからな」

「……………つまんない」

アクセルも窓の外を覗き込んだ。

「つまらないものにも、仕方ないだろう。スノウは一体、どういうのを想像していたんだ」

アクセルに問われ、スノウは考えるように唸った。

「うーん……………もっと色々な景色が見えるのかと思ってた」

「例えば？」

「緑、とか？」

アクセルは軽く息をつく。

「緑がある場所なんて、今から行く緑の村くらいだぞ。それ以外は滅多にないな」

「そうなの？」

「大体、なんで緑なんだ？ 他にもあるだろ」

スノウは他の物を考えようと唸るが、思いつかなかったらしい。浮かない顔をしていた。

「わかんない。浮かんだのが緑だったの」

「そうか。……………しかし、列車は楽だが暇だな。他に乗客でも乗っていれば面白いんだが」

「探してみる？」

スノウは立ち上がり、アクセルに尋ねる。アクセルは呆れたようにスノウを見ていた。

「基本的に土地の移動をする奴は珍しいんだ。自分が生まれた土地にそのまま居着く奴が多い。スノウのように外に出ようとする方が少ないんだ。だから探しても他に乗客なんていないと思うぞ」

「でも、暇つぶしにはならない？」

アクセルは好きにしろ、とスノウを見送る。スノウも行ってくる、とアクセルの元を離れた。

アクセルの元を離れたスノウは列車の後ろ方向に向かって歩いていった。箱と箱のつなぎ目にある扉を開け、次の箱へと移動していく。人がいないかどうか確認しているが、今の所、他の乗客には会わなかった。

「やっぱり誰もいないのかな……」

スノウが扉を開けると、一面の砂漠が広がっている。どうやら一番後ろまで来てしまったようだ。外で風景を楽しむように、柵で場所を確保されている。スノウは柵に触れ、後ろへと流れていく風景を眺めた。白い髪が風を受けてなびく。スノウは髪を押さえるが、やはり風に弄ばれてしまう。スノウは列車の中へと戻った。

「よっこいしょっと」

聞き覚えのある声が聞こえ、その方向へと目を向ける。そこには頭にバンダナを被った少女がいた。少女はスノウを見て一瞬、顔をしかめたが気にした風もなく席に座る。

「えっと……奇遇です、ね」

スノウが声をかけると、少女は外に向けていた顔をスノウに向けた。

「そうかもしれないけど……あんたさ、よくそんな普通に出来るね」「なんで？」

スノウは少女の向かい側に座る。すると少女は立ち上がり、反対の窓側にある座席に移った。

「普通はさ、あんな事をされたら、そんな風に寄ってこないって」「スノウは立ち上がり、少女の向かいの座席に座る。

「そうなの？」

「そうなんだって」

再び少女は立ち上がり、別の場所にある座席に座る。スノウもそ

れを追いかけて、向かい側の座席に座る。二人はしばらくそれを無言で繰り返す。しばらくして、音を上げたのは少女の方だった。

「だーっ！ うっとうしい！ ついてくんなよ！」

「なんで？」

少女は立ち上がり、スノウに指を差す。対して、スノウは不思議そうに首をかしげていた。

「い、い、か、ら、ついてくんな！」

再び少女は別の座席に移ろうとする。しかしスノウがその腕を掴み、少女を引き止めた。少女はスノウを睨みつける。

「……なに？」

「ついて来るなっというたから」

「放してくんない？」

少女はスノウの掴んでいる腕を示しながら言う。

「やだ」

スノウが即答すると、少女は目を細めた。

「なんで」

「暇だから」

少女はスノウの腕を振り切る。

「暇潰しにあたして遊ばうったって、百年早いんだから」

スノウは不思議そうに首をかしげた。

「百年……？」

少女は咄嗟に口を手で塞ぐ。目が泳いでいた。

「な、なんでもないよ！」

少女は列車の窓を開き、そこから飛び降りる。スノウも思わず窓から身を乗り出して覗きこむが、そこに少女はいなかった。

3 - 3 車内と車外

スノウは誰もいない砂漠を見て、首をかしげる。

「……どこいったんだろ」

窓から顔を出したまま周囲を見回すが、目に入る範囲には誰もいない。唐突に後ろから腕を引っ張られ、スノウの身体は車内に戻る。

「窓から顔を出すな。身体ごと出すのはもっと危険だ。やめろ」

スノウが後ろを見ると、アクセルが立っていた。スノウは素直に頷く。

「わかった」

アクセルは近くの席に腰かける。スノウは顔を窓から出さない様に外を見回す。やはり、誰もいなかった。

「何かあったのか」

スノウはアクセルに向き直り、座席に座る。

「ううん。別に」

「……そうか」

アクセルは何か言いたそうにしながらも、結局口には出さなかった。スノウは再び視線を窓へと移す。心の中では疑問が渦巻いていた。

（なんであの子の事、アクセルに言えなかったんだろ）

アクセルの場合、少女の顔を見た瞬間に襲いかかる気がしたのだ。だから、反射的になにもないと答えてしまった。

そこまで考えて、スノウは妙に納得する。

（それはありえるかも……）

アクセルに目を向けると、二振りの湾曲刀に目がいった。そこでスノウは微かに違和感を覚えるが、具体的にどこが変なのかが掴めない。それに、すぐにその違和感は霧散してしまった。

（早く、早く行かないと）

ささやき声が聞こえ、スノウは咄嗟に背後を見た。しかしそこに

は赤い背もたれがあるだけ。スノウは軽く息を吐きながら、正面に
向き直った。

こうした、ふとした拍子に何かスノウを強く追いたてるのだ。
そして、それが何かはスノウには分からないのである。正直、気味
が悪かった。

（一体、なにが目的なんだろう）

スノウを追いたて続ける声に考えを巡らせるが、スノウには分か
らなかった。

列車の屋根の上でマーティはのんびりと寝そべっている。不思議
な事に、列車の上に乗っているにも関わらず、風が一切なかった。
マーティはそれの特に不思議に思う事なく、寝そべっている。

「あー……まさか、いきなり会うなんて思わなかった……」

スノウが水晶を集めているのであれば、緑の村で必ず会う事は分
かっていた。なので鉢合わせにならないように注意しようと思って
いたのだ。その矢先に会ってしまったのである。マーティは思わず
頭を掻き耑りなくなったが、さすがに抑えた。

（しかし、あれはあたしよりもずっと変だと思うな）

スノウの性格が変わっているのに心当たりはあるが、それだけで
はないように思えた。

「元々の持ち主の影響を受けているにしては警戒心がなさすぎるし、
影響を受けていないとしたら余計に変だよ。あー、関わりたくない。
絶対に」

すでに関わってしまったているのだが、絶対にこれ以上は関わりた
くない。ただでさえ、これから厄介事をどうにかしなければならな
いのだ。これ以上、面倒事に関わっている暇はない。

「だけどなー、獺に会おうと思ったら絶対に関わるんだろうなあ。

これじゃあ、何のためにすぐに出たのか分からないよ」

「おや、何のためだったのですか」

「そりゃあ、あの変な白いのが来る前にちゃちゃーっと厄介事を取

り除いて……つてえ！ ジル、あんたなんでこんな所にいるわけ？」

マーティは急いで立ち上がり、ジルを睨みつけた。ジルは微笑む。「もしもの際に備えて、ですよ。獏はあなたと同じ地位にいるのです。あなたが特殊な存在だとしても、地位が同じである限り、能力に優劣はございません。なので、ワタシが参った次第にございます」優雅に一礼するジルを、マーティは冷ややかに見つめた。

「要するに、あたしじゃ役不足ってわけ」

「滅相もございません。あくまで念のためでございますよ」

マーティは舌打ちをする。

「あたしがあんたの事、嫌いって知っててワザとやってるでしょ。

あんたと一緒にいるくらいだったら、あの白いのと一緒にいる方がずっとマシ」

「おや、お手伝いでもなさるの？」

「まさか。妨害こそすれ、誰が手伝うかつての」

マーティは軽やかに身体を翻す。視界からジルが消えて清々するのと同時に、着地した足に妙な感触が伝わった。足元に目を向けると、黒い毛むくじらの物体があった。

「なに、これ。狼モドキ？」

マーティは黒い物体を踏みつけたまま、踏みつけている物の顔のぞき見る。狼モドキは金色の目でマーティを睨みつけた。

「サッサとどけよ。ボクの綺麗な毛並みが汚れちゃうでしょ。それに、重いんだよ」

「……ふうん」

マーティは狼モドキの頭を踏みつける。ぐりぐり、と足を押し付けた。

「う、うわぁーん、やめてよー。ボクが何をしたらって言うんだよ！」

「今、思いっきり乙女の心を傷つけたけど」

「乙女……？ なにそれ」

だから嫌いなんだよ、ここの奴ら。

マーティは舌打ちをして、狼モドキの上から退く。列車の連結部

分はあまり広くないため、必然的にマーティは狼モドキの頭の上を通過して、そのまま列車の中へと入る事になる。何事もなく通過したはずなのに、狼モドキは不服そうに声を上げた。

「ちよつとちよつと、人の身体踏んづけておいて謝罪の言葉もなしだよ。そういう時は？ごめんなさい？って謝るんだよ」

マーティは胡乱な目付きで狼モドキを見下した。

「は？ なんであたしが、あんたみたいなのに、わざわざ謝らないといけないわけ？ むしろ、あんたが謝れ。黒もじゃ」

「なつ、黒もじゃだつて？ ボクのこの毛の美しさが分からないなんて、終わってるね。まあ、君みたいに全身に毛がない様な生き物じゃあ、ボクの魅力は分からないのかな」

マーティは眉を顰める。

「はあ？ 何言ってるの。あんた、頭大丈夫？ あたし、親切だから、あんたの脳天でもかち割って、そのぶつ飛んだ頭でも治してあげよつか？」

狼モドキは顔をしかめる。

「それこそ何言ってるの。ボクの頭はとっても正常。その上とおつても頭が良いんだから！」

「ふうん。とっても残念みたいだね。このマーティさまの親切にも気付かないなんて、それこそ終わってるね」

「な、なにおー！」

「なに、やる気？」

列車の連結部で一触即発の雰囲気 flowed.

3 - 4 マーティ

その一触即発の雰囲気壊したのは、二つの声だった。

「おい、カルー。どこ行っただーい」

「あ、こんな所にいたんだ」

マーティが後ろを振り返ると、そこにはスノウがいた。カルーと呼ばれた黒い狼も背後を振り返り、尻尾を振ってどこかへと駆け出していく。

「ドリトルー！　ここだよー！」

その姿はまさしく犬だった。犬が通り過ぎた後、扉が閉まり、どうなったのかは把握できない。これ以上追いかけたとしても、意味がない事を知っているマーティはそのまま放置した。

それよりも、もっぱらの問題はスノウである。マーティはスノウに向き直った。

「なに、また追いかけてきたっての？」

マーティはスノウを睨みつけるが、スノウは堪えた様子もない。

「うっん。なんか騒がしいなって思ったから来たの。偶然だね」

スノウは微笑む。マーティは軽く溜息を吐き、バンダナがずれないように頭を搔く。

（なーんか、この子相手だと毒気が抜ける……）

マーティのせいで酷い目に遭ったにも関わらず、微笑みを浮かべるスノウ。得体が知れない、といえばそれまでだが、それ以前に物凄く鈍いように思えた。実際、鈍い。

（気を張ってるこっちがバカみたい）

「それで、何の用？　まさか、また暇潰しとか言わないでしょうねえ」

「違うよ。あなたも緑の村に向かっているの」

特に否定する理由もないので、マーティは素直に答える。

「そーだよ」

スノウの顔に笑みが広がった。マーティにはなぜ笑ったのかが分からない。

スノウはマーティの手を取り、上下に振った。

「じゃあ、一緒に行こ？」

マーティはスノウの言葉の意味が分からず、反射的にスノウを睨みつけていた。

「なんでそうなの？」

「どうせ行くなら一緒に行った方が楽しいよ」

「……あんたはともかく、あたしはあんたの連れに嫌われてると思うけど」

スノウは微笑む。

「誤解を解くためにも一緒に行こうよ」

「……………はあ？」

マーティにはスノウの思考回路が全く理解できなかった。

しばらくして戻ってきたスノウを見て、アクセルは目を細めた。

「それはどうした」

「それ、じゃなくて、マーティだよ」

少女——マーティは顔をしかめている。いかにも不本意、といった様子だ。

「捨ててこい」

「ちよつと待てい！」

マーティはスノウを押しつけ、アクセルの目の前へと躍り出た。

「あたしをそこら辺の犬や猫と一緒にすんなって！ この突っ込みバカ！」

アクセルは眉を顰める。

「突っ込みバカ？」

「水の都の時、バカの一つ覚えみたいに突っ込んできたじゃん。それも何度も！ あたしが何度バカだな、って思ったと思ってるの！ 身体に自信あるからって、無謀すぎ！ しかもこんなか弱い女の

子に向かって、剣を投げるとかつ、ありえないし！ 女の子を傷物にした罪は重いんだから！」

アクセルは意味が分からない、といった風にマーティを冷ややかに見ていた。スノウは二人をおろおろと見守っている。

「……それで？」

「あんた、硬いのは身体だけにしときなよ！ この子みたいに柔らか過ぎるのは困るけど、もう少し柔軟になれ！」

「……なんでお前に説教されないといけない」

「あんたがバカ過ぎるからに決まってるでしょ」

当然、とばかりにマーティは胸を張る。アクセルはそんなマーティに呆れた様な視線を向けていた。

「え、えつと……仲良くしょ？ ね？」

スノウは笑みを浮かべて二人の間に入る。アクセルは大きな溜息を吐いた。

「そもそも、オマエが原因なんだがな」

マーティも賛成するように頷いている。

「そうだよな。あたしたちの仲が悪い事は始めっから知ってたんだから、もつと考えなさいよ」

「えつ……え？」

スノウは混乱しているのかアクセルとマーティの間で、視線を何度も行き来させる。

「え……えーつと………仲良く、なった？」

「どうしてそうなる」

「あんた、目が悪いの？」

「あうう」

二人に睨まれ、スノウは小さくなるしかなかった。

（妙な事になったな）

マーティはちらり、と視線を彷徨わせる。

隣の座席には意気消沈したスノウ。そして目の前には緑の龍を模

した人型のアクセルがいる。非常に気まずい組み合わせだった。

（まあ、どっちにしる緑の村までだし、それまで我慢するか）

短気に見られがちなマーティであるが、実はかなりの気分屋なのである。気分によって態度の揺れが激しいため、扱いづらい人種であると本人も理解していた。もともと、理解した所で治るものでもないし、治すつもりもない。元々、そういう性質を持つ生き物であったためだ。

その所為か、あちらの世界からやって来たマーティにとって、この世界は非常に過ごし辛い世界である。

（あー…… 久々に日向ぼっこしたい……）

この世界の外に出るためには、位を上げなければならない。しかし、この世界で位を上げようとするのは、夢のまた夢の話だった。

（まあ、あたしはマスターのためなら何でも良いんだけどね）

あの鴉の下ではなければ。

マーティは内心で頭を抱える。

ジルの地位もマーティの地位も、特例として採用されているのだから、ジルもマーティも本来であれば位などない。この世界でその事を知っているのはジルだけだが、マーティはジルよりも立場が下だ。いざという時、強く出る事が出来ない。

（あーあ、どうしてマスターはジルの位をあたしより上にしたんだろ）

マーティはこの世界を見守っているであろう主人に思いを馳せた。

3 - 5 意外な伏兵

妙な事になった。

アクセルは内心で溜息を吐く。目の前には敵対していたはずの少女、マーティ。マーティの隣には、彼女の目の敵にされていたはずのスノウ。

（なんでこうなったんだ？）

そもそも、マーティをここまで連れてきたのはスノウ本人である。スノウはマーティにされた数々の事柄を覚えているのだろうか。覚えているのであれば、アクセルは正気を疑う。好き好んで厄介事を見の内に抱え込む必要もないだろう。

スノウに目を向けると、変わらず窓の外に目を向けていた。

「ちなみに緑の村に着いたら、あたしは勝手にどっか消えるから。だからそんなに心配しなくてもいいよ」

意外にもマーティがアクセルに声をかけてきた。

「違った？ 厄介事が勝手に自分から消えていくんだから、もっと嬉しそうな顔をしなさいよ」

「え？ マーティどっか行っちゃうの？」

スノウは首をかしげてマーティを見る。マーティは顔を逸らした。「別にあたしがどこに行こうと関係ないでしょーが。むしろ、いない方がそっちも楽でしょ」

「そうかな？ みんなで一緒にいた方が楽しいよ」

「……………なに、こいつ」

マーティは顔をひきつらせ、スノウから離れようとする。しかし、同じ座席に座っているため、離れる事は出来なかった。席から立ち上がればいいのだが、なぜかマーティはしない。

「ちよつと、あんた。こいつの保護者なら、さっさとなんとかしなさいよ！ あたしばっか大変な目に遭ってんじゃないか！」

「罪滅ぼしに丁度良いんじゃないか」

今にも噛みつきそうなマーティに対し、アクセルは適当にあしらう。マーティはしばらく驚いたように目を丸めていた。

「なっ……なんで、あたしがこんなのに罪滅ぼしなきゃいけないわけ？ 無理、無理。ぜえったい、無理！ むしろ、そんなの必要ないよ！」

「なら、好きにしろ」

「好きにするさ！」

マーティは立ち上がり、移動しようとする。しかしすぐに立ち止まった。マーティの服の裾を、スノウが掴んでいるのだ。スノウに目を向けると、スノウは真っ直ぐにマーティを見ていた。

「ちよつと。手、放してくんない」

「やだ」

また始まった、とアクセルは思う。

スノウが拒絶すると、それが受け入れられるまでスノウはこのままだ。始めの頃は分からなかったが、スノウは可憐な見た目に反して我が強い。こうなったスノウはアクセルの手にも負えないのだ。

「やだつて、あんた。子どもじゃないんだから……」

マーティは呆れたようにスノウを見ている。マーティはアクセルへと目を向けた。

「ちよつとあんた。見てないで手伝いなさいよ。このままじゃ、あんたたちと一緒にいないといけないじゃん」

「なんで一緒にいたら駄目なの？」

「そんなの決まってんじゃない。観察役でもあるあたしが、参加者に加担する事はっ」

マーティはそこで咄嗟に自身の口元を押さえる。そして恐る恐る、二人を見た。軽く咳ばらいをし、何事もなかったかのように仕切り直す。

「と……とりあえず、一緒にいてもあたしが得をしないの！ わかったー？」

スノウは首をかしげた。その表情は純粹その物である。

「分からない」

マーティは絶句し、諦めたように大きな溜息をついた。アクセルはマーティに少なからず同情する。もつとも、口には出さなかったが。

こうしてマーティを交えた一行は順調に目的地へと向かって行った。——少なくとも表面上は。

奇しくも、問題の種は同じ列車の中に紛れ込んでいたのである。

「んー……やっぱりドリトルは最っ高だね！　ボクがピンチの時に颯爽と駆けつけ、そして何事もなかったかのように振る舞う！　？　ふっ、俺はわざわざ自分のした事を自慢する様な男じゃないぜ？　つか？　くーっ、それでこそ男つてもんだよ！　さっすがドリトル！」

黒い狼は黒い目をきらきらと輝かせ、尻尾を勢いよく振る事で大きな感動を表現している。狼の目の前にいる人物は、狼の言葉を受けて腕を組んでポーズを取った。その姿は金属のように硬質な輝きを持つ機械族である。

「ふっ、そうだろうそうだろう？　一体何が最高だったかはさっぱり分からないが、俺はこの世界で一番すごいのだ！」

「さっすがあ。良く分かんないけど、カッコいい！」

「だろう。もつとこの俺を褒め称えたまえ」

異様なテンションを維持し続けるこの二人。黒い狼の名はカルー。機械族の人物はドリトルという。スノウたちの乗る場所から遠く離れ、先頭近い所に陣取っていた。そのため、彼らがどれだけ騒ごうとも後列にいるスノウたちには届かない。

「それでドリトル。次は一体何をするの？」

黒い瞳に期待を滲ませ、カルーは忠犬の如く腰を下ろし、言葉を待った。対するドリトルは焦らす様に答える。

「ふっ、そんなのは決まっている」

「どんなのどんなの？」

「それは……」

「それは……？」

カルーは息を飲んだ。カルーはドリトルを真っ直ぐに見上げ、ドリトルもカルーを真っ直ぐに見据えている。そして、ドリトルは高らかに答えた。

「まだ考えていないっ！」

一瞬、沈黙が場を包んだ。

しかし、それも即座に打ち破られる。

「さっすがドリトル！ なんにも考えてなくても胸を張ってそこま
で言いきれぬ図々しさ！ カッコいい！ 痺れるう。いつかボクも
ドリトルみたいになれるかな」

カルーは無邪気な目を輝かせ、ドリトルを見上げる。ドリトルは鷹揚に頷いた。

「なれるさ、なれるさ。カルーにはその素質があるのだからな」

「ほんと？ やったー！」

様々な思いを乗せ、列車は進む。その先に何があるのか、何が待ち受けているのか、誰も知らない。

3 - 6 森の中

スノウたちの乗る列車は決して止まらない。なので途中で降りる場合も列車から飛び降りる必要があった。緑の村の手前でスノウたちは列車を降りる。スノウは突然変わった風景に驚き、周囲を見回した。

来た方向を見れば砂漠。反対の方向を見れば、唐突に森がある。森の中はどことなく湿気が籠っており、あまり長居したい場所とは思えなかった。

「ここが緑の村？」

スノウは森に指を差してアクセルに尋ねる。アクセルはいや、と否定した。

「ここは入口だ。緑の村は他の場所と違って、人がかなり少ない。見ての通り、地味な上、湿気も多いんだ。好き好んでこの土地に留まる奴等は相当な変わり者しかない」

「まあ村長が怠け者つても関係してるんだけどね」

マーティは森を見据えながら付け足す。アクセルは驚いたようにマーティを見た。

「知り合いなのか」

「まあね。あたしも水の都の代表だし」

「代表……？」

スノウは首をかしげる。

「緑の村でいう、村長。煉瓦の町でいう、町長。みんな同じ立場だよ。まあ、あたしは別格だけどね」

「確かに都中の人間でスノウを襲うような奴だからな」

「んー、それはちょっと違うけどね」

マーティはアクセルの皮肉を適当に流す。

さて、とマーティは二人の前に立った。

「それじゃ、あたしはここで！」

駆け出そうとしたマーティの袖口を、スノウは掴み損ねる。マーティはそのまま走り去ってしまった。

「バイバイ」

スノウとアクセルは森に溶けていくマーティを見送る。スノウは寂しげに伸ばした手を握ったり、開いたりしていた。

「……また、会えるかな？」

「さあな。少なくともオレは会いたくない」

スノウは肩を落とす。

「アクセル……マーティと仲良くなって欲しかった……」

「無理な注文だ。それより、オレたちもさっさと行くぞ」

二人は森に向かって歩き出す。

森の中は木々が鬱蒼と茂り、隙間から空を見上げる事が出来ない。歩く土も、踏む度にどこか湿気を帯びた感触を返す。泥とまではいかないが、足元は滑りやすくなっていた。その上、木の根の部分が露出しており、気を抜くと躓きそうになる。そのため、足元を確認しつつ、一步一步を確実に踏む必要があるのだ。砂漠を歩くよりは遥かに足は楽だが、この森は精神的に疲れる。気分的にどちらも不快な事に変わりはなかった。

「……なんで村で下りなかったの？」

スノウは思わず言わずには居られなかった。わざわざ森の入口で下りなくとも、緑の村で下りた方がずっと効率が良いだろう。スノウにはそれが不思議でなかった。

「そういえば、緑の村に行くのは初めてだったな」

スノウは頷く。アクセルは時折、足を滑らせそうになるスノウを支えながら前へと進んだ。

「あそこは緑の村って言われているが、実際には周りが沼地で囲まれているんだ。列車はその沼地を避けて通る。確かに直前に下りれば、村からかなり近い位置に着けるが、沼が近い所為か足場が悪過ぎる。今、歩いているここよりもずっと酷い。だから余程の事が無い限り、森の入口で下りるんだ」

納得したか、とアクセルは確認する。スノウは一応、と答えた。

「なんで沼が近くにあるの……」

「さあな。オレも緑の村はあまり来た事がないからな。詳しくは知らない」

「もう少しまとまな所に村を作ればいいのに」

アクセルもスノウの言葉に同意する。

「全くだ。だが、この場所にあるんだから仕方ないだろ。ここから離れると、また砂漠だしな」

スノウはアクセルの説明を聞きながらウンザリしてきた。

思えば、この世界はとても暮らしにくい様に思える。

明かりがなければ暗闇に包まれる世界。空にはかろうじて星の明かりがあるだけ。大地の半分以上は砂漠で、人の暮らせる土地はごく僅か。その僅かな土地にしても、過ごしやすい土地とは言い難い。その上、型によって差別される。

（そういえば、この世界にはどれくらいの人がいるんだろ）

スノウはそんな事をふと思った。だがうっかり足を滑らせ、その考えも吹き飛ぶ。咄嗟にアクセルが支えたおかげで助かったが、別の事を考えていると転んで悲惨な目に遭いそうである。

「おいおい、しっかりしろよ」

アクセルはスノウに呆れたような視線を投げた。スノウは居た堪れなくなり、俯いて足元を注意しながら歩く振りをする。実際、注意する必要があるので振りではないが、気分的には誤魔化している様に思えたのだ。

「平気」

アクセルは軽く溜息をつく。アクセルはスノウの手を取り、歩き出した。スノウは驚いて顔を上げる。

「一人で歩ける」

「危なっかしいからダメだ」

真っ直ぐ見返され、スノウは思わず視線を逸らす。言いにくそうにスノウは言葉を重ねた。

「だって、アクセルも一緒に転んじゃうよ」

「オレはオマエのように抜けてない」

オマエのようにそう簡単には転ばない。そう言っている気がした。スノウはアクセルの言葉が不服であったが、実際に森の中で何度も転んでいるため、反論する事は出来なかった。スノウは大人しくアクセルに手を引かれている。

「……………」

以前はこうして繋いでいても何も思わなかったはずなのに、アクセルに手を引かれて一緒に歩く事が、今のスノウには不思議と嬉しかった。このままずつと繋いでいたい、とスノウは漠然と思う。だけど、それが決して叶わない事も心のどこかで理解していた。

スノウは砂時計の入っている自身の腕を見る。そうしても砂時計の姿は見えないのだが、そうせずには居られなかった。

（早く……急がないと……）

なぜ、自身がそこまで焦っているのか、全く分からなかった。

3 - 7 望まぬ再会

泥に足をとられつつも、アクセルとスノウは緑の村までやってきた。

緑の村の周囲は他の場所よりも遥かにぬかるんでおり、足が泥に沈む感触が伝わってくる。村の周囲は川と言うよりも泥沼に囲まれており、板で作られた橋を渡る事でようやく村の中に入る事が出来た。スノウは重くなっている自身の足を見る。

「……靴が泥だらけ」

「まだマシな方だ。酷い時は脛の部分まで沈むらしい」

脛まで沈んだら前に進めないのではないだろうか、と内心で考えつつ、スノウは泥を気にしない事にした。

「でも、村の中はそんなにぬかるんでないね」

「この辺りの地面は他の場所よりも熱を持っているらしい。原理は分からんが、とりあえず他の場所よりは足場の確保が出来るそうだし、ふうん？」

スノウもあまり理解する事は出来なかったが、そういうものなのだろう、と思う事にする。深く考えても、スノウに分かる事でもない。

「さて、この長に話を聞くとするか」

スノウは首をかしげる。

「なんの話？」

「……こちらの話だ。オマエの気にするような事ではない」

アクセルの言葉をスノウは不服に思いつつも、口には出さない。それよりも、スノウは先程から何かに惹かれていた気がしていた。アクセルと分かれ、村の中を探索する。

村はそれほど大きくない。煉瓦の町や水の都と比べれば、その規模は四分の一ほどだ。建っている建物も両手で足りてしまうほどである。それに比例して、人も少ない。水の都のように襲われる事は

ないようだが、村人からは遠巻きに見られているのをスノウは感じていた。その視線は決して友好的とは程遠いものである事にも気付いている。

村の中を一巡して、スノウは首をかしげた。

（ここには……ない……？）

村の外に目を向けるが、それだけで奥が見通せるはずもない。

（外に出ても……いいのかな？）

スノウは周囲を見回して、アクセルを探した。しかし、アクセルの姿は見当たらない。村人に聞こうにも、これまでの経験から近寄りにくかった。

「どうしよう……」

スノウは途方に暮れる。その時、背後から聞き覚えのある声が聞こえた。

「ようやく着いたぜい、カルー。ここが緑の村さ！」

「おおっ！　ここが噂の緑の村かあ。こんな場所に住もうとするなんて、変わった人もいるんだねえ。色んな意味で尊敬しちゃうよ！」

「だろうだろう？　そうだ。足に着けた板はもう外して良いぞ。今ではただ動きにくいだけだな」

「ほんと？　これ、ずっと動きにくかったんだよね。でも、これのお陰でボクの毛並みが汚れなかったんだけど。それにしても、こんな物を考え付くなんて……っ！　さっすがドリトル！　あつたま良いっ！」

妙に高いテンションで会話を続ける二人。スノウは意を決して背後を見る。

そこには黒い狼と機械型の人物がいた。黒い獣型の狼には見覚えがある。かつてスノウを攫った人物だ。隣の人物に見覚えはないが、雰囲気から察して二人の仲は良い様である。

（……とりあえず、隠れよう）

黒い狼がスノウを攫った人物であることは分かるが、二人の雰囲気は緊張感に欠けていた。つまり、ここにいる事は全くの偶然なの

だろう。

スノウは背を向け、不自然にならない程度に早めに歩く。本当は今すぐ駆け出したいが、そんな事をして注目を集める必要もない。

しかし、スノウは気付いていない。

スノウの存在はこの世界では異質であり、同時でとても目立つ存在である事に。スノウが例え、何もしていなくとも人々はスノウに視線を吸い寄せられる。そしてスノウの姿を見た途端、深い嫌悪を覚えるのだ。それも今では煉瓦の町にいた頃とは比較できないほどに、強烈なものとなっている。

この村の人々がスノウに何もしないのは、偏^{ひとへ}に？双剣のアクセル？の連れだからだ。名高い剣聖の連れに手を出そうとするような無謀な人はこの村にはいない。しかし、部外者である彼らは違う。そもそも、彼らはスノウが？双剣のアクセル？の連れである事を知らない。

黒い狼はスノウが視界の端に入ると、かつてとは比較できないほどの強烈な嫌悪感を覚えた。

「なに、アレ」

周囲の温度が下がるような声音に、スノウは身体が固まる。黒い狼の言葉に気付いた機械型も、スノウに目を向けた。機械型は表情が表面に出ないので、顔を窺う事は出来ない。どちらにしろ、スノウは背を向けていたため、顔は見えていなかった。それでも友好的でない雰囲気のスノウは察する。

「うん。見ての通り、人型だね。カルーはどうしたい？」

スノウは背を向けたまま駆け出した。

うーん、と苛立ちながら黒い狼は考える。まとまらない感情を隣の男に吐露した。

「ボク、あれ、すごい嫌い。前見た時よりも、ずっと、嫌い。なんでか分かんないけど、嫌い。なんでなんだろ。分かる？ ドリトル」「さあな、分からないな。けれど、俺たちは商売人。ということは、カモがまた目の前に現れたと思えば良いんじゃないか？」

機械型の言葉に黒い狼は大喜びではしゃぐ。先程までの緊迫した空気は完全に霧散していた。その代わり、異様に高いテンションが復活する。

「さっすが、ドリトル！ いつにも増して冴えてるう！」

「だろうだろう？ もっと俺を褒めてくれたまえ」

胸を張り、更に称賛を要求する機械型の男。それを正直に受けた黒い狼が更に褒め称えた。

そうこうしている内に、スノウは彼らの視界から消えているのだが、二人は気付かない。もっとも、二人はそういった獲物を追うのが得意である。罾を張り巡らせ、効率よく捕らえるのが得意なのだ。『ようし、そうと決まれば早速狩りに行きますか』

「行きますか！」

こうして追いかけっことは再開した。

3 - 8 逃走

スノウは村を出て、足場の悪い森の中をひたすら走った。ぬかるみに滑りながら、時折木の根に躓きながらも走り続ける。スノウは恐怖に包まれていた。

（怖い、怖い、怖い）

未だかつて無いほどの憎悪の視線を向けられ、スノウは恐慌状態に陥っている。本来であればアクセルを探そうとしただろうが、その事すら思い浮かばず、ただ闇雲に森の中を走っていた。

（早く、早く逃げないと）

肩越しに後ろを見るが、誰も追いかけてきていない。しかし相手の姿が見えていないとしても、スノウは安心できなかった。むしろ見えない相手に恐怖を覚え、焦燥感が増していく。

頭上の木が揺れ、スノウは咄嗟に立ち止まる。木の上から黒い影が落下してくるのを視認し、即座に踵を返した。

「あーあ、逃げられちゃった。ドリトルー、そっち行ったよー」

黒い狼は緊張感の欠ける声を相方にかける。スノウのすぐ傍からあいよー、という気の抜けた声が聞こえた。スノウは方向を変え、泥に足を取られながらも止まる事なく走る。

「うーん……逃げ足が速いねえ」

「そーだねえ。でも、ボクの足の方がずっと速いよ」

感心するようにドリトルは呟き、カルーは胸を張った。カルーは早速自慢の足を披露しようとするが、泥に足を取られて盛大に転んでしまう。

「うあっ」

「駄目だよ、カルー。ここでは足が速い事は必ずしも利点じゃないんだからさっ。それに、焦らなくても大丈夫だって。なんてったって、こつちには秘中の作戦があるんだから」

ふっ、と恰好を着けてドリトルはカルーを諷める。カルーは泥か

ら立ち上がり、輝く目をドリトルに向けた。

「そーだねっ！ ボクたちには最っ高の作戦があるもんね。あんな人型なんてイチコロだよ！」

「そうだともそうだとも。我々に勝とうなんて、甘い考えを持とうとする方がおかしいのさっ」

「さっすがドリトル！ カッコいい！ それにとっても冴えてるう！」

「だろうだろう？ もっと褒めたまえ」

緊張感の欠片すらない会話を背中中で聞きながら、スノウは懸命に走る。もう相手の姿は見えないにも関わらず、まだ近くにいるような錯覚をしていた。

（どうしよう、逃げられない。……アクセル）
走りながら、スノウは心の中でアクセルを呼び続けた。

その頃、アクセルは村長を探して村人々に訪ねまわっていた。クラウドの事も尋ねるが、やはり色好い回答は得られない。

（なぜ、誰もクラウドの事を覚えていない）

クラウドは緑の村の出身である。本来ならば、見知っている人がいなければおかしいのだ。

（なぜ。なぜクラウドの事を誰も知らない）

最後の頼りは、この村の長である獏だけだった。

村の人々から、村長は留守だと教えられている。どこに向かったかと聞けば、一様に首をかしげていた。

「あの人は唐突に動くからなあ」

苦笑い気味に村人たちは答える。

「そういえば、珍しく仕事するぞー、って張り切ってたんだか張り切っていないんだか、よく分かんない事を口走ってたな。村長が張り切る時は大抵、ロクでもない時だから気をつけるよ」

どういった人物なのか面識はないが、それだけでも厄介な人物だと知れた。

アクセルは溜息をつき、村の中を見回す。しかし目的の人物は、見つけれなかった。その辺りを散策しているのだろう、と特に気にも留めない。しかし村を一周してもスノウの姿が見えない事を怪訝に思う。

「スノウ？」

アクセルはなぜか、その事に強い不安を覚えた。

走ったり回っていると唐突に視界が広がり、スノウは咄嗟に立ち止まりかける。しかし、立ち止まるのは危険だと思い留まり、そのまま走った。

視界の先には沼があつた。もっとも、沼というには水が青く澄んでおり、どちらかというならば池のように思える。池の中央には台座があり、何かを捧げているようだが、何を捧げているかはスノウの位置からは分からなかった。しかし、それを視界に入れた途端、スノウは本能的に立ち止まる。

「……………」

初めて見るはずなのに、台座の上にある物を知っている気がした。スノウは周囲を見回し、唯一台座に向かう事が出来る橋を見つける。スノウは追われているにも関わらず、橋に向かって駆け出す。

冷静に考えるならば、それは自殺行為といって差し支えなかった。台座に向かうための橋は一ヶ所しかない。つまり、自ら退路を断つと同義であつたのだ。

「……やっぱり」

スノウは台座の目の前まで歩き、その上にある物体を見て納得する。

台座の上にはスノウが惹かれてやまない水晶があつたのだ。

スノウは水晶に手を伸ばすが、横から何かが衝突し、水晶は池中へと落ちてしまう。

「！」

スノウは咄嗟に手を伸ばしたが、届かなかった。

「ふははははっ。どうだ、俺のロケットパンチは！」

スノウは声のする方に目を向け、台座に落ちている腕を発見する。それを手に持ち、思わず観察してしまった。

「……………」

なぜ腕がここにあるのだろう。

そんな事を考えていると、笑い声が響き渡った。

「どうだ、素晴らしいだろう！ この俺の腕っ！ 完璧な機能美を備えた、とってもスツマアートな腕だろう。分かっている、分かっている。無理に口にする必要はない。なんと言っても、口にする事すら控えてしまうような機能美を持っているのだからなっ！ 仕方ないだろう」

「そうだ！ ドリトルの腕は最っ高にスツマアートでカッコいいんだからな！」

スノウは妙なテンションを持つ二人に、どう反応するべきか、非常に困った。

（とりあえず、この腕、どうしたらいいんだろう）

スノウは律儀にも腕を手に持ったまま、困惑しているのだった。

幕間

マーティは森の中を飛び回った。木の枝から木の枝へ移り、地に足を着ける事なく飛び続ける。その様は猫の様にしなやかで、身軽さを感じさせた。

しばらく飛び回り、一気に視界が開ける。森を抜けたのだ。それと同時に、視界一面の沼が広がる。

（遅かったかあ……）

マーティは眉を顰め、周囲を見回し、ようやく目的の人物を発見する。その人物は巨大な沼の前で、うつらうつらと頭を揺らしていた。

「いた！ 獺、あんたねえ……」

マーティは獺に話しかけようとして、獺が寝ているのに気付く。

マーティは顔を顰め、ポーチからナイフを取り出す。

「ひ、と、の、は、な、し、を、聞けーっ！」

マーティは木の上から獺に向け、ナイフを投げつける。その瞬間に獺は目を覚まし、ふわふわとマーティの元へと近寄った。獺の足の部分はワタ菓子のような雲となっており、常に浮いているのだ。

「あー、マーティー。久しぶりー」

獺が動いたため、ナイフは大きく外れる結果となる。もともと、

マーティは始めから当てるつもりはなかった。獺はふわふわと浮遊した状態で近寄り、マーティの目線と同じ高さまで浮き上がる。

「ちよつと、獺。あんた、自分が何したか分かってんの？」

マーティは木の上で腕を組み、獺を睨みつけた。獺は眠そうに目を擦りながら首をかしげる。

「んー……？ 神殿に誰も近寄れないようにしたよ。ちゃんとお仕事したんだよー。すごいでしょー」

「すごいとか、すごくないとか、そういうのじゃなくて。こんな事したら誰も神殿に入れないじゃない！ 一体あんた、何考えてんの

？」

マーティの言葉に獺は驚いたように目を丸めた。もっとも、いつもより目が開いたという程度でしかない。

「えー？ いけないのー？ だって、これで問題解決じゃないかなあ？」

「全っ然、解決してないっ！ むしろ、これじゃあ問題が増えただけじゃん！ これ、一体どうすうつもり？」

「んー？ そうなのー？」

マーティは獺を睨みつけるが、獺は気付いていない様である。不思議そうに首をかしげていた。

「？んー？ そうなのー？？じゃなくって！ 言っただしょ、参加者がいるって。そいつが入れなくなるじゃない。一体どうするつもり？」

「あー、参加者いたんだねー？」

話を通じない、とマーティは肩を落とす。話自体は通じているのだが、会話の内容にかなりのズレがある。

「あのさ、人の話、聞いてた？ 集まりでその話、してたでしょ。

確か、前日も前々回もその話、したはずだよな？ なんで覚えてないかな……」

「寝てたー」

獺は片手を上げて答える。マーティは大きく息をついた。

「あんたって……」

マーティが顔を上げると、獺は珍しく顔を顰めている。マーティは木の幹にもたれかかりながら、獺に尋ねた。

「どうしたの？」

獺は浮かない顔をしたまま、呟くように答える。

「んー……侵入者？ 落ちた？ えー、あそこ、深いのにい。あー……めんどくさいなあ。でも、やらないとダメなんだよねえ……」

獺はマーティを見る事なく、飛び去ってしまう。マーティは怪訝に思いつつも、獺の後ろをついて行こうとして足を止め、背後を振

り返る。そこには視界一面の沼が広がっていた。

「……この沼、さすがにあたしでもどうしようもないよ。ジルに任せられないか」

後で遠回しに嫌味を言われるであろう事を考え、マーティは大きく息を吐いたのだった。

3 - 9 最後の水晶

アクセルはスノウの姿が見えない事に不安を抱き、村の外へと足を向けた。しばらく歩くと、つま先の部分が深く沈み込んだ足跡や、何かが滑った様な跡を発見する。その足跡は一つではなく、三種類あった。アクセルは焦りを覚え、滑らないよう注意しながら足跡を追って走る。

足跡を追っていくと、唐突に視界が開いた。目の前には大きな池があり、その中央には台座のようなものが捧げられている。台座の近くに見慣れた人影を見つけた。

「スノウ！」

「！ アクセル」

スノウはなぜか、途中で切れた腕を持っている。スノウからは困惑と、焦りを感じられた。

「スノウ、一体どうしたんだ」

スノウは困ったように切れた腕へと目を向け、顔を上げてある人物へと視線を送る。

そこには怪しい二人組がいた。機械型と、狼のような獣の姿をした人物である。獣型は珍しいため、アクセルは少し驚く。この世界では獣型は滅多にいない。余程の運がない限り、姿を見る事すらないのだ。

「なんだ、お前！」

アクセルの視線に気付いた狼が、歯を剥き出しにしてアクセルを威嚇した。隣の機械型の人物が、背を撫でて狼を宥める。

「カルー、やめるのだ。腰に差している二振りの湾曲刀。あれが本物であるのならば、あの竜人型の名前はおそらくアクセルだ。？ 双剣のアクセル？ と言う名を聞いた事があるだろう、カルー。我らでは到底太刀打ち出来る相手ではない」

？ 双剣のアクセル？ という言葉に、カルーは身体を震わした。

「あの？双剣のアクセル？……。たった一人で百人いる盗賊団を壊滅させたっていう、あのアクセル？」

「……あの時は二人だったがな」

アクセルは呟き、片方の湾曲刀を抜く。そのまま切っ先を二人に向けた。

「何の用かは知らないが、去るがいい。それとも、やつ裂きにされるのがお望みか？」

二人は勢いよく首を振る。

「ま、まさか。そんなのご免だよ」

「おう！　だが、俺の腕は返してもらってからな！」

機械型の人物はスノウを肘から先の無い腕で指す。スノウは驚き、手元にある腕を眺めた。

「……返します」

スノウは橋を渡り、機械型の人物に近寄って渡そうとする。アクセルはそれを片手で押し留め、スノウから腕を奪い取った。それを二人に向かって投げ渡す。足元に落ちた腕を拾い、それをそのまま腕へと装着する。

「これで用事は終わったはずだ。さっさとどこかへ行くがいい」

二人は顔を見合わせ、そのまま走り去って行った。

アクセルは湾曲刀を鞘へと戻す。スノウに向き直り、アクセルは大きく溜息をついた。

「なぜ、こんな厄介な事に巻き込まれた」

「……好きで巻き込まれた訳じゃない」

スノウは顔を逸らし、項垂れる。

「オマエは珍しいんだ。もっと周りを警戒すべきだ。さっきみたいにホイホイ近付くのは感心しない」

「……そんな間抜けじゃない」

「いや、抜けている」

スノウは眉を顰めるが、分が悪い事は理解しているため、それ以上は言わない。

スノウはふと、思い出したかのように池に近寄る。アクセルは咄嗟にその襟を掴んだ。一瞬首が絞まり、スノウは恨めしげにアクセルを見た。

「なに」

「あまり近寄るな。落ちる」

「落ちない」

スノウはアクセルの腕を襟から外し、再び池へと近寄る。その時、頭上を何かが通過した。そのまま目の前に現れ、スノウは思わず身を引く。

それは獺だった。獣型なのだろう。獺そのものの姿をしている。しかし、その足元には本来あるべき足が無く、代わりに雲で支えられていた。ふわふわと雲に乗りながら、眠そうに目を擦る姿を見て、アクセルは緊張を解く。

「んむうー？ あれを落としたのはキミなのかなあ？」

獺は宙に浮いたままスノウを見て、首をかしげる。

「何の事だ」

「んー、ちよつと待って」

獺は大きく息を吸い、そのまま池の中へと潜っていく。突然の事に、二人は呆気にとられた。

スノウはすぐに池に近寄り、そのまま中を覗き込む。いくら透明度が高いと言っても、奥まで覗き込む事は出来ない。

「……大丈夫なのかな」

「さあな」

不安そうに呟くスノウに対し、アクセルは冷めている。

「ちよつと、獺。待ちなさいって、言ってるでしょ！」

聞き覚えのある声に二人は背後を振り向く。そこには額に汗を浮かべたマーティがいた。

「あ、マーティ」

スノウの顔に笑顔が浮かぶ。マーティはスノウの表情を見て、顔を引きつらせた。

「なんであんたがここに……あ、そつか。ここがそうだっけ」

マーティは周囲を見回し、目的の姿が見えなかったのか、大きく肩を落とす。

「ねえ、あんたら獺を見なかった？　なんか雲の上に乗っちゃって、寝むそんな顔してる奴なんだけど」

「それならその池の中だ」

アクセルの言葉に、マーティは眉を顰める。

「は？　池の中？」

「うん。多分、何かを拾いに行ったんだと思うよ」

マーティはそういう事か、と軽く息をつく。

「——って事は、最後の二つ触ったわけ？」

「最後の一つ？」

スノウが首をかしげると、マーティは軽く舌打ちをした。

「まだなのね」

唐突に水飛沫が上がり、水晶を手に持った獺が現れる。スノウたちにも盛大に水飛沫がかかった。不思議と、獺の乗っている雲は一切濡れていない。

「もつとまともな現れ方は出来ない訳？」

「んー？　何の事？」

獺は身震いをして身体の水気を取り除く。その水が三人に派手にかかる。

「あんた、わざとやってんの？」

「んー？　何の事？　もつと分かりやすく説明してくれないと、分かかんないよお」

「あんたねえ……」

獺は眠そうに目を擦り、その拍子に手に持っていた水晶を落とすてしまう。

「ちよつ、あんた。せつかく拾ってきたのに、何してんの！」

再び池の中に落ちようとする水晶に、スノウは咄嗟に手を伸ばす。水晶を腕に抱えた途端、スノウの意識は盛大な水音と共に闇に落

ち
た。

3 - 10 池の傍で

「スノウ！」

アクセルは手を伸ばすが、スノウは激しい水音と共に池の中に消える。アクセルは反射的に飛び退いて、水飛沫を避けた。

「あちゃー……もしかして、これであの子はおしまい？ いや、でもな……」

マーティは頭を抱え、恨めしげに獺を見る。

「ちよつと、獺。あれ、さつさと拾ってきなさいよ」

「むー……やだ」

獺は眠そうな目を、更に細めて拒絶の意思を表す。マーティはそれに呆れた様な視線を投げた。

「今回の件については、完全にこっちの過失でしょ？ だったら、

それは修正しないといけないじゃん。嫌がる権利はないんだよ」

「違うよー。始めに落としたのは、あの白い子だよ。だからあのままでいいんだよー」

マーティは分かりにくい獺の言葉を咀嚼する。

「……つまり、落としたのは元々あいつだから、こっちは悪くないって事？ そんでもって、本人に拾わせるために、わざわざ落ちてた場所に戻したって訳？」

「そうだよー。軌道修正しただけー」

獺は気の抜けた笑みを浮かべる。

「……スノウはどうなる」

アクセルの地を這う様な言葉に、二人の視線が集まった。

獺は何でもないように答える。

「ダメならダメで、それも運命。這い上がってくるなら這い上がってくるで、それもまた運命。本当は、こっちから干渉できないんだよー」

マーティは軽く溜息をついた。

「獭、あんたの言い方分りにくい。……とりあえず、あたしたちは手出しできないって事。どれだけ助けたくとも、手を出す事は許されない。そんな事したら、あたしら一気にこれだって」

マーティは自身の首を手で横に引く。

「だから、今の状況であの子を救えんのはあんただけ。その判断は好きにすれば良い。——ああ、先に言うておくけど、浮かんでくるのを期待しない方が良いよ。あの水晶、重いから。」

でも、あの子はワタ属だから、気にしなくても勝手に出てくるとは思っけどね。溺れる心配もないし」

マーティは水面を覗き込む。

「あたしらに出来るのは、見守る事だけ」

「以前はスノウを追いかけていたのにか？」

アクセルの言葉にマーティは身体を起こし、苦笑する。

「あれは上からの許可があったからよかっただけ。普通はアウト」

「焦らなくても結果は出てくるんだから、気長に待っていれば良いよ」

獭はどこからか湯呑を出し、のんびりと中身をすすった。アクセルは眉を顰める。マーティは頷いて、獭に同意を示した。

「そゆこと。まあ、あたしたちもあんたに干渉出来ないし、あんたは好きにしたら」

「オマエたちはここでスノウを待つつもりなのか」

アクセルの言葉にマーティは笑みを浮かべる。

「いけないの？ でも、これで最後なんだから、最期まで見るつもりだけ」

「最後？」

獭が湯呑を口から離し、ほっと息をついて答えた。

「水晶は全部で三つ。あの子は二つ触ったから、これで最後。そして、ここから先に進むなら、あの子の役割は終わる。進まないなら、静かに暮らせる。だけど、それを決めるのは本人だよ」

「あたしの勘だと、あの子は進むね。例えそれが——」

破滅への道だとしても。

アクセルはマーティを睨みつけた。

「どう言う意味だ」

「言葉通りだよ。どっちにしても、あの子の時間は残されてないんじゃないかなあ」

マーティは獺へと視線を向ける。獺は首をかしげた。

「どうだろうねー。分かんない。でも、人型は普通よりも短めに設定されてるから、可能性は大だねー」

「……先程から、何の話をしている」

獺はアクセルに視線を送る。獺は口の端を持ち上げた。

「知りたい？」

「なにを」

「この世界についてだよー。知りたくなーい？」

マーティは眉を顰めた。

「ちよつと、それはさすがに抵触するんじゃない？」

「いいじゃーん。少しくらいなら平気だって分かってるし」

その言葉にマーティは目を見張る。

「まさか、あんた……」

「うん。たまに教えてる。だから、どこまで大丈夫かー、とか知ってるよー」

「あんた、死にたいの？」

マーティの言葉に、獺は首をかしげた。

「どーして？ 最初から生きていないのに、死ぬ事はないよー。マーティとジルは別だけど、こっちはただの人形に戻るだけー。問題ないしー」

マーティは顔を歪め、二人に背を向ける。

「……………話が終わったら、呼んで。あと、あの子が出てきても呼んで」

「りょーかい。また後でね、マーティ」

マーティは背を向けたまま駆け出し、どこかへと去っていく。ア

クセルはマーティの背を見送った。

獺は首をかしげ、アクセルを見る。

「なら、話をしよっかー。なにが聞きたい？ どこから知りたい？」

「……オマエは、一体なにを知っている」

獺は湯呑をすすった。

「ぜーんぶ、とまではいかないけど、大体は知ってるかなあ。消耗品だけど、それなりに大切にされてるからー」

「……オマエたちは、何者なんだ」

獺は細い目を更に細め、微笑んだ。

「何者か、知りたい？ そうなると、自然と君自身の事にも関わってくるけど、知りたい？」

「遠回しな言い方はやめろ。斬るぞ」

アクセルは湾曲刀を抜いて、獺の首元に突きつける。獺は暢気に欠伸をもらした。

「短気だなー」

なら始めよっか、と獺は語り始めた。

4 - 1 獾の説明

この世界は元々、神様の気まぐれで造られたんだ。

ん？ 神様って何かって？ そこから始めるの？ すごい長くなるよ。……あ、やつぱりいい？ なら続けるよ。

それで、ここにいる住人たちには始めから制約が科せられるんだ。具体的には以前の記憶がないとかー、この世界から消える時は世界から存在していた事を抹消されるとか。代表的な例はそんなの。他にももつとたくさんあるけど、あまり関係ないし、今回は全部飛ばすね。

「という事は、クラウドの事を誰も覚えていないのは、それが理由なのか？」

そうなるね。ああ、でも例外があつて、その人物の遺品を持つてると忘れないんだよー。君の場合、その武器だね。でも、違和感たつぷりの物を持たせる訳にもいかないから、最適化されるんだよ。君の場合は湾曲刀といった具合に。

納得したー？

「もう一つ。クラウドがいた時といなくなつてからの通り名が変わっているんだ。その理由はなんだ」

それは当然だよー。世界にいなかった人の通り名があるなんて、おかしいでしょ。だから、それも都合が良い様になるんだよ。つまり、二人をあらわしていた通り名なら、一人分になるね。君の通り名がどう変わったかなんて、どうでもいいけどー。

「……スノウに時間が残されていないというのは」

言葉通りの意味ー。人の形に近ければ近いほど、寿命は短い。だから人型は少ないんだよ。それに加えて、人の形に近いという事は、持ち主に愛されていたって事。だからー、他の人たちからは嫌われるよねー。だって、まるで自分たちが愛されなかったみたいに見えるんだもん。

「持ち主？」

そー、持ち主ー。けど、ここはそれ以上言えないね。

「なら質問を変えよう。あの水晶は一体何だ。役割を果たすとは、どういう意味だ」

うん。じゃあ、まず水晶からね。

水晶つてのは、記憶の断片を思い出すための物だよー。あれを全部触る事で、記憶をほとんど全部取り戻せるんだ。

「記憶？」

そー、以前の記憶。この世界に来る前の記憶ー。それがないと先に進めないんだよー。

「先？」

それは水晶を全部触って、資格を持った人にしか教えられないな。だから、教えなーい。

それで、役割を果たすつてのは、君たちがこの世界にいる存在理由みたいなものー。これも教えられないね。まあ、水晶を全部触れば自然と分かるんだけど。

「その先に破滅があるという事か？」

破滅と取るか、幸福と取るかは本人次第。だって、それが君たちの本来の存在意義だもん。だけど、これに関しては果たす人は滅多にいないよねー。仕方ないけど。

「どういう意味だ」

言葉通りだよ。この世界にいるほとんどの人は存在意義を果たさない。別にそれが悪いとは言わないよ。だって、誰かのために命を投げ出すなんて無理だよ。

「命を投げ出す？」

そ、命と引き換えに願いを果たす。それが君たちの本来の役割。

「役割……」

そーそ。役割ー。本来、この世界はそのためにも造られたんだよ。ある小さな命すら持たない、小さな意志の願いが始まり。気まぐれに聞きいれた神様が、彼らのために世界を造った。その時も役割を

果たす人は少なかったらしいけどね。

「……到底、信じる事が出来ない話だな」

獭はふわふわと浮かびながら眠そうに目を擦った。

「そうだね。信じられないよねー。役割とか命とか、正直なにそれって感じたよねー」

「……お前たちは何者なんだ」

獭は気の抜けるような笑みを浮かべる。

「ぼくたちは、この世界の監視者。神様から役割を与えられ、それを見守る者。たまに調整もするんだよー。今回の事とかそうだよね。あの子は、普通の人よりも前の記憶を覚えてるからー、少し妨害したんだー。……まあ、記憶があるのは急ぎだったからってのもあるけど」

「監視者、か。それについても疑問は尽きないが、それよりも急ぎとはどういう意味だ」

獭は目を細める。

「むふふ。普通の人とは違って、重要度が高いんだよね。だからあの子は自力で、強引に捻じ込んできたんだよ。だから、記憶の調整が出来てないんだ」

「答えになっていない」

「詳しくは言えないよー。それは本人に聞くんだね。こちらからは何も言えない」

アクセルは獭を睨みつけるが、獭は気にした風もない。

「……さて、あの子は今、どんな夢を見てるんだろうね」

*

「いつまでも人形を持っているなんて子供っぽいと思わない？」

友人の言葉に少女は首をかしげる。

以前よりも少女は成長しており、どこか雰囲気も変わっていた。

髪が伸びた、という事もあるのかも知れない。少女は部屋に友人を招き、お菓子をつまみながらお喋りをしていた。

「そうかなー」

「そうだよ。だって、もうすぐで中学生なんだよ。いつまでもそんなので遊んでたら馬鹿にされないかな」

少女は考え、棚の上にいるこちらに目を向けた。しばらく向き合
い、視線を逸らす。

「別に良いんじゃないの？」

「えー、ヤダよ！ 中学生だよ？ もう、小学生じゃないんだから
！」

うーん、と少女は考える。

「確かに中学生にはなるけど……それって、あまり関係ないんじゃない？」

「えー！ 全然違うよっ！」

少女は友人の言葉にふうん、と相槌を打った。反論するのが面倒になったのだろう。少女は先程とは違い、友人をどこか一歩引いた場所から眺めているように感じる。

「別に好きな物は好きな物のままで良いと思うけど……」

少女の呟きを、友人が聞き入れる事はなかった。

4 - 1 獺の説明（後書き）

中途半端ですみません。クライマックスに突入しています。

世界の説明についてですが、作者が失念して書き忘れている事があります。なので、もし変だったら教えてください。

4 - 2 あの日記憶（1）

友人を見送った後、少女は部屋を片付け始める。お菓子の食べカスが落ちていたのを見つけると、どこからか掃除機を運んできた。少女が電源を入れると、掃除機は唸り声を上げながら勢いよく食べカスを回収していく。

以前、私はあれに吸われた事がある。計り知れない力を感じた。吸いつかれている時は全身の毛が抜けるかと思った。出来れば、もう二度と吸われたくは無い。始めこそは少女も面白がっていたが、すぐに飽きたようであり安堵した記憶がある。

「あー、暇」

少女は片付けを終えると、ベッドに倒れ込んだ。そのまま私を掴み、いつものように私を投げて遊ぶ。

本来の使い方とは少し違うのだが、少女が良いならばそれで良いと思う。もっとも、暇は潰せていないようだ。その証拠に今も暇だ、と呟き続けている。

いくら身体が大きくなろうとも、中身はあまり変わらないようだ。「早く誰か帰ってこないかな」

少女が投げる向きを変えると、私は壁と仲良しになった。そのまま力なく床に落ち、私は少女を眺める。少女もこちらを見つめ、しばらくして私を拾い上げた。

そのまま再び、お手玉のように投げ始める。少女の顔はつまらなさそうで、いかにも暇潰しとして利用しているといった具合だ。

（私が本物であれば、違ったのだろうか）

「……むー、暇」

不意に少女は投げる手を止め、少女は私を受け止める。そのまま立ち上がり、伸びをした。

「そうだ。散歩でもしてこよっかな」

視界に入る時計はすでに七時を回っていた。季節は冬で、日が昇

っている時間は短い。外はすでに闇に包まれているはずだ。おまけにこの地域の街路灯は古いようで、点いていてもあまり明るくないのである。そのためか、車との出会い頭の事故が多く、子どもが一人で出歩くには危険だった。

しかし家の中には少女を諫める者は誰もいない。それも当然である。家には少女しかいないのだから。そして当然、喋る事の出来ない私が引き止められるはずもない。

「よし、行つてこよ」

少女は私を窓の傍に置くと、壁にかけてある上着を羽織り、マフラーを首に巻きつける。手袋に手を入れると、外に出る準備はあつという間に整う。暇を潰せるという事もあり、少女は先程よりも気持ちが悪くなくなっているようである。

「それじゃ、留守番よろしく」

背を向ける少女を私は見送る事しか出来ない。

少女が部屋の扉を開けて出て行くと、しばらくして玄関の閉まる音が響いた。

少女が出て行つて、どのくらいの時間が経つただろう。私はなぜか胸騒ぎを覚えていた。

（早く、帰つてこないかな）

胸騒ぎの原因を確認する事は出来ない。なぜなら、私は自分では動く事が出来ないのだから。私はその事を受け入れているつもりだったが、今はその事を歯痒く思う。

いくら心配事があつても、受け入れる事しか出来ないのだから。

時計の秒針が、暗い部屋の中に響き渡る。普段は気にした事もないはずなのに、その音がイヤに耳についた。

（早く、早く帰ってきて）

サイレンの音が、どこからか聞こえてくる。その事に更に焦燥感を覚えた。

玄関の鍵が開く音がして、扉が開く音が続く。

「ただいまー。遅くなつてごめんね。すぐにご飯作るから」

帰つて来たのは少女の母親の様である。廊下に足音を響かせ、部屋の扉を開いた。しかし当然の事ながら、部屋には誰もいない。

「あれ、――？ 寝てるの？」

少女の名前を呼び、母親は部屋の電気を入れる。母親は部屋の中を見回し、少女がいない事に気付くと踵を返す。

少女を呼ぶ声が響く。

しかしいくら探しても少女は見つからない。

当然だ。家の中にはいないのだから。

母親もその事に気付いたのだらう。知り合いに電話をかけているのか、話し声が聞こえてくる。心当たりを探しているのだらう。

「本当にどこに行ったのかしら」

母親は廊下を歩きながらコートを羽織る。外を探しに行くのだらう。その時、電話のコール音が響いた。母親は急いで電話を取りに走る。

「はい」

『とつ……すみま……ん。こち……院です。……さんの……者の方ですか……』

途切れ途切れに声が漏れ聞こえてくる。母親が相槌を打つと、絶句した。

「……車に、轢かれた……？ ……それは……本当ですか？」

ようやく聞こえてきた声は震え、いつもよりも遥かに弱弱しく聞こえた。そこから、私は胸騒ぎが当たったのだと理解する。

（車に轢かれた？）

以前、少女と一緒に見た見たテレビで見た映像を思い出す。

車に轢かれた人の姿。

力なく横たわるその姿に、少女がブレて重なった。

（嫌だ！）

私は必死に身体を動かそうとした。けれど、身体は私の意志に反して動こうとはしない。

（動け！ 動いて！ 動いてよ……！）

そういう物でない事は理解していても、決して動く事は出来ない。
なぜなら私は本来、あるはずのない意志なのだから。

どれほどがいたのかは分からない。私はなぜか暗闇に立っていた。
た。

「ここは……？」

周囲を見回すが、一面の暗闇に覆われている。いや、ぼんやりと少女の部屋が透けて見えた。そして、私は自分が動ける事に気が付く。

考える前に身体が動いていた。

（早く！ 早く！ もっと早く！）

私はひたすら走る。道を走り、家の中を突っ切り、少女の元へと一直線に駆けた。

4 - 3 あの日記憶(2)

少女は白い部屋の中にいた。白衣を着た人々が少女の周囲を駆け回り、懸命に処置を施している。私はそれを遠くから眺める事しか出来ない。医師たちに踏まれそうになりながら、ベッドに近付く。私はベッドをよじ登り、ようやく少女を見る事が出来た。

呼吸器を取り付けられた、血の気の無い顔。弱弱しい呼吸が、今にも止まりそうだった。腕には管が通され、点滴がうたれている。私は少女の枕元へと移動し、少女に恐る恐る手を伸ばす。

しかし、触れる事は出来なかった。何度触れようとしても、実体がないかのようにすり抜ける。自身の顔が歪むのがわかった。

「なんで……なんで、触れないの……」

いつも少女が私に触るように、私も少女に触れたかった。

こんな状況にも関わらず、少女に触れて慰める事が出来ないのが悲しかった。

「もし、私が本物だったら……」

人形ではなく、本物の生き物であれば少女を止める事が出来ただろうか。

ふと顔を上げると、正面にある黒いモニターには自身の姿が映っていた。

短い毛に覆われた、白く細長い胴。小さな手足。白く長い尻尾の先は、僅かに黒い。

——オコジヨ、と呼ばれる生き物である。

ただし、紛い物であった。

それを示すかのように、青い目は透き通り過ぎている。ガラス玉なのだ。

『空っぽの目』

少女は昔、私の事をそう評していた。

感情の無い、無機質な目。決して生きているモノではない目。そ

れは仕方のない事だ、と常に自身に言い聞かせてきた。だが、もう限界だった。

「私の所為だ……私があの時、止められたらこんな事にはならなかったのに……」

悔しかった。

そして、それ以上に憎かった。

何も出来ない自分が憎くて憎くてたまらなかった。

「あ……あ、あああああああああああ！」

私は壁に自らの頭を打ち付けた。何度も何度も繰り返し、打ち付ける。

痛みは無い。当然だ。私は痛みを感じる生き物ではない——いや、生き物で知らない！

「なんで……なんでなんでなんで！　なんで私は人形なんだ！　なんで、なんで助けられないんだ！」

そもそも、なぜ自分はこのような意志を持っているのか。生き物ですらないのに、このような意志は必要ないはずだ。なぜ、なぜ自分は意志を持っている！

（私なんか、壊れてしまえばいいんだ！）

流れるはずのない涙が流れる。しかし、それが頬を濡らす事は無い。

（私が、あの子の代わりに壊れればよかったんだ……！）

それから私はありとあらゆる自傷行為に走った。

だけど、どれだけ身体を掻き毟っても、強く噛みついてても、勢いよく引つ掻いても、身体を打ちつけても、決して痛みは感じない。情けなかった。

これでは少女の代わりになる事など出来ない。

「いつまでそうしているつもりだ」

唐突に響いた声に、私は顔を上げる。しかし、そこには何も無い。

「……だれ……？」

「君に、一回だけチャンスをあげよう」

何かが割れる音が響き渡ると、景色が一変した。辺り一面が暗闇に包まれたのである。部屋の中を駆け回る医師たちも、看護師も、部屋も、少女すらも消え失せた。私は焦り、少女を探す。手探りで探しても、一向になにも見つからない。

「慌てなくて良い。その必要もない」

「だれ、あの子をどこにやったの？」

私の目の前に、白い人が現れた。

「……………私？」

姿が全く違うにも関わらず、それは自分であると瞬時に理解する。その事に、もう一人のわたしは微笑んだ。

「そう。わたしはあなた。あなたは私」

わたしは私を抱き上げる。姿は違えど、わたしは私とよく似ていた。

「よく聞きなさい。あなたにチャンスを与えるから」

私に言い聞かせるように、わたしはゆっくりと喋り出す。

「あれは、まだ起きていない。でも、これから先、近い未来に起こる出来事。——だから、あの子はまだ無事よ」

「本当？」

「ええ、本当よ。だけど、あれは必ず起こる未来」

わたしはそこで言葉を切り、真っ直ぐに私を見つめた。

「あの子を、救いたいとは思わない？」

私は即座に頷く。腕の中で立ち上がり、わたしを真っ直ぐに見る。

「当然。絶対、助ける。私はどうなっても構わない。絶対、助ける」
「そう」

わたしは腕から私を下ろす。私はわたしを見上げた。

「あの子を助ける事が出来るかもしれないし、出来ないかもしれない。それが出来るかはあなた次第。あなたに与えられた時間は、かなり限られている。成功しても、失敗しても、あなたはそれでよし

まい。

もしここで留まると言うなら、引き留めはしない。それも一つの選択。留まるのであれば、あなたはそのまま何事もなく日常を過ごす事が出来る。

ここまで聞いた上で、あなたに問います」

——生きますか？ それとも行きますか？

私はわたしを見上げた。わたしも私を見つめている。

「そんなの決まってる。行くよ。私は、あの子を助けるんだ」
その手が不意に、持ち上がった。

「なら、行きなさい。手遅れにならない内に、あなたがあの子の事を忘れない内に」

私は即座に駆け出した。振り返る事なく真っ直ぐに駆けて行く。その背をわたしがどこか寂しげに見送っていた事にも気付かずに。

「さようなら、わたし」

その声が、私に届く事はなかった。

4 - 4 引き上げ

スノウが目を開けると泥で濁った水が目映った。周囲を見回しても、水ばかりしか見えない。頭上を見上げるが、暗闇に沈んでいるため見通す事は出来なかった。そのため、どれ程の深さなのか全く見当もつかない。

（溺れる心配は無いけど、ずいぶん水吸っちゃってるな）

腕を持ち上げると、纏わりつくような重さを感じる。軽く溜息が出してしまった。

とりあえず足場となるような場所を探そうと思い立つ。水を吸った重い足を進めると、何かが足に当たった。しゃがんでそれを拾い上げると、それは丸い拳大ほどの水晶だった。とりあえず、持っていく事にする。

歩く度に足元の砂は、砂漠の砂と同じように纏わりつく。ただ歩く速さは、砂漠を歩く時よりも遥かに遅かった。水中であるため転ぶ事は無いが、なかなか思うように進まない足に苛立ちを覚える。

（こんな事をしている場合じゃないのに……！）

スノウが地面を勢い良く蹴ると、前に飛び上がった。そのままふわり、と前へ着地する。その距離は、一步にしては長かった。

「……………」

普通に歩くより、跳びながら進んだ方が早いようである。そのまま跳躍しながら前へと進む。しばらく進んで、ようやく端へと辿り着いた。問題はここからである。

（どうやって登ろう……）

それは絶壁、といって差し支えがなかった。試しに数歩登ってみるが、傾斜が全くない。かろうじてあるデコボコの部分を足場にするしかないようだ。

（登れるかな？）

助走をつけて登るという方法を思いつくが、思うように動かない

水中の中ではあまり意味がない事に気付く。結局、跳びながら登る事にした。

片手で出っ張った部分を掴み、身体を縮めて壁を蹴りあげる。しかし、なかなか上手くいかない。時折、滑って落ちてしまう。

（せめて身体を乾かせたら）

ワタ属は文字通り、身体の中にワタが詰められているのだ。そのため身体は軽く、本来であれば水に浮く。しかし長時間、水に浸かっていると水を吸ってしまい、身体が重くなって沈むのだ。そうすると浮かぶ事は難しい。

そんな事を考えていると、上から何かの勢いよく落下してきた。着地する時に激しい砂埃が立った。スノウは首をかしげてそれを見る。

それは唐突にスノウの腰を掴み上げ、そのまま勢いよく地面を蹴りあげた。しかし、相手も相当重いらしく、すぐに落下が始まってしまった。しかし相手は即座に何かを壁に突き刺し、それを足場にして強く蹴りあげる。腕を上げ、再び足場にした物を手にすると、同じように壁に突き刺す。先程と同様、それを足場にして上に跳ぶ。

それを何度か繰り返し、ようやく地上に出る事が出来た。

（お、重い……）

スノウはあまりの身体の重さに、池から出る事が出来なかった。相当、水を吸っていたらしい。水の中の方がまだ動ける。

なんとか上半身を池から出して横たわっていると、身体を持ち上げられた。そのまま池から引き上げられ、なんとか地面に座る——事も出来ずに、そのまま地面に倒れ込む。

「うわー、ずいぶん吸ってるねえ。身体が変形してないのが不思議。踏もつか？ 足ないけど」

重い頭を持ち上げると、そこには雲に乗った獺がいた。

「平気。しばらくしたら抜けると思うから」

スノウが答えると、呆れた様にマーティは溜息をついた。

「そんなに吸ってたら、当分動けないじゃん。特別に、裏技でとっ

てあげるよ」

「裏技？」

マーティは手をかざすと、スノウは一気に身体が軽くなるのを感じた。驚いて身体を起こすと、マーティの腕に水が渦巻いていた。

「……ほんと、よくここまで登ってこれたね」

マーティは苦笑いを浮かべながら空いている手を池につける。マーティの身体を伝って水が池へと戻って行った。

「すごい……」

「まあね」

マーティは上機嫌に答える。

あつという間にスノウの身体は軽くなっていった。もう普通に動く事が出来る。

「ま、多少残るのは大目に見てよ」

「うん。だいぶ軽くなったよ。マーティ、ありがとう」

スノウがお礼を言うと、マーティは顔を逸らした。

「別に、大した事じゃないし」

「職務違反だけどねー」

マーティは喉を鳴らす。

「これくらいは許容範囲！ それに、この水晶落としたのはこの子じゃないし。ちゃんと確認しなよ。余計な手間をかけさせちゃったじゃん」

「大丈夫大丈夫。若い内は苦労を買ってでもしろって言うし……」

「全っ然関係ないから、それ。第一、ここに年齢なんか無いし」

そうだね、と獏は納得した。マーティは呆れたように獏を見る。

「スノウ」

アクセルの声にスノウは振り返った。

「あ、アクセル。さっきは」

スノウはアクセルの表情を見て、言葉を止める。

スノウは困惑していた。なぜかアクセルは泣きそうな顔をしていたのである。

「もう、勝手な真似はするな」

いつものように淡々とした言葉だったが、アクセルの切実な思いをスノウは感じていた。

ふと、スノウはアクセルの身体がまだ濡れているのに気付く。

「アクセル、身体拭かないと錆びちゃうよ」

スノウは口に出し、そこでようやくアクセルのした暴拳を認識した。

本来、鉄属にとって水は天敵だ。錆を発生させて身体を腐食し、最終的には破壊する。鉄属にとって水の中に入るなど言語道断。

なのにも関わらず、アクセルは水の中に飛び込んだのである。傍から見れば、自殺行為であった。

（私を、助けるため……？）

スノウは呆然と、アクセルを見つめる。

（でも、なんで？）

スノウの中には疑問が渦巻いていた。

4 - 5 変化(2)

アクセルは困惑しているスノウを見つめていた。

(スノウが……死ぬ?)

役割を果たさなくとも、寿命が短いと獭は言っていた。

しかし、スノウの身体にどこも異常は見られない。なのになぜ近い内に死ぬと分かるのだ。意味が分からない。

それともクラウドと同じように、いきなり光りとなって消えてしまふのだろうか。

「スノウ、もう動けるのか?」

アクセルが声をかけると、スノウは驚いたように肩を震わせる。

「うん……もう平気」

スノウはアクセルに向かって微笑みを浮かべた。その事に、アクセルは微かな違和感を覚える。

(……まただ……また、変わった……)

スノウの浮かべる笑みは今までのものと少し違う。以前のものは無邪気さを感じさせる、純粹な笑みだった。しかし今、浮かべている笑みは穏やかで柔らかな印象を受ける。

(なぜなんだ? ……まさか、これが記憶の影響とでも言うのか?)

スノウは水晶に触れる度に変わって来た。拙^{つたな}かったはずの言葉が一気に淀みなく喋れるようになり、以前は大人しく従順だったが、今では自分の意思を主張するようになっている。

これも、以前の記憶の影響なのだろうか。

そこまで考えて、アクセルは寒気を覚えた。

(なんだ、それ)

記憶一つでこれほどの影響を受ける事に、アクセルは言いようのない恐怖を覚えたのだ。

(もしかして、全く別人のようになっていた可能性もあるのか?)
目に見える範囲でこれほどあるのだ。内面がどれほど変わってい

るのか、考えたくもない。本当に獺の言ったように、スノウが今までしていたのは以前の記憶をかき集めるための作業だったのだろうか。アクセルには、とてもそんな生易しいものだと思えなかった。

「……スノウ……どこにも行かないよな？」

思わずそんな言葉が口に出ていた。アクセルは自身の声が震えている事に気付く。しかしスノウは気付かなかったようだ。いつものように不思議そうに首をかしげている。

いつもと同じ仕草のはずなのに、アクセルはその仕草に違和感を覚えた。

「どうして？」

スノウの言葉を聞き、ようやくその違和感に気付く。今までと同じような仕草にも関わらず、受ける印象が全然違うのだ。今は疑問を口に出している、というよりもはぐらかすためのように思えた。

「……………」

アクセルは答える事が出来ない。言ってしまったら、スノウの中で何かが大きく変わってしまう気がしたのだ。

「あ、腕が破れてるよ。大丈夫？」

マーティがスノウの腕が解れている事に気付く。よく見ると、その腕は何かで縫われていた。スノウは怪我をした事は無いはずだ。マーティも怪訝に思ったのか、その糸を引き抜いた。

「あつ……………」

スノウの腕から小さな砂時計が転がり落ちる。

アクセルはその砂時計を拾い上げた。マーティは砂時計を見て、目を細める。

「なるほどね」

どこか納得したようにマーティは呟いた。その知ったような言葉に、アクセルは苛立ちを覚える。気が着いた時には、アクセルはマーティを睨みつけていた。

「何かなるほどなんだ」

「知らない方が、シアワセってやつだよ」

手に持った砂時計は、尽きかけていた。

「いつまで油を売ってらっしゃるのですか」

マーティは全身の毛を逆立て、勢いよく背後を振り返る。

「ジル！　なんであんたがここに居んのよ！」

紳士服に身を包んだ男は大仰に肩をすくめた。その動作にマーティは更に苛立つ。

「あんたこそ、なんでこんな所で油売ってんのよ！　さっさと仕事しなさい！」

「やれやれ、それはこちらの台詞ですよ。マーティ、あの沼を放置しましたね。ワタクシが元に戻したから良いものの、ワタクシが来なかった場合の事は考えていなかったのですか？」

マーティは舌打ちを打った。

「知るか。あたしの力では無理って知ってたんでしょ？　そんな白々しく言われてもム力つくだけだから」

マーティの言葉を無視し、ジルはスノウに目を向ける。アクセルの手にある砂時計を手に取り、それを眺めた。

「なるほど、これはこれは……難儀な事ですね」

ジルはスノウに砂時計を手渡す。スノウはそれを受け取り、とりあえず腕に戻すが、重みの関係で腕を動かすと少しズれる事に気付く。腕に戻す事を諦めたスノウは砂時計を手を持つことにした。

「あなたは、どうするのですか？」

ジルの言葉は漠然としていて、通常ならば理解出来ないだろう。

しかし、今のスノウにはそれが何を意味しているかが分かった。

「私は変わらないよ」

ジルは目を細める。頭の帽子に手をかけた。

「そうですか。——では、ワタクシたちは一足先に向かう事にいたしますよう」

マーティは顔をしかめる。

「それって、あたしも入ってんの？」

「当然です」

「ぼくはー？」

「あなたもですよ、獏」

「はい、と獏は手を上げる。

「ちよつと待つてよ。あんた、なんでわざわざ出てきた訳？ 意味が分かんないんだけど」

マーティはジルを睨みつけた。本来であるならば、ジルは姿を現す事は禁じられている。

アクセルはスノウの腕を引き、ジルを警戒していた。マーティと親しくしているのが余計に怪しさに拍車をかけているのだらう。

「あの方が気まぐれを起こしましてね」

「……なんで」

「ワタクシにあの方の深遠なる思考を理解する事など出来ません」

「知らない訳ね」

マーティはジルに背を向ける。ジルは意外そうにマーティに声をかけた。

「珍しい。あなたともあろうお方が、命に背くのですか？」

「まさか。あたしを馬鹿にしてんの？」

マーティは鼻で笑って一蹴する。そこでマーティは思いついたようにジルに向かって呟いた。

「……まさか、知っててワザと喋った？」

「そうと言ったらどういたしますか？」

マーティは大きく溜息をついた。不服そうにジルを見る。

「それがあの方の意志なら、あたしは何も言わないよ」

ジルは微笑んだ。

「では、ワタクシたちは一足先に参ります。お待ちしていますよ、白いお嬢さん」

「早めに行きます」

スノウが答えると、三人は一気に姿を消した。それと同時に、森から二つの影が現れる。

「……どこに行くつもりか、後で聞かせてもらうからな」
アクセルは湾曲刀の柄に手を添えた。スノウは頷く。
「うん」

4 - 6 闖入者

「話は聞かせてもらったぜい！」

「ぜい！」

機械型の人物の後に続き、狼が語尾を復唱した。

「それで、何の用だ」

アクセルは湾曲刀の切っ先を機械型の人物——ドリトルに向ける。ドリトルはやれやれ、と手を上げて首を振った。

「だーめだなあ、そんな短気じゃあ。この俺様みたいな魅力は手に入らないぜ！」

「入らないぜっ！」

先程と同じように狼——カルーは復唱する。アクセルは眉を顰めた。

「そんな妙な魅力など、欲しくもない」

「私も、そんなアクセル見たくない」

アクセルの言葉にスノウも同意する。その事にドリトルとカルーは驚愕の表情を浮かべた。カルーは二人に向かって吠えたてる。

「お、お前ら馬鹿じゃないの？ ドリトルの魅力が分かんないなんて、終わってるね。ドリトルはこの世界で一番、イカすナイスガイなんだぜ！ 一度、目を交換してもらった方が良くないじゃないの！」

「そうだそうだ。この俺様の魅力を分らないなんて、なんて可哀想な奴らなんだ。思わず同情しちゃうぜっ」

ドリトルは腕で目に浮かんだ涙を拭う。アクセルは白けたような視線を二人に投げた。

「そんなもの、別に分かりたくもない。それと、用がないならさっさと消えるがいい」

スノウもアクセルの言葉に強く頷いた。

「な、なんだとー！」

カルーは毛を逆立てて抗議する。そんなカルーを落ち着けるよう

に、ドリトルは口を開いた。

「落ち着けて、カルー。そんな怒りっぱかったら……俺のようなナイスガイになれないぜっ！」

「はっ、そうだった。平常心平常心……」

目の前のコントのようなやり取りを眺めながら、スノウの中には焦りが募っていった。

（こんな事、している場合じゃないのに……）

手に持つ砂時計を見ると、何故かその焦燥感は更に増す。時間がない、と主張しているように思えるのだ。そう思えば、もう立ち止まってはいらなかった。

「私たちは遊んでる暇なんかないの。用がないなら邪魔しないで！」

スノウが声を荒立てると、アクセルは驚いたように目を丸める。

しかし、すぐに目の前の障害物に目を向けた。

「そういう事だ。とりあえず、どっか行け。さもなくば、斬る」

アクセルは腰を落とし、いつでも相手に斬りかかれるような体勢をとる。それを見て、ドリトルとカルーは慌てた。

「いや、違う違う。俺たちはお前たちを攻撃しようとは思っちゃいない」

「信用できん」

ドリトルの言葉をアクセルは一蹴する。

「ほ、本当だよ。ボクたちは心を入れ替えたんだ」

「……………なにが目的なの」

スノウの問いかけに、ドリトルとカルーは顔を見合わせる。ドリトルはおもむろに口を開いた。

「その人型について行けば、普通なら行けない場所まで行けるんだろ」

スノウは首をかしげ、アクセルは目を細めた。カルーは頷いて、ドリトルの言葉に同意している。

「どういう事？」

「仮にそうだとして、オレたちに何の利点がある」

アクセルの言葉に、ドリトルは大きく胸を張った。

「大有りさ！ 俺たちの盗賊テクで、罾とか隠し扉とか見つけないよ」

「……それで？」

「隠された財宝を見つけて、俺たちはお金持ち街道一直線さ！」

空の彼方を指差し、ドリトルは大きく宣言する。カルーはその言葉聞いてはしゃいだ。

「さっすがドリトル、冴えてるう！ カッコいいよ！」

「だろうだろ。もっと褒めたまえ」

カルーがドリトルを囃し立て、二人は勝手に盛り上がっていく。

二人の周囲には、常人ではとても理解出来ない空間が存在していた。スノウはアクセルの袖を引っ張る。

「行こ、アクセル」

アクセルは目の前の二人を警戒しながらスノウに尋ねる。

「道は分かるのか？」

「ん、なんとなく」

それならば大丈夫だろう、とアクセルも頷いた。

「そうか。なら、行くとするか」

アクセルは湾曲刀を鞘に収め、スノウの後を走る。スノウとアクセルは勝手に盛り上がっている二人を置いて、目的地まで一直線に進んで行った。

ドリトルとカルーはスノウとアクセルがいなくなった事に気付かず、二人の世界を持続し続けている。

「やっぱりドリトルってば最っ高ー！ ぼく、ドリトルと一緒に入れて良かったよ」

「だろうだろ。もっと俺を見習いたまえ。そうすればいずれ俺の様なナイスガイになれるだろう」

「うっはーっ！ ドリトル、カッコいい！」

「というわけで、お前たちもこの俺様を見習、う……が……いい……？」
そのため、ドリトルたちが目を向けた時には誰もいなかった。

「……………」

「……………」

先程までの馬鹿騒ぎが鳴りを顰め、寂しい風が二人を包んだ。
ドリトルは身体を震わせる。

「お、お……………」

「お？」

「俺たちを置いて行くなーっ！」

「行くなーっ！」

その声は森の奥へと木霊していった。

4 - 7 独白

「スノウ、本当にこっちで合っているのか」

「うん。こっちだよ」

森を抜け、二人は砂漠を歩いてきた。しかし、今回は目印となるような物が一切ない。なぜかスノウは線路から外れ、真っ直ぐに進んでいた。

「なぜ道が分かる」

「呼ばれてるから」

スノウは砂に沈んだ足を持ち上げ、足を進める。靴に付着していた泥は、あっという間に落ちていた。その代わり、今では砂が纏わりついている。

「何に呼ばれているんだ」

「知らない。でも、こっちだって何となく感じるだけ」

スノウは足を止める事なく歩み続けた。アクセルもその後ろをついて歩く。

「それで、行つてどうするんだ」

「私は私の願いを叶える」

「願い？」

「そう。願い」

「それは……自分の命を引き換えにしてまで叶えたい物なのか？」

アクセルの言葉にスノウは足を止め、振り返る。

「なんで、アクセルが知ってるの？」

「……あいつらから聞いた」

「そう……」

スノウは再び背中を向けて歩き始めた。アクセルもスノウの後に続く。砂を踏む音だけが、砂漠に響き渡る。

しばらくして、口を開いたのはスノウだった。

「私は最初、あの子が嫌いだったよ」

唐突な言葉にアクセルな首をかしげる。

「それで、あの子も私の事を嫌ってた。当然だよね、私はただの代替物。あの子の本当に欲しい物じゃなかったんだもん」

「……何の話だ？」

スノウはアクセルを見て、苦笑を漏らす。

「うん。まったく分かんないと思うけど、とりあえず聞いて欲しいな」

「……わかった」

ありがと、とアクセルに背を向けてスノウは話を続ける。

「でもね、しばらく一緒にいて気付いたんだ。あれは、あの子なりの愛情表現だつて。そうでしょ？ 気に入らないなら始めから相手にしなければ良いんだし、本当ならすぐに捨てられたっておかしくはなかった。でも、あの子はそれをしなかったの。」

始めは親に遠慮してたんだと思う。親が一生懸命に考えてたつて事はあの子も知ってたから。でもね、始めは気に入らなくても、一緒にいる内にあの子も私が気に入ったんだと思う。

確かに私は本物じゃなかった。でも、私は絶対にいなくならないし、あの子が捨てようと思わない限りずっと傍にいる。あの子はその事に気付いたんだよ」

アクセルは無言を貫く。

「笑っちゃうよね。あの子が一番安心できる相手が、自分では何一つ出来ないただの人形。私から見ても依存してるなつてすぐに分かった。——でもね、私はそれでも満足してたんだよ」

あの日までは、とスノウは苦々しげに呟いた。

不意にスノウが手を叩き、乾いた音が砂漠に響く。アクセルに向き直り、スノウは微笑みを浮かべた。そこに先程までの重苦しさはない。

「それで私はあの子のために、一世一代の大決心をしたんだよ。あの子が笑顔で過ごしていただけるためにね。辛気臭い話はここで終わり！ 何か質問ある？」

「……オマエ、性格変わったな」

アクセルは目を細めてスノウを見つめた。スノウはアクセルの腕に抱きつく。

「そんな事ないよ。私は始めからこうだった。だけど、それを表現する方法を知らなかっただけ。ただそれだけの事だよ」

「嘘だな」

アクセルは即座に否定する。スノウはアクセルを見上げ、首をかしげた。

「どうしてそう思うの？」

アクセルは軽く溜息をついた。

「勘だ」

「勘、なんだ？」

スノウはくすくす、と笑みを漏らす。

「……確かに、変わったと言えば変わったよ。足りなかった知識も少しずつだけど戻ってきてるし、それと同時に前の知識は消えていつてる。だから、私は焦ってるんだと思う」

「何に焦っている」

「ねえ、アクセル」

スノウはアクセルの言葉を遮る。アクセルの腕から手を離し、正面に回って真っ直ぐにアクセルを見つめた。

「時間がないの。手を貸して」

アクセルはスノウを改めて見る。

純白の長髪に、白い華奢な身体。以前はガラス玉のように意識の希薄だった青い目は、今では強い意志を感じさせる。

アクセルは場違いにも綺麗だな、と思った。

「……いいだろう。手を貸してやる」

スノウの顔に笑みが広がる。だが、とアクセルはそれを止めた。

「だが、オレはオマエが死ぬような事に手を貸すつもりはない。

絶対に、戻ってくると——生きると約束してくれ、スノウ。それが、手伝う条件だ」

スノウは目を丸め、次いで星空を見上げる。そして、アクセルに向けて、何かを吹っ切ったような微笑みを浮かべた。

「いいよ。約束するよ」

スノウは手を差し出す。アクセルはその手を握った。

「交渉成立、だね」

「絶対に——絶対に、死ぬなよ。スノウ」

スノウはアクセルに向けて苦笑を浮かべる。

「アクセルは心配性なんだね」

叶わない事は、始めから知っていた。けれど、願う事は自由だと思っただから、スノウはアクセルに本当の事は何も教えない。教えたくもない。

だって、口にしたら、スノウは自身が躊躇ってしまう事を知っている。

（まだ、まだ私は立ち止まる訳にはいかない……）

自分が本当は何を願っているのか、スノウは気付かない振りをする。

その願いを叶える訳にはいかないのだ。

（ごめんね、アクセル）

きつとアクセルは恨むだろう。それでも、構わなかった。

（私は——あなたとの約束を守れない）

砂漠を歩き続けていくと、足元の感触が不意に変わった。アクセルが足元の砂を足で除けてみると、そこには石畳が見える。

「ここは……」

「近いよ」

スノウはアクセルに向けて微笑みを浮かべた。スノウはそのまま石畳沿いに進んでいく。アクセルもそれに倣った。

石畳沿いに進んでいくと、石を積み重ねて作ったような神殿が現れる。ぽつかりと開かれた神殿の入口には鎧騎士が剣を地に刺し、石に座り込んでいた。以前アクセルが破壊したはずの腕は元に戻っている。

「久しいな」

くぐもった声が響き、鎧騎士は剣を抜いて立ち上がる。その剣は背の鞘に仕舞い込んだ。湾曲刀に手をあて、警戒していたアクセルはその事を怪訝に思った。

「なぜ、オマエがここにいる」

「我はこの守護を任されておるのだ。これが本来の責務である」「何が目的だ」

はて、と鎧騎士は首をかしげる。

「目的なぞ、ありはしない。我は侵入者を排除するためにここにいる。——して、その娘は条件を満たした。我が止める道理は無い」「通してくれるの？」

「問題ない。強いて言うならば、そちらの竜は排除する対象となるが、我がここで止めようと止めなかりうと進むのは分かりきっている。我は無駄な争いは好まん」

鎧騎士よりもアクセルの方が強く、アクセルがスノウについて行くのは分かりきっている事だ。それであれば始めから通しても問題ないという事だろう。

「……いいの？」

「構わん。我が一度敗北したのは事実。主も我を咎めようとは思わんだろう。」

だが、念のため神殿内にも畏が張り巡らされておる。それを持ち越えられる覚悟があるのなら、行くがよい」

スノウはアクセルと顔を見合わせ、鎧騎士の横を通過していく。

アクセルが鎧騎士の横を通り過ぎる際、鎧騎士はアクセルに尋ねる。

「汝、覚悟はあるのか」

それは先程、鎧騎士の示した覚悟とは違う気がした。しかし何に對しての問いか、アクセルには分からない。アクセルは答える事なく、その横を通り過ぎて行った。

「——で、なんでこんな事になっているのか、説明しろ！」

鎧騎士から離れてしばらくして、二人は急な下り坂を全速力で疾走している。後ろからは重い音を響かせながら、大きな魂が転がってきていた。その塊は通路全域を塞ぐほどの大きさで、一本道しか見えない現在においてはまさに凶悪な障害物である。

「わ、私に言われても！」

横を走るスノウは脇目も振らず、必死に走っていた。そこに余裕など欠片も見当たらない。

「そもそも、スノウが壁の出っ張りを押すからいけないんだ！」

神殿内をしばらく歩き、スノウが壁の出っ張りを発見したのがそもその始まり。スノウは出っ張りを壁に収めた途端、地響きと共に奴はやって来た。

スノウはうつ、と言葉に詰まる。

「そ、それは私の所為だけど……でも、普通こんなものが転がって来るなんて思わないよ！」

「明らかに怪しかっただろ！ もっと周囲に警戒すべきだ！」

スノウは走りながら頂垂れる、という器用な事をしてみせた。

「うつ……それは……それは悪かったけど……悪かったけど！ 今

はそんな事をしてる場合じゃない！」

いくつか角を曲がったが常に下り坂である上に、塊は硬いらしく壁にぶつかっても砕ける事は無い。それどころか、壁にぶつかる度に建物自体を揺らしている。正直、あれに踏み潰された所は想像しにくかった。

「あー……ワタ属なら、フミツブサレても、ヘイキかなー」

スノウも同じ事を考えていたのだろう。しかし、棒読みである上に重大な所を忘れている。

「現実逃避をするな。少なくとも、よりスリムになる事は确实だな。最悪、ワタが身体の至る所からはみ出るだろう。そうなった場合、とてもじゃないが歩けるとは思えない」

実際に潰された所を想像したのだろう。スノウの聲が落ち込んだ。

「だ……だめ？　だよね、やっぱ。……うん。頑張って逃げよう！」

「その意気だ」

無駄口をやめ、全力疾走を続ける。アクセルは前方の通路の脇が大きく挟れている事に気付く。

「スノウ」

「え？」

説明するのも面倒だったので、スノウを抱えて挟めた穴へと入り込む。すぐに目の前を巨大な塊が通過していった。

「……………えーっと、間一髪？」

スノウは呆気にとられたように穴から出て、そう呟く。アクセルは大きく息をついた。

「だな。スノウ、今度からは不用意に触ったりするなよ」

「わかってるよ。私はそんなにうっかり者じゃないよ」

スノウは頷いて先へと足を進める。アクセルもスノウの後をついていく。相変わらず下り坂が続いていた。

「これって地下に向かってってるよね」

「そうだな」

神殿に入ってから、ずっと下り坂である。上り坂でもあれば先程

の塊も途中で追いかけてなくなっていたはずだ。

そんな事を考えていると、遠くから地響きが近付いて来るのが聞こえた。その地響きは、とても耳に覚えのある物のように思える。

「……………」

「ねえ……………なんか聞いた事のある音、聞こえてこない……………」

アクセルは腰の湾曲刀をおもむろに引き抜く。

正直、アクセルはあの塊に追いかけられる事にうんざりしていたのだ。

「迎え撃つ」

「……………」

スノウはあえて、何も反応しなかった。

4 - 9 行き止まり

地響きが近付き、大きな丸い塊が姿を現す。アクセルは呼気と共に塊を湾曲刀で切りつけると、塊は自身の回転する力に耐えきれず粉碎した。

「始めからこうすれば良かったんだ」

アクセルは大きく溜息をつく。

「……普通、粉碎するなんて発想は出てこないよ」

スノウは肩の力を抜き、先へと進む。アクセルも湾曲刀を収めてからスノウの後ろをついて行った。

いくつか坂を上り下りし、長い階段を上っていく。道は一本なのだが何度も曲がる上、緩やかにカーブしている場所もある。そのため、現在がどの辺りにいるのか全く見当もつかない。地下にいるのか地上にいるのかも分からないのである。

「分かれ道が無いから道に迷う事は無いが、この建物を造った奴は、そつとう変わり者だな。この階段にしたって、何の意味があるんだか」

「そうだね」

スノウは前を向いたまま答える。

「でも、もうすぐだよ」

「……………」

アクセルはスノウの背中を見つめた。

（同じ背中でも最初の頃とはずいぶん印象が違うな）

以前のスノウはもっと脆い印象を受けたのだ。今では力強く、真っ直ぐに前を向いている。

（これが本来のスノウでもあるのか）

これまではスノウの変化に戸惑っていたが、冷静に考えればそれは自然な事なのだ。

記憶が戻るという事は、以前の状態に近くなるという事である。

アクセルにはスノウが急に变化したように見えるが、スノウにとっては急ではなかつての状態に戻っただけなのだ。

（オレは、今まで何を見てきたんだろうな）

今のスノウは、今までのスノウと何が違うというのだろう。性格が多少変わっても、根本までが変わったとは思えない。

二人が長い階段を上り終えると、広間のような広い空間へと辿り着いた。他に通路も無く、ここで行き止まりの様だ。部屋の隅に瓦礫が積まれているが、壁のどこかが破損した様子は無い。天井が非常に高く、見上げてても上まで見通す事は出来なかつた。

かといって、何がある訳でもない。ただそれだけの、何もない場所だつた。

「……本当に、ここが目的地なのか？」

アクセルの困惑したような言葉にスノウは頷く。

「うん。壁とか調べてみたら何か出てくるかも知れない」

「水の都の時みたいに、場所までは分からないのか？」

「うーん……ちょっと難しいかな。あの壁一面が怪しいんだけど、壁一面がそんな訳ないし……」

スノウは正面の壁へと近付き、手で触る。しかしそれで何かが起こる訳でもない。アクセルは壁の周囲を見るが、一目見た所では変わった場所は見当たらなかつた。アクセルも壁に近寄り、手を当ててみる。

「本当にどこにあるんだろ」

「ここで行き止まりなんだ。もしここに何もなかつたら、一度戻ってみるのも良いだろう」

「そうだね」

スノウとアクセルは手分けして壁一面を調べたが、やはり変わった所は見つからない。スノウは顎に手をあてて考える。

「ねえ、アクセル。この壁を斬る事って出来る？」

アクセルは壁を軽く叩くが、奥に空間はないようだ。

「斬っても何もないと思うぞ」

「それでも一応、やれるだけの事はやってみないと」

アクセルも暫し考え、それもそうだと思い至る。右の湾曲刀に手を掛け、半身に構えて腰を落とす。スノウもアクセルの後ろの方へ移動した。

スノウが足を止めるのと同時に、アクセルは呼気と共に湾曲刀を引き抜き様に壁を斬りつける。しかし甲高い音が響くだけで、壁には傷一つ付いた様子はない。アクセルは痺れる手を抑えながらも、湾曲刀を鞘に収めた。

アクセルはスノウの方へと振り返る。

「やはり、何もないようだ」

「……そうみたいだね」

スノウは見るからに落胆していた。スノウは壁を見上げ、大きな息をつく。

「ここだと思っただけだな……」

頭に何かが当たり、アクセルは上を見上げる。上から塵が落下し、てきていた。

（なんだ？）

しかし目を凝らした所で天井が見える事もない。

「あつ……」

スノウが思わず、といった風に声を漏らした。視線をスノウに向け、その先を辿っていく。アクセルはそれを見て目を丸めた。

先程まで何もなかったはずなのに、壁から何かが出て来ようとしているのである。その何かは少しずつ壁に浮かびあがり、徐々にその輪郭を露わにしていく。

「……なに、コレ」

スノウは呆気にとられ、呆然とそれを見上げている。アクセルにとっても、予想外の出来事だった。

「スフィinksだよ」

この場にはいないはずの音が響き、アクセルは声の方へと振り返る。そこにはマーティがいた。口元に笑みを浮かべつつも、目には悲し

みが映っていた。

アクセルがそれを問いただすより先に、隣にいたスノウが口を開ける。

「スフィンクス？」

「そ、どっかの国のなぞなぞ好きの変わり者だつてさ。でも、姿は全然違うよ。ただのライオン」

マーティは大した事でもない様に言うが、実際に浮き出ている輪郭は実際の何百倍もの大きさだ。一口で丸のみではなく、前足だけで人を踏み潰す事が出来る大きさだった。それが徐々に、何もなかったはずの壁から出てきているのである。

アクセルは無言で湾曲刀を引き抜き、構えようとした。しかしスノウがその手を抑える。

スノウは首を横に振った。

「駄目だよ、アクセル。あれは、そういう存在じゃない」

「……………オマエがそういうのなら」

アクセルは手を柄から離し、ライオンの姿をしたスフィンクスから距離をとった。

スフィンクスは壁と同じ材質で出来ているようで、身体自体が土色をしている。しかし不思議な事に表情をとったり身体を動かす事は出来るようだ。今では広間いっぱいに全身を現している。

スフィンクスはスノウへと目を向け、ゆっくりとその口を開いた。
『汝、力を求めるか？』

4 - 10 問題

唐突な言葉に、スノウとアクセルは顔を見合わせる。再びスフィックスは口を開いた。

『汝、力を求めるか？』

ライオンの姿をしたスフィックスはスノウを見下ろす。スノウは幻聴ではなかった事を認識し、スフィックスを見上げた。

「別に力じゃなくても良い、あの子を救えるのならそれ以外は何もいない」

その言葉にマーティは目を細める。アクセルも眉を顰めていた。そんな二人に気付く事なく、スノウとスフィックスのやり取りは進んでいく。

『承知。ならば、我、汝に問いかける』

スノウは唾を飲む。アクセルは用心のために湾曲刀の柄に手を掛け、マーティは脱力した様に溜息をついた。

『この世界の空に、足りないモノを二つ答えよ』

「……………え？」

唐突な質問に、スノウは呆気にとられる。アクセルは目を細め、マーティに視線を投げかけた。やれやれ、とマーティはアクセルの疑問に答える。

「あんたは分かんないかもだけど、この世界には足りないモノがいくつもある」

「そっちじゃない。なぜこんな事を聞くんだ」

マーティは肩をすくませる。

「こういうルールなの。なぞなぞがだーい好きなスフィックスの問題に答える事が出来たら、この子は願いを叶える事が出来る。すっごい単純でしょ？」

「……………仮にそうだとしても、この世界のなにが足りないと言った」「甘い甘い。君に分かる筈、ないでしょ。これはあんたに向けての」

試練じゃない。あの子に向けての試練なわけ。そもそも途中の手続きを踏んでないあんたには分かる筈もない質問なのだよ」

その言葉でスノウはこの世界で感じた違和感の正体をようやく知った。この世界は、わざと足りない様に造られていたのだ。

スノウはかつての記憶を辿り、スフィックスを見上げて答える。

「……太陽と……月」

『正解。では、次の問題』

「まだあるのか」

アクセルは眉を顰め、スフィックスを睨みつけた。しかし、スフィックスは恐れる所か、アクセルの存在そのものを無視している。

『この世界において、足りない概念を一つ答えよ』

「……………」

アクセルはスノウの方へと目を向けた。

アクセルには質問の意図を掴む事が出来ない。一体なぜ、このような質問を繰り返すのか、アクセルにはさっぱり分からなかった。しかしスノウの表情は真剣そのもので、その事にアクセルは落差を感じる。

（一体、オレとあいつの何が違うって言うんだ）

スノウは手に持っている砂時計を見つめ、顔を上げて答える。

「時——時間の流れ」

『正解。では、最後の問題』

スノウは自身の十倍以上の体躯を持つスフィックスを、恐れる事なく見上げていた。アクセルはそれを見守る事しか出来ない。

これまで無表情だったスフィックスの顔が、不意ににやりと笑った。

『あなたの主人の名前は？』

「——え？」

予想外の言葉だったのか、スノウは思わず声を上げていた。動揺するスノウをアクセルは怪訝に思う。

（なぜそんなに焦ってる？ 主人、とはスノウの言う？あの子？の

事だろう。あれだけ熱心に語っていたのに、名前くらい覚えていない筈が――)

答えられずにまごつくスノウに、アクセルはようやくその事に思いついた。

『足りなかった知識も少しずつだけ戻ってきてるし、それと同時に前の知識は消えていつてる。だから、私は焦ってるんだと思う』

スノウは？あの子？の名前を忘れてしまったのだ。スノウの様子からして、？あの子？の名前を忘れていた事すら気付いていなかったのだらう。無意識の内の忘却に、アクセルは心当たりがあった。

(クラウドの時と同じ、か)

始めから存在すらなかった事にされたクラウドと同様、スノウの中では？あの子？の名前は始めからなかった事にされていたのかも知れない。

(だとしたら、ここで終わりか)

そうすればスノウが死ぬような目に遭う事は無い。スノウの言う？あの子？とやらには申し訳ないが、スノウが生きるためにも犠牲になってもらう。アクセルにとっては見知らぬ存在などより、身近なスノウの方が大切なのだ。

アクセルは心の中で安堵の息をついた。

*

「あの子の……名前……」

スノウは呟き、戻って来た記憶を思い返してみる。そのどれもが、名前の部分だけ聞きとれていなかった事によろしく気がついた。

(なんで……)

スノウは自らに愕然とした。

(なんで、覚えてないの？　なんで、名前だけ消えてるの？)

どれだけ思い出そうとしても思い出す事は出来ない。その事がスノウを追い詰めていく。それと同時に、妙な事だと心のどこかで思

った。

（あれだけ毎日のように聞いていたのに覚えてないのは変だよ。なんで？　なにが原因なの？）

名前を聞いているのに聞きとれていない事に、スノウは何者かの作為すら感じられる。

（落ち着いて。今はそんな事を考えている場合じゃない）

スノウは深呼吸をして荒れる心を宥めた。

（手掛かりがない訳じゃない。今の私には記憶がある。その記憶を辿れば、名前の欠片くらい見つかる事が出来るはず）

例えば文字。スノウの視界に一度でも名前の入ったモノがあれば、読む事が出来る筈だ。

スノウは必死に記憶を辿るが、少女の書いた文字を見た事はあっても名前を見た事はなかった。少女が机の前に座り、鉛筆を指で遊んでいる姿しか浮かばない。たまに書いていても、それは数字の羅列だったり、文字の練習だったりした。

（文字からは無理。なら、会話の端々に名前を連想する様なモノは……簡単に見つかる訳ないか）

スノウは思わず苦笑いを浮かべる。他人に指摘されてようやく気付いた事を、今更思い出せるとは到底思えなかった。

そういえば、とある事にスノウは思いを巡らせる。

（私の名前、あの子がつけたんだっけ？）

スノウはその時の事を思い返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4773w/>

星屑たちの祈り

2011年12月2日19時56分発行